
天と地と

aaa_rabit

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天と地と

【Nコード】

N8709L

【作者名】

aa|rabit

【あらすじ】

少女は世界を拒絶し世界は少女を拒絶していた。
愛を知らない少女は生まれ変わった世界で人に触れ、少しずつ心を知っていく。

自サイトと全く同じものを転載しています。

設定集（前書き）

作ってみました、初期設定。

こうして書いてみるとえらい登場人物が多いです。

なんとか使い回したいのですが、残念ながら二部も新キャラ大量に。ちょこっとずつ増やしていきます。

設定集

第一章

・小さな村

リアナ・ミュリエル（十歳まで）…生まれ変わった世界で納屋に捨てられていたところをフィアとヨーテ夫妻に拾われる

フレイ・ミュリエル …別の街で働いている、細工師

フィア・ミュリエル …農民

ヨーテ・ミュリエル …農民

・スフェンネル家

リアナ・レイス・スフェンネル …スフェンネル家養女、お転婆娘、愛され主人公

リユーク・ゾア（シアン）・スフェンネル …スフェンネル家長男、ウェイザー子爵、青紫色の瞳、美青年（母親似、母↓絶世の美女で現皇帝の妹に当たる）栗色

ベイル・ロート・スフェンネル …スフェンネル公爵、青紫色黒髪

ユーナ …リアナ付きの侍女、五人のうちの一人

フェラー夫人 …作法教師で都でも名高い優秀な教師

シャックス …愛称シャス リアナの護衛 代々スフェンネル公爵家に仕える騎士の一族

ジュード・コア（リーデ）・スフェンネル …スフェンネル公爵家次男、竜騎士、士爵位

リュシー …ブルードラゴン、ジュードの相棒

ゼイス・ゾア（シアン）・デーリン …デーリン伯爵家長男、竜騎士、サザーン子爵

グレン イエロードラゴン …ゼイスの相棒

第二章

・皇都

リトル・ゾア・グルテア …スフェンネル家遠縁の息子、焦げ茶色の髪、黒紫色の瞳、公式にキエリファと婚約している、後見人はスフェンネル公爵、竜騎士補佐、第二皇子の専属護衛、長髪、皇都へ来た時点で十一歳

ルークーフエル スタードラゴン …リトルの相棒 ウェイアーの直系子孫、他のドラゴンより一回り大きい、雄

ヴァリアス・ロート（リーデ）・バーリアス …愛称ヴァリー
第二皇子、黒髪、紫色（出会った当時十五歳）、バリエッタ公爵、
子供以降はバリエッタの名を継ぐ。竜騎士隊長

テイク …スタードラゴン ヴァリアスの相棒

リュディアス・シアン・バーリアス …第一皇子（出会った当時三十八歳）、弟ヴァリアスの育て親、愛妻家、黒髪、紫眼

キエリファ・ユーシア・バーリアス …愛称キーフア 第二皇女、リトルの六歳年上、第四部隊隊長、強い男が好き、黒檀色の髪、紺紫眼、男前だが体格は長身細身

ジェラルド・シアン・バーリアス …リュディアスの第一子、リアナより五歳年上、三兄弟の末っ子、女関係が派手、リュディアスそっくりの腹黒さ、後の皇太子殿下

ヴィエッタ・ユーシア・バーリアス …リュディアスの妻で三児の母。侯爵家の娘で紫紺の瞳を持つ華やかな人、皇后殿下、暗い栗色の髪

・竜騎士

総勢38人＋補佐1（リアナ十一歳現在） 竜騎士の証したる白にドラゴンのエンブレムを施された制服を身につけている。竜騎士とは神聖なる生物ドラゴンを従えるウエリート集団。城内を除く帝国の軍部をまとめる部署でもある。その為多忙。能力は高いが変人が揃っている。

1～10番隊 ……実働隊

11～100番隊 ……国境や地方の警備隊

9のつく2桁番隊 ……救護部隊、戦時以外は病院勤務、定期的
に警備隊の詰め所へ派遣される

6のつく2桁番隊 ……魔術師部隊、魔術塔と繋がりを持ち基本
の勤務は警備隊と変わらない、魔術師に対する犯罪に駆り出される
場合が多い

3桁ぞろ目隊 ……隠密部隊、暗殺、偵察何でもござれの暗部

クート ……竜騎士

カラル ……竜騎士、副隊長、1～10番隊を率いている

ドリュウ ……竜騎士

サンス ……竜騎士 50～58番隊を率いている、地方周り専門

レミア ……グリーンドラゴン サンスの相棒

クレハ ……竜騎士 薬物専門、医療班を率いている

ロード ……竜騎士 ぞろ目隊の中でも国外の偵察部隊を率いて
いる

・その他

ウェイアー … 神の僕とされる最古のドラゴン、全てのドラゴンの母であり竜王ドラグニルの子供

ルトナ神 … この世界の神

・名前

ロート↓公爵位

ゾア↓子爵位

コア↓士爵位 (竜騎士は全員士爵位に当たる)

シアン↓嫡子

リーデ↓次子

レイス↓長女

ユーシア↓次女

名前+爵位+ (何番目の子供か) +家名

→公式以外に呼ばれることは滅多にない

これは貴族の風習で一般家庭に置いては名前+家名のみ

皇族の血が濃いほど鮮やかな紫の瞳を持つ。特に直系はほとんどこの色を持っている。貴族でも上位貴族は皇族の血を少なからず引いているので混じり気の紫色が顕れやすい。

・ドラゴン

ドラゴンの餌は主に魔力。普段は自然界から受け取っているが、人間に従っているドラゴン達は相棒から受ける。リアナを除いたスタードラゴンの主は魔力が賄いきれないためそれぞれの属性を持つ専属の魔術師と一緒に与えている。

開幕

「あーあ、つまんないの。もう少し遊べると思ったのにな」

ぽつりと少女が呟く前には、事切れた無数の死体が折り重なっていた。

いや、死体とも言えない。ただの人の形をした炭である。

『お前は这个世界で比類無き力を持つ。神すらも越えるほどにな』
『お前がいる限りこっちは商売上がったりだ。もうちっと加減しろよな』

純白の翼を持つ天使が哀れむように少女を見た。そして黒い蝙蝠の翼を持つ悪魔が
つまらなさそうに鼻を鳴らす。醒めた目つきで少女は二人に視線を合わせた。

力でねじ伏せる事は容易い。実際少女の力を持てば神すらも凌駕する事は、
この世界に住む生き物にとって当たり前のことだったのだ。

『我が娘よ。何故人を殺す？』
『我が娘よ。何故人を生かす？』

それぞれが主君たる神と魔王の伝言を少女に告げた。

天と地の住人ですら感嘆の息を漏らす完璧な美の調和を持つ少女は、ただ

興味なさそうに一言。

「気まぐれ」

少女は感情のままに生きていた。刃向かうものには死を。気が向けば生を。

そもそも、戦場でそれ以上のものが必要なのだろうか？とすら思う。たった

一人で戦局を傾けるほどの力を有する少女にとって、敵とは取るに足らないものであり味方は次の日には敵となるのだ。

その強大なる力を前にして人は敬い恐怖する。生にすら執着していない少女は、他者から死を貰うには強すぎたのだ。

そしてこの世界には最早少女に関わろうとする奇特な生き物は一人もいない。

神と魔王はそのことがひどく気がかりだったのだ。

彼等にとっては愛する娘。しかし彼等以外に少女を愛する、否、少女を見ようとするものは

誰一人としてこの世界にいない。そして少女も当たり前のよう受け入れている現実があまりに悲しい。

だから彼等は決心した。愛娘を手放すことを。他の世界の神々に接触し、とある神が受け入れを引き受けてくれたのだ。

そして少女は諸々と両親に従った。

今一度やり直すために。

両親の言う愛を知るために。

開幕（後書き）

初投稿です。拙い文章ですが良ければ見てやって下さい。

新たなる誕生

その日、古ぼけた納屋の一角で赤ん坊が産声を上げた。

か細い泣き声を聞いた老夫婦は驚いた。それも当然だろう。声を頼りに納屋へと走れば、父親の姿はおろか、生んだはずの母親の姿すら見当たらないのだ。

まさに生まれたばかりの赤ん坊を置いていくなど出来るはずもない。しかし老夫婦はこの奇妙な赤子を自分達の子供として育てることにした。

老夫婦には既に独り立ちした息子がいる。息子が手から離れ寂しく思っていたところに新たに子供を授かったと老夫婦は赤子の存在を喜んだ。

赤子の名前はリアナ>神様からの贈り物<と名付けられた。

リアナは大層聡明な娘だった。一歳の時には既に立ち上がり、二歳の時には大人も顔負けなほど流暢に言葉を話した。加えて美しい容姿が村で評判になっていた。光の加減によって、金にも銀にも見える絹のような髪に、高貴なる者しか身につけられぬ紫の瞳。辺境の地といっても過言ではないこの村で、リアナの存在は当に奇跡だった。

溢れんばかりに惜しみなく注がれる愛情の中で、リアナはすくすく育っていた。最初は戸惑い、やがて自然と受け入れるようになっていた。

よく泣き、よく笑う。前世の名の無き少女からは考えられないほどだった。

「どうしたんだい？リアナ」

リアナを膝に乗せた青年、リアナの義兄に当たるフレイが覗き込む。リアナは何でもないと言って笑って回した腕に少しだけ力を込めた。甘えた仕草に珍しいと思いつながらフレイは頭を撫でて抱き寄せる。

温かい。この世界に生まれ直してから初めて温かいということを知った。優しい義父母に義兄、いつも何かと気にかけてくれる村人達。

リアナが初めて接した人間であり大切な人達であった。

「お兄ちゃん、大好き」

「俺もリアナのことは大好きだぞ。ほら、高い高い」

「きー」

首筋にしがみつきのながら、きやらきやらと笑う。微笑ましそうに見える両親達。ミュリエル家は今日も平和だ。

「まったく母さんも酷いよな。掃除の邪魔だから散歩に行つてこないでさ」

「散歩は嫌いなのか？」

手を繋ぎながら二人はあぜ道を歩いていた。里帰りしていたフレイが家でだらだらしていたところ、掃除をしていた母に追い出されたというわけだ。手伝っていたリアナも息抜きにと追い出され、こうして二人でのんびり歩いているのである。

「嫌いじゃないよ。街より空気良いしな。でも、店も何もないからつまらないな」

街だったらカフェで飲んで、買い物をしてと、いくら可愛くても

相手がうんと年下の妹なのは若干不満だが、暇つぶしも出来るのだが。

「……お兄ちゃん」

服の裾を引かれ、我に返ったフレイは訝しげに怯えた様子のリアナを見、顔を上げた。こんな小さな村では、住人全員が顔見知り。こんなところまでやってくる行商は少なく、彼等がやって来るには季節外れだ。

何より嫌らしい笑みを浮かべているのが、怪しすぎる。

フレイは彼等に気づかなかったふりをしてそっと妹を抱き上げた。踵を返して村へと向かう。

「よう、兄ちゃん。ちょっと聞きたいことがあるんだよ。教えてくれないか？」

無言で足を速めるフレイに舌打ちし、彼等は先回りして道を妨げた。足を止めたフレイは、しっかりとリアナに腕を回して前を見据える。

「何の用でしょうか？」

「へっ。そう怯えなさんな。俺達に用があるのはそっちの娘っ子だけだ」

「うちの妹は産まれた時から村を出たことはありません。あんた達のような余所者とは関係ないと思いますが？」

「そっちに関係なくてもこっちは関係あんだよ。雇い主がその娘をご所望だ。拒否をすれば、判るよなあ」

ぴくりとフレイの方が揺れた。次第にリアナの瞳から生気がなくなっていくことに誰も気づかない。

「お断りします。妹は渡さない」

「交渉決裂だな。ま、仕事分だけ働かせてもらいますか」

多勢に無勢。しかも子供一人を守りながらなんて余程の手練れでなければ勝てるはずもない。それにフレイは細工師だ。仕事である繊細な指を傷つけては、一生を棒に振ることになる。

ソナナコトハユルサナイ。ジャマモノハハイジヨスル。

リアナを抱くフレイを中心にして、突如強風が生じた。囲もうとしていた男達は、もんどり返ってその隙を逃さずにフレイは一気に村へと走る。完全に油断していた男達は追いかけるかしようとするも、その距離はとても追いつくようなものではなかった。

村の外れまで全力で駆け込んだフレイは、後方を確認してからようやくリアナを地面に降ろした。鬼気迫る勢いで走ってきたフレイから事情を聞いた村の住人が、村長のところへ知らせに行ってくれたのでひとまずは安心だろう。

「さっきのは魔術だよな？ 凄いぞリアナ。さすが俺の妹！」

座り込んでいたフレイを心配そうに覗いていたリアナは、伸びてきた腕によってぐしゃぐしゃになるまで頭を撫でられる。街で暮らしているフレイだからこそ、魔術に対する偏見を持たずその価値を正しく知っていた。

お前のお陰で助かったと褒められたリアナは、しかし顔を俯かせた。

本当はあの時、彼等を消すつもりだったとは言えない。目くらましをして、その隙に証拠も残らず燃やそうとしたところで、フレイが一気に逃げ出したのだ。もしフレイが一目散に逃げてくれなかったら、確実に殺していた。

それはいけないことだと、この世界で過ごす中で何となく判っている。

微かに震える手で、頭を撫でる兄の手をそっと握った。

この暖かさを無くさなくて良かった。

今頃になって怖くなったのだと勘違いしたフレイが、慌てて抱きしめるのを感じながらほうとリアナは息を吐いた。

新たなる誕生（後書き）

11／28 ちよつと改稿

分岐点（前書き）

一気に主人公が成長します。その間のあれこれはまた別の機会に。

分岐点

十歳になり、リアナは義父母の農作業を手伝うようになっていた。

朝起きて一番に卵が採れているかを確認し、新鮮な乳を搾り、竈に火を焚く。義母のフィアが朝食の支度をする間に水を汲みに行き、朝食を食べ終えたら畑仕事へ。腰を痛めた義父ヨーテの代わりに鋤を握り、耕していく。

当初はリアナのような少女が鋤を扱うことに義父も反対していたが、軽々と操っているのを見て諦めた。村人達も当初は驚いていたが、今では遠くから大声で挨拶をするだけだ。

毎日鋤を握っているのに肉刺一つ無い白い手の平。見てくれば人と同じでも、驚異的な再生能力は明らかに人を越えている。

昔はその能力を破壊のために使っていた。まさか自分の力が何かを作ることに関立つなど思わなかったのだ。

全てを破壊していた昔の自分が愚かだったと今なら言える。

「……アナー。リアナー！」

「お母さん？どうかしたの？」

息を切らせたフィアにぽんと肩を叩かれたリアナは、条件反射で素早く距離を取る。産まれ直したと言っても、長年の戦場生活が染みついているためだ。単なるスキンシップだと身体が未熟だった頃から判っているのだが、早々忘れられるものでもない。誤魔化すように、落ち着いて、と背中をさすりながら、リアナは不安を隠し

て呼吸が整うのを待った。

「領主様からの使者が来たんだよ。すぐに来ておくれ」

「領主様が？どうして……」

「判らないけど、安心おし。お前は家の子だよ」

曖昧に頷き、ひとまず手を止めたリアナは、目を丸くするフィアを背負いながら風の速さで駆け抜ける。家に帰ればヨーテが厳しい顔をして待っていた。

こんな義父の顔を見たいわけではないのに。義父がこんな顔をするのは大抵決まっている時だけ。半ば確信しながら、ヨーテの後を付いていく。

お茶を飲んでいた男はリアナを見て驚愕し、すぐさま隠すように笑顔を浮かべた。

「貴方がリアナ・ミュリエル嬢ですか？」

「は、はい。お初にお目にかかります」

スカートを摘んで右手を胸に置き、膝を折る。一度だけ村長の奥さんがしていた動作を真似してみた。

まさか田舎娘がきちんとした礼を返すとは思わなかったのか、男はまたも驚いていた。男に促され、対面するように席に着く。

男はリュウグ・スフェンネルと名乗った。

「先程貴方の義父上にも伝えましたが、実はリアナ嬢を我がスフェ

ンネル公爵家に養子として迎えたいのです」

「公爵家……リユグ様も公爵家の方なのですか？」

「ええ。末端ではありますが、名を連ねております」

貴族であるとしかりアナには判らない。やっぱりと思いつつ、これまで打診してきた人達は、はっきりとリアナに邪な目を向けていた。しかし、彼からはそれが感じ取れず、困惑する。顔に出ていたのかリユグはくすりと笑った。

「失礼。先に理由を述べるべきでしたね。貴方は複数の人間から狙われているとでもいいますか。ああ、いえ。これは脅しではありません。片田舎に住んでいる美しい少女。誰もが欲しがるのは容易なことでしょう？」

「……」

「見て見ぬふりをするのもまた選択の内でしょう。ですが貴方はご自分の両親を危険な目に遭わせるつもりですか？ 貴方の美しさは誰もが手に入れたいと望む。そのためなら手段を選ばない者もいるでしょう。例えばバーロック氏とかね」

途端に義父母の顔色が蒼白に変わった。握られた手から振動が伝わってくる。

「貴方は……。貴方も私を手に入れたと思いますか？」

「は？ あはははは。いえ、ご心配なく。私も父も貴方をどうこうしようとは考えておりませんよ。ですが、貴方に興味はありますね」

眼鏡を外して涙を拭くりユグ。余程ツボに嵌ったらしい。リアナはリユグに好感が持てた。

しかし、ファイアとヨーテは違うらしく、暫く考えさせて欲しいと

何とか絞り出した。リユーグはお見通しだったのだろう。また十日後に来るとだけ伝えてあっさりと暇を告げる。

リアナは馬車に乗ったリユーグの後に続いて飛び乗った。両親が驚くのも気にせずリユーグが馬車を走らせる。

「おや？このまま来てくださるんですか？」

「私がこうすることもお見通しでしょう？本当のことを教えてください」

まいったなと初めてリユーグが笑顔以外の顔を見せる。リユーグは座席に凭れさせかけると、御者に村を一周するように伝えた。

「先程といい、どうやら貴方はただのお嬢さんではないらしい」

「当然のことです。農民の小娘一人が狙われているから養子縁組をしたいだなんて、貴族がするわけ無いでしょう」

「その通りですよ。我々は何よりも体面を気にする人種ですから。偽善するほどお人好しではありません」

リユーグはあっさりと肯定する。それが当たり前だと。清々しいほどに傲慢で、だからこそ信じられた。嘘で塗り固められた綺麗事を口にするようなら、即座に断るところだ。

「リアナ嬢。この国の皇族は皆貴方と同じ瞳の色を持っていることはご存じですか？」

知らない。皇族などに興味はない。素直に首を横に振るリアナに、でしょうねと馬鹿にするでもなく、リユーグはあっさり頷いた。

「これはこの国の建国神話に由来するのですが、とにかく一般市民

が持つことはあり得ない、とだけ今は憶えておいてください。まして、混じりけのない色は直系にしか受け継がれないはずなのです。皇族の後宮はきちんと管理されているし、貴方がどなたかの御落胤だとも考えられない。そして、ご両親が貴方を見つけられた際、貴方は寸前までへその緒が繋がっているような状態だったとか。周囲に母親の姿すらないとは随分奇妙な話ですよね」

真実を知っているリアナは頷くこともせず黙っていた。この髪は父親たる神から、瞳は母親たる魔王から受け継がれたとは言えない。

「貴方の存在は皇家の神格性を揺るがしかねないですよ。ですから、もし申し出を断るようでしたら、私は王の臣下として貴方を殺さなければならぬ」

つまり生きるためには話を受けるしかないと言うことか。または殺される前に逃げ出すか。その場合両親の安全も確保しなければならぬし、逃亡生活を余儀なくさせる。結局元の世界と変わらない生活を強いられるのだ。

まあ、この国丸ごと滅亡させるのもやぶかさではないが、別世界にいる両親と自分を受け入れてくれたこの世界の神に申し訳が立たない。

これまでも、リアナの美しさを眼にした者が手に入れようと何度も打診してきた。直接両親に頼み込む者もいれば、非合法、つまり攫うようにして欲する者もいる。その度に、村人一丸になって追い出してくれた。

ここにいてもいいのだと、厄介者だと爪弾きにする人間は一人もいなかった。リアナはその優しさにずっと甘えていた。彼等の立場

が悪くなるのを知っていたのに。

リアナは溜め息をついた。ここまで質の悪い相手はいなかっただけで、近い未来こうなることは予想できていた。

それが今だったただけだ。

「もし私が申し出を受ければ、自由に生きてもいいんでしょうか？」
「それは貴方次第かと。最低限のマナーは身につけて貰いますし、公爵家に入った以上は公爵家の名が付いてくることは忘れずに」

つまり貴族として一生を縛られると。その中で動くのならば構わないらしい。

「私を恨みますか？」

「ええ。でも、正直に話をしてくれたことに感謝してます。それに貴方のことは嫌いじゃありません」

丁度馬車が止まった。ドアを開ければ自宅前。フィアとヨーテが待っていた。

「光栄ですね。……では、良いお返事を期待していますよ」

去り際にリユークが頬に唇を落としていく。無謀なことをしたりアナをフィアとヨーテが抱きしめる。馬車は静かに行ってしまった。

「あんたって子はなんて無茶をするんだい！」

「母さんの言う通りだぞ！ あんまり寿命を縮めさせんでくれ」

小柄な体でリアナも精一杯抱きしめ返した。

この人達に迷惑をかけたくない。

リアナの中で既に決心はついていた。

別れと新しい家族

リアナの答えを聞いた両親は泣いた。

フィアはリアナを守るからここにいてくれと縋った。ヨーテは自分の不甲斐なさを嘆いた。

リアナは心が痛かった。こんなにも思ってくれる人達を置いていくことが辛かったのだ。それでも、二人に甘えて生きていくわけにはいかない。人を殺すことに躊躇いはないが、両親の前でそんな姿を見せたくなかった。二人が悲しむことが判っていたから。

「ごめんね、お父さん、お母さん。でも楽しみなんだ。美味しいご飯だって食べられるし、綺麗な服だって着せてもらえる。お父さん達の負担も軽くなるし良いことだらけだよ」

フィアとヨーテはリアナが嘘を並べていることを知っていた。リアナは農作業を嫌がるどころか楽しんでいた。フィアの作る料理を美味しいといって喜んでいた。

幼い十歳の子供が両親を安心させるために嘘をついているのだ。こんなに優しい娘に何もしてやれないのが悲しかった。

一度決めたら引かない娘だと二人は知っていたので、リアナが決めたことなら二人は泣く泣く受け入れた。

次にリユークが来るまでの七日間、リアナはいつも通りの生活を送っていた。それがリアナの望みだったのだ。村人達は別れを惜しみ、喜んでくれた。

都会で働いているフレイも帰ってきていた。義兄は泣かなかったが、本当に良いのかと一度だけリアナに訊いた。リアナが頷けばそうか、といったもののように頭を撫でた。リアナはフレイに頭を撫でられるのが好きだった。

日常はあつという間に過ぎ、迎えの馬車はやってきた。馬車の前で待っていたリュージュは、リアナの顔つきを見て悟った。

「娘さんを頂きます。責任を持って育てます。あなた方の大切な者を奪って申し訳ない」

リュージュはフィアとヨーテ、フレイに頭を下げた。公爵家縁の者に頭を下げられた三人は慌てたが、受け入れた。

リアナは身一つでいい、こちらで全て用意させるとのことだったので、荷物はリアナの片手で持てるだけだった。寧ろリュージュの方があまりに少ない荷物に驚いていた。

「本当にこれでいいのかい？」

「はい」

ヨーテが捕ったうさぎの皮をフレイが町の職人に頼んで作ってもらったぬいぐるみ。そして、生まれた時につけていたブレスレット一本当の両親からの贈り物一、フィアがリアナのために織ってくれたリボン。それだけだ。

「体に気をつけるんだよ」

「つらくなったらいつでも帰っておいで」

「元気だな」

三人とそれぞれ抱擁を交わし、リアナはリュージュの助けを借りて馬車に乗った。公爵家の馬車ともなると、振動がほとんどない。

ともすれば行きたくないと呼んでしまいそうな口を締めて微笑う。馬車を通り過ぎるたびに、村人達は門出を祝った。リュージュはそれを咎めることもなく、リアナは村が遠く見えなくなってもずっと窓辺で微笑っていた。微笑っていなければ耐えられないというよ

うに。

リユーグが腰を掴んで引き寄せれば大人しく身体を預けてくる。抱き寄せてぼんぼんと背中を叩いた。

「辛かったら泣きなさい。私はリアナの新しい家族になるんだから甘えても良いんだよ？」

驚くほど華奢で軽かった。大人びてはいても十歳の子供なのだ。半ば強制的に親元から引き離されて辛いはずがない。

リユーグは自分が不思議だった。どちらかといえば冷めた性格をしている。利用するためなら手段を選ばないし、リアナに対しても割り切っているはずだった。家族など他人と大して変わらないし、実の弟にすらこんな事をした憶えもない。

しかしリアナは泣かなかった。ぎゅっと皺が寄るほど上着を握り締めたがそれだけだ。リユーグのことはどちらかと言えば好感を持っている。けれど彼に縋ることを佳しとはしなかった。

彼は生粋の貴族である。感情よりも優先されるものが多い。今日味方で明日は敵なんてこともざらにある。相手に弱みを見せることは禁物。リアナが踏み入れた世界はそんな世界なのだと理解していた。だから決して依存はしない。彼等との間に絶対などないのだから。

互いを思いながらも、何処かちぐはぐな二人を余所に、馬車は進んでいく。

一日馬車に揺られて、ようやく公爵が屋敷を構える街、ディルトンへと入る。そこから丘陵地帯である街の端に構える屋敷までは更に時間を有し、面会が適ったのは日にちを跨いだ所だった。深夜だというのに、出迎えた使用人達は100人を下らない。その使用人達の一番手前にいた男が、彼等を代表して短く挨拶をした。道中リユーグに教わった通り簡単に返して、男の案内で公爵の元へと足を

向けた。

スフェンネル公爵ことベイルは眠気を噛み殺しながら、娘となる少女を待っていた。先触れは既に到着しており、間もなく屋敷内が騒がしくなったのでそろそろだろう。成り行きで養子にしたが、果たしてどのような娘なのか。

執事のヨードに導かれた少女を見た瞬間、ベイルは目を疑った。芸術家が追求した美を体現したかのような美しい少女だった。屋敷内で明らかに浮いているみずばらしい服でさえ、彼女の美しさの妨げにならない。そして、強い光を秘めた紫の瞳が、少女を彫刻ではなく人に見ていた。

成る程、息子が気に入るわけだとベイルは笑みを浮かべた。もうすぐ四十になるというのに童顔が幸いしてか笑うと三十にも見えるとは、本人は気づいていない。

「お初にお目にかかります公爵様。リアナ、と申します」

「よく来たなリアナ。今日よりこの屋敷がお前の家。不自由の無いよう取り計ろう」

「ありがとうございます」

「今宵は疲れただろう。挨拶はこれくらいにして休むがいい」

リユージュが使用人に指示を出し、リアナが姿を消す。リユージュは疲れた目元を解しながら促されるままにソファに座った。

「噂通り美しい娘だな。なかなか良い目をしていた」

「お気に召したようで何よりです。つきましては父上に一つお願いが」

「許す。あの娘はお前に一任しよう。ああ、だが朝食の席は設けるように」

「ありがとうございます。では私も今夜はこれで失礼します」

後に残された公爵はゆつくりと紫煙を燻らせた。さてあの娘をどうしようかと考えながら。

別れと新しい家族（後書き）

展開が早すぎる気がするので、所々手を加えたいです。

とある公爵家に務める侍女より1

公爵家の朝は、先日養子に入られたお嬢様をお捜しすることから始まる。

まさに究極美といっても過言ではない美しさを持つ小さなお嬢様は、公爵様から末端の使用人まで全員の大切な宝物なのだ。

農民出身ということだが訛りもなく、立ち居振る舞いも堂々としていた。毅然としながらも決して驕ったところはなく侍女達もすっかりお嬢様に心酔していた。

そんなお嬢様だが一つだけ困った癖がある。朝になると必ず何処かに消えてしまうのだ。

ある時は屋根の上、またある時は嫡男のリューグ様の寝室と毎回違うのが頭痛の種である。朝食は必ず公爵様とお摂りになられるので、その時間までに見つけなければならないのである。因みに公爵様はお嬢様との朝食を楽しみにしておられるので、見つからないと一日不機嫌になるのだ。

裏庭を捜していた私は、お嬢様が見つかった合図を耳にしてほっと息を吐いた。今朝はどうやら早く見つかったようだ。

侍女としての仕事を果たすべくお嬢様の部屋へと向かう。今朝は若君が見つけたようで、若君に抱っこされたお嬢様と廊下で遭った。

「いつもご苦勞様、ユーナ。リアナも謝りなさい。いつもいつも抜け出すなんて淑女としてはしたくないですよ」

「…はあい。ごめんなさいユーナ」

神妙に謝るお嬢様だが、次の日にはまた脱走することは経験済みである。こればかりは、若君ですらも止めることが出来ないのだ。

「朝のいい眠気覚ましになりますわ。さ、お嬢様。お支度しましうね」

若君からお嬢様を受け取った私はそのまま浴室へ。既にお嬢様の湯浴みの準備は出来ているのだ。戻ってきた侍女仲間と服を選び、髪飾りを用意している間に体を清め終えたお嬢様が戻ってくる。

これからが侍女の見せ所。金と銀を混ぜたような美しい髪は、櫛で梳くごとに艶を増していく。

お嬢様の髪を梳くのは侍女の中でも人気の仕事なので、毎回持ち回りでやっているのだ。手触りといい質感といい女として羨ましい限りである。自分達で仕上げたお嬢様を見送った後はお部屋のお掃除だ。今朝もお嬢様がどれだけ美しかったかを讃えながら、シーツを替え埃を拭いていく。

食事を終えたお嬢様は、図書室でお勉強され午後からはマナーのレッスンがあるのでお部屋に帰ってくるのは夕食を終えてからになる。

マナーレッスンはあの有名なフェラー夫人を招いているので、私達侍女にとってもお勉強の時間なのだ。レッスンに控える侍女は五人、その内お嬢様付の侍女は二人だけなのでこれもまた持ち回りでお互いに教え合うのが日課だ。

今日は私の番でしたが、お嬢様は非常に優秀な生徒です。初めて間もないのに、既に洗練された動きをマスターしていっちゃる。厳しいことでも有名なフェラー夫人が手放しで褒めるほどののだ。それはマナーレッスンに限らず、勉学でも遺憾なく能力を発揮されるのだから恐れ入ります。

私達のお嬢様は自慢のお嬢様なのです！

話が逸れました。マナーレッスンを終えた後は、夕食の準備が整うまで一時の休憩時間です。

その時間になると、またもお嬢様はふらっといなくなってしまう

ますが、こちらは特に心配ありません。なぜかって？朝とは違いそれは必ずお嬢様が屋敷内のどこかにいらっしゃり、時間になると戻ってくるからです。ある時は厩へ、また別の時には厨房へとうやう屋敷内を散策されているようです。

本来でしたら私達が付き添うべきなのでしょうが、若君から好きにさせてやってくれとのお達しなので敢えて知らぬふりをしているのです。

戻ってきたお嬢様の服を替えて送り出した後は、お休みの支度を始めます。シャボンの香りがするシーツやカバーを掛け、安眠効果のある香を焚きしめます。これも若君の指示で、お嬢様はあまりお休みになられていないようだからです。

こそつと覗いてみたところ難しい本をお読みになっていましたので、恐らく夜遅くまでお勉強されているのでしょう。お嬢様は努力家でもあるのです。湯浴みで上気した頬を染めるお嬢様は可愛らしいです。

これは侍女の特権でしょう。

お休み前に一杯の紅茶をお淹れして挨拶をして下がります。その後はお嬢様の素晴らしさを日記に書き込み私の一日は終わります。

追記

マナーレッスンで憶えた事を忘れてしまい、仲間に怒られました。そこへたまたま通りがかったお嬢様に助けられました。一分の隙もない動きに感嘆の息を漏らさずにはいられません。

良ければみんな一緒に受けられるようにしましょうかと仰ってくれました。

優しいお嬢様。わたくしは一生お嬢様についていきますわ！

とある公爵家に務める侍女より1（後書き）

リアナさんの一日を侍女視点から書いてみました。
難しいです。

公爵家の次男とドラゴン

あれから一年が経った。

リユージュに課された”令嬢”として身につけなければならない全
ては学び終え、リアナは自由を満喫していた。

といってもあと数年もすれば、社交界へと参加しなければなら
ないし、今でも最低限は参加しているのだが大半は自由なのである。
屋敷の住人はリアナの味方であったので、庭いじりをしていようと
眉を顰めるものは誰もいない。

今や庭の一角はリアナの家庭菜園と称した畑が広がっている。勿
論屋敷の主たる公爵に許可は取って。

そしてリアナの少し後ろには専属の護衛騎士シャックスがいる。
ふらふらと気ままに出かけてしまいうリアナを心配した公爵がつけた
のだ。

「またこちらに見えたのですか。侍女達が探していますよ」

「またシャスに見つかったか。何で判ったの？」

早朝のリアナ搜索もシャックスの仕事である。そして彼には悉く
リアナが隠れそうなところを知っているようだった。

「勘、でしょうか。天候によって隠れる場所が違うようですけど」

リアナは目を丸くした。短時間でよく判ったものだ。侍女やリユ
ージュなどは未だリアナの周期性を見いだせずにいるようなのに。

「本日のご予定はどのようなさいますか？」

「どうでしょうか。…つつ！あれは！？」

太陽が翳ったかと思えば、巨大な飛行物体が二つ頭上を通り過ぎていった。瞬く間のことで、本で読んだことはあっても実物を見ることが初めてなリアナは興奮していた。

「あれが噂のドラゴンね！？ あっ、あそこに降りるみたいだわ。行きましょう」

「リアナ様！？」

何もかもが規格外な令嬢は、三階建ての屋根から躊躇うことなく飛び降りた。そのまま厩舎へと駆けていくのが見える。やれやれと嘆息しながらシャックスは後を追いかけるべく屋根を伝い降りた。

ドラゴン。母親たる魔王の眷属にして、魔物の最上位種はとても人懐こい性格をしていた。幼い頃は背中に乗せて貰って飛んだ憶えがある。

そしてこの国では、ドラゴンは人に飼われているらしい。第二皇子率いる竜騎士隊というのは騎士達の憧れなのだ。一握りの魔力を持ち、ドラゴンに気に入られた人間のみが竜騎士となれるのだとか。他にも選ばれた皇族がドラゴンを持っているらしい。

外壁のすぐ傍に降り立ったことを確認しながらリアナは馬を走らせる。外壁を守っていた兵士は、公爵令嬢の姿に驚いたようだがすぐに門を開けた。遅れてシャックスも駆け抜けていく。

久々の里帰りにスフェンネル公爵の次男ジュードは目を細めた。前もって父には帰還の知らせを送っているので、彼等の姿を確認した兵士がすぐに屋敷へ知らせを走らせるだろう。相棒のブルードラゴン、リュシーの首筋を叩いたジュードは地に降りた。竜騎士の証したる玉虫色にドラゴンのエンブレムを施された制服が風に翻る。

「まったく、急がせすぎだって。王都からスフェンネル領まで不眠不

休で一日半なんてマジありえねー」

「仕方ないだろう。父上から危急の知らせが届いたのだ。大体なぜお前まで付いてくる？」

「友達のよしみだって。それに噂の美少女が見たくってさ」

イエロードラゴンから降りた同期のデーリン伯爵長男のゼイスが朝日を忌々しげに睨めつけていた。ドラゴンに乗るのはそれだけで体力を使うのだ。寝てないことも相まって体が鉛のように重い。

「ふん。噂など当てにならないだろう」

実家で少女が養子になったことは手紙で知っていた。更に宮中ではその娘が美しいと評判になっているのだが、ジュードは耳半分に聞いている。

なんせ彼等を産んだ母親は絶世の美女として知られているのだ。生憎ジュードは父親似であったが兄のリューグは母親似で美青年である。ぶっちゃけそこら辺の女より遙かに整っているだろう。そんな家族に囲まれたジュードにとって大抵の美しいは当てにならないのだ。

「けどよ。その髪は金糸銀糸の如く艶やかでその瞳は至高の色、その容姿は女神もかくやって言うじゃないか。気にならない方がおかしいだろ」

「女など五十過ぎれば大して変わらん。むしろ大切なのは中身だ。……っと、迎えが来たようだな」

どうやら単騎で先触れでも来たのだろう。しかしその姿が明瞭になってくるにつれて、ゼイスはともかくジュードですら目を見開いた。

ありえないと咄嗟に頭が拒否を起こす。一昼夜不眠不休で疲れて

いるのだろう。どうやら幻でも見ているようだ。

「わぁ！これがドラゴン。綺麗！」

馬を下りるなりふらふらとドラゴンへ近寄っていく美少女に我に返ったジュードが制止するも遅かった。

知らない人間にドラゴンが牙を剥き、少女を丸のみせんと迫る。少女の体が血に染まるのを想像して蒼白になったジュードだがいつまでも悲鳴は聞こえなかった。

どころか認めた者にしか懐かない孤高のドラゴンが少女に気持ちよく撫でられているのである。

その光景にまたも二人が驚愕していると、遅れてやってきたシャックスが二人の姿を認めて膝を折った。

「これはジュード様。お帰りなさいませ」

「シャックス、か？大きくなったな」

代々スフェネル公爵家に仕える騎士の一族である少年を見てようやくまともな思考が戻ってきた。

「リアナ様！むやみにドラゴンに近づくのは危ないですよ！」

「大丈夫よ、シャス。この子達とっても大人しいもの。：そう、貴方がリュシーで貴方がグレンね。ええ、よろしく」

「：ジュード。俺にはあそこのお嬢さんがあいつらと会話してるように見えるんだが気のせいかな？」

「奇遇だな。俺もだ。リュシーの名前を教えた憶えもないぞ」

じゃれ合っているのか土が付くのも構わず少女はドラゴン二匹に舐められながら笑っている。ちよっと羨ましいと感じたのは秘密だ。

「えーと、お嬢さん。そろそろお名前を聞かせて貰っても良いかな？」

「あ、すみません…。ご挨拶遅れまして申し訳ありません、竜騎士様。私は」

「リアナ！ジュード！」

「兄上！」

「お義兄さま！」

え、とリアナはリュウグを兄上と呼んだ竜騎士を見上げる。馬車から駆け寄ってきたリュウグがリアナを抱き上げた。二人は視線を逸らさないまま確認し合う。

「ジュード…お義兄さま？」

「お前が義妹のリアナ、か？」

リュウグに降ろして貰ったリアナはスカート、ではないので男風に礼をする。よくよく考えれば簡単なことだった。確かに絶世の美少女といっても過言ではない容姿にシャツクスが仕える相手といえば一人しかいないのだから。

ふらりと近づいたジュードは高い位置で一つに纏められた髪を一房取った。指先から流れる感触は父ではないが癖になりそうである。光の加減によって金にも銀にも見えるのは面白い。

「…ジュード。その辺にしておけ？」

不躰なほどじろじろとリアナを見回すジュード。さすがに失礼だろうとゼイスが声をかける。

「む？ああ、すまんリアナ。俺が次男のジュードだ。よろしくな」

ぽんぽんと頭を叩かれる。これがリアナとジュード、そしてゼイスとの出会いだった。

手合わせ

「それにしても噂通りリアナちゃんって綺麗だなあ。あと五年したら俺の嫁に來ない？」

「え？それは……」

「おい。人の義妹に手を出すな」

「社会的に抹殺するよ？」

お兄さん二人がとっても怖いです、ハイ。

リアナの乗ってきた馬はシャックスが走らせ、現在馬車の中には四人が膝をつき合わせている。リユークがそんな格好で外に出るんじゃないとか、知らない人と話しちゃいけませんとか過保護な母親のようにリアナに言い聞かせていた。いちいち頷くリアナも大真面目である。

「ですがお義兄さま。この格好は私服ですし、知らない人と話せなければ道に迷った時に困ります」

「屋敷内でのみという約束だろう？それに道を尋ねる時はシャックスにでも頼めばいい」

「万一、一人で出かける時は？」

「そんな状況を作ることのないよう努力しなさい」

「まあいいじゃないか、兄上。その格好もよく似合ってるぞ」

「お前は甘い！リアナに一番似合うのはドレスだ。確かに私の古着を着ている姿は微笑ましいが、私は断固ドレスを推奨する」

「ですがいざとなった時に動くにはこの格好は適しています。遊ぶにも丁度良いではありませんか」

「お前はリアナの所行を知らないから言えるのだ。これ以上動かれたらこちらの身が持たん！」

「スカートでしたら行動は制限されますが、その分リアナの魅力が

下がってしまうのでは？」

ナンデシヨウカこの兄馬鹿丸出しな会話。

長年付き合いのあるジュードがこれ程熱い男とは正直思っていなかった。兄のウェイザー子爵も、落ち着いた人柄だと思っていたのだが全然違うようだ。

力無く視線を彷徨わせていると、濁りのない紫の瞳と視線が合う。にこりと微笑みかけられて少しだけゼイスの気持ちちが上向いた。この可愛さなら兄馬鹿になる理由もよく判る。

リアナの私服について熱い議論を兄弟が交わしている間に公爵の屋敷へと着いた。

二年ぶりに帰還した次男を屋敷の使用人総出で迎える。リアナの格好に目を剥いた侍女が慌ててリアナを屋敷に引っぱっていくのを視界の端に納めながら、ジュードは挨拶を返した。公爵はバルコニーで待っているとのことなので、制服だけ脱いで席に向かう。

席には既に着替え終えたリアナと公爵が楽しげに話していた。こちらに気づいたのかリアナがジュードに席を譲る。名残惜しげにしながらも公爵は次男を笑って出迎えた。

「久しいな、ジュード。あれから二年か。頑張っているようだな」

「父上こそお元気そうではありませんか。危急とのことでしたので慌てて帰りましたがどうかしましたか？」

「それでも言わん限りお前が帰ってこんからだろう。：おお、ゼイス君も大きくなったな」

「お邪魔してます、スフェンネル卿。ご健勝で何よりです」

「ははは。まだ若い者には負けんよ。娘とはもう会ったのだろう？あれは随分跳ね返りだな。ちっとも心が安まらんわ」

公爵は楽しそうにリアナについて話す。いつまでも続きそうなり

アナの話を遮ったのはリユグだった。使用人がほっとしながら食事を用意する。暫くは他愛のない世間話だった。

「そうだ。リアナ、折角だからジュードとゼイス君にお願いしたらどうだ？」

「よろしいのでしょうか？」

「父上！私は反対です。淑女が剣を握るなどー」

「剣？リアナは剣が使えるのか？」

「ああ。この街一番の使い手だぞ。もしよかったら一度手合わせをしてやってくれないか？」

竜騎士の称号は伊達ではない。少し手合わせしてやれば満足するだろう。残念ながら二人の認識は甘かった。

ありえない。剣を杖代わりに肩で息をしたジュードは思った。

自分の二倍は大きいであろう剣を軽々と振り回しながら舞う姿はとても同一人物とは思えなかった。変幻自在に動く剣筋は鋭く、速い。あんな小柄な体躯のどこからそんな力が出てくるのだろう。

「強いな」

純粹に感心した。清々しいまでに力量差がありすぎるのだ。どこで憶えたのか、時折こちらがひやりとするほど急所を狙ってくる。確実に命を奪うための剣。それがリアナの剣だった。

今もゼイスの剣が空を舞って地面へ突き刺さったところだ。切っ先を喉元に突きつけられゼイスが降参と手を上げている。

「……驚いたね。美人なだけじゃなくて剣まで強いときた。リアナちゃんては何者？」

「さあ？少しだけ他の人より力の強い女の子、でしょうか。それよ

りもゼイスさん。約束守ってくださいね？」

「あはは、判ってるよ。いつがいい？」

「すぐにでも。グレンが乗せてくれるって言ってたの。グレンは旋回が得意なんですってね」

「よく知ってるな」

「リュシーはお義兄さまのことが大好きなんですって。でも朴念仁だからもう少し乙女心を判って頂戴、と言っていました」

もはや何を訊いても驚くまい。ドラゴンと会話が出来る？それが何だ！リアナならばそれも有りだ！

二頭のドラゴンはリアナの姿を見るなり嬉しそうに喉を鳴らす。リアナはそれぞれに挨拶を交わしながら遣り取りをしていた。そして話がまとまったのかリュシーが勝ち誇った顔をしてリアナを乗せている。悔しそうにグレンが睨んでいた。

「じゃあお願いします、お義兄さま。リュシー」

「行くぞ。しっかり掴まってるよ」

見る間に下の景色が広がっていく。遙か上空であることも忘れてリアナははしゃいでいた。ジュードが落とさないようにと気を張っているのも今は気づかない。

美しい街は流れ、いつしか刈り入れを終えた田畑が広がっていた。何処か見覚えのあるそれにとくんと鼓動が大きく打つ。

ああ、ここは。

視点が変わっても忘れるはずがなかった。懐かしい我が家を。

リアナが公爵家に引き取られる際に捨てたもの。この時間フィアとヨーテは何をしているのだろう。胸が痛む。

気づけばジュードに抱きしめられていた。ジュードはリアナが何を思ったか知らないだろう。それでも感じ取ったに違いない。嬉しいと思うのに少しだけ罪悪感を感じる。

「どうした？怖くなったか？」

「ううん。少しだけ。……少しだけこのままで」

その甘えた仕草にジュードは胸を締め付けられる。何かがリアナの琴線に触れたのは想像に難くない。

リュシーも異変に気づいたのか、こちらを窺っているようだ。さすがに飛行中は危ないので大丈夫だという意味を込めて首筋を軽く叩いてやる。

下を見れば大分公爵領から離れていたようだ。

家出皇子

屋敷へ戻ろうとしたところで前方にスタードラゴンを発見する。まさかと隣を見ればゼイスも驚いていた。

『ありや殿下じゃねーか！何があった？』

これは魔術の一種だ。ゼイスは土系統の魔術を得意とするが、風を解して伝達するくらいの魔術は使える。でなければ、互いに疎通がとれないからだ。

ドラゴンの飛行速度は速くぐんぐん近づいてくる。護衛もなく単騎で操っていることが判った時点で二人は護衛に徹することにした。

「どうしたのですか？」

「すまない。少し寄り道をするぞ」

相手の気づいたのだろう。慌てて方向を変えようとするも、そうはさせじとゼイスとジュードで単騎を囲む。

「殿下！貴方は今お勉強の時間のはずでしょう。何をやってるんですか！」

『リュシー：そうか、お前はジュードだな！？ジュード、貴様今まで何をしていた！危急の用事で帰るとだけ告げて既に一月は経つぞ。職務怠慢だ！』

「そう言えば連絡するのを忘れていたな…」

『おいおい、ジュード。なに丸め込まれそうになってんだよ。ところで殿下！供もつけずにどちらへ行かれるおつもりです！』

『家出だ！もう我慢出来ん。大体お前達二人が一月も帰ってこないからいけないんだぞ！お前達が抜けた穴を必死で埋めていたジュー

ルが倒れ、また一人倒れと今や決裁できる人間が俺しか居ない。テイクとも逢えずに……。とにかくもう書類など見たくない！勉強？そんなもの暖炉にくべてやれ！」

殿下の言い分を聞き終えた二人は地平線へと視線を飛ばした。竜騎士は国の象徴であり軍を率いる者である。そのため国の兵士をまとめているのは実質竜騎士ということになるのだ。

一人につき一つの担当地区。それ故職場は激務なのだ。三十八人という少数精鋭であることも災いして、その内二人が居なくなればしわ寄せが全て他の人間に回ってくる。そして耐えきれずに一人が倒れ二人が倒れと悪循環が起こり、とうとう最高決裁を持つ殿下だけが生き延びたらしい。

しかしその殿下が、耐えきれずに城を出た今とてもではないが城へ戻る気にはなれなかった。決裁が滞った書類の山。想像するだけで身震いしてくる。

「と、とりあえず落ち着きましょう殿下！どうせ行く当てもなく飛び出してきたんでしょ？」

『……………』

どうやらその通りらしい。ドラゴンが降りられそうなところへ誘導して着陸する。ドラゴンが風で補助しているので衝撃はほとんど無い。ひとまずジュードは自分の上着をリアナに貸してフードを被せるよう指示した。訳が判らないながらもとりあえずリアナは従う。リュシーに降ろしてしまったりアナは目を輝かせてドラゴンへと走っていった。男三人はリアナの行動に注意を払っていなかったのだ、そのまま手を伸ばす。

不思議な色合いを帯びたドラゴンだった。リアナの髪ではないが見る角度によって色合いが違うのである。同じ色の瞳を見つめ合った双方はドラゴンが頭を下げることで折り合いがついた。

可愛いなあと口元を弛ませながら首に抱きつく。スタードラゴンも満更でもないのか誇らしげであった。

「そう、貴方はティークっていう名前なのね。よろしくね、私はリアナよ」

「キュウ」

「え？ 貴方があの有名なスタードラゴン？ そう…貴方は眷属の子孫なのね」

「キュ、キュウ！」

「駄目よ。私は今肉体を得ているの。確かに会いたいけれど難しいわね。…ふふ。お前は優しいのね」

ティークの額に唇を落とす。上位種に頭を下げていたリュシーとグレンが悔しげにティークを睨んだが、生憎リアナは気づかなかった。

すっかり臍を曲げてしまった殿下を宥め賺していたゼイスはドラゴンたちが騒いでいることに気づき、顔を上げた。

今更驚くことでもないが、王族でも限られた者にしか頭を下げないというスタードラゴンがリアナにすっかり懐いていた。それが面白くないのかグレンやリュシーが時折爪で地面を蹴っている。なんというか、シニールな光景だった。

「どうしたゼイス？」

「ん？ ああ、いや。すげえ光景だなと思ったただけだ」

訝しんだ殿下は後ろを振り向き、絶句した。自分以外に触れることを許さないティークが小柄な少年？ に顔をつけているどころか舐めているではないか！ 自分でそんなことをされたことがないのに。

「…あれは誰だ？」

絞り出したような低い声にジュードは苦笑した。正に自分もリユシーが同じ様な反応をした時リアナに嫉妬したからだ。

それ程にドラゴンとの絆は深いのである。

「彼女…いや彼は遠縁の息子ですよ。将来竜騎士になるのが夢です。なかなか有望な少年です」

脇腹をゼイスに突かれるが気にせず嘘をついた。彼はリアナの正体が気づかれるのを危惧したのである。

万一にでも殿下がリアナに一目惚れしたら、リアナが遠くに行ってしまうではないか！それだけは断固阻止せねばならないと家族ぐるみで共犯である。

幼いことも手伝ってリアナが表舞台に出ることはほとんど無い。そのため噂が一人歩きしているだけで、実際に見たことのある人間はほんの一握りだろう。

「ふうん？ お前がいうからには腕に自信があるのだろうか？」

「ええ。いづれ判ると思いますよ」

「楽しみにしているぞ。ところで名前は何というのだ？」

「リー…リトルです」

「リトルだな？ よし憶えたぞ。滞在中は俺が相手をしてやろう」

楽しそうな殿下にまづいと思った時にはもう遅く。

殿下が公爵家に滞在中一度は手合わせの機会を設けることになったのだった。

一瞬の邂逅

リアナを連れて空中散歩に行つてくると告げたジュードが第二皇子を伴って帰ってきた時、屋敷内は上から下まで混乱の渦に巻き込まれた。

突然の第二皇子の来訪に大急ぎで支度を調える。リユーグは弟に怒鳴りそうになるのを我慢しながら、公爵に代わって出迎える。

「しばらく世話になる」

急遽皇子のために設えられた部屋は、三階の一番南に位置しリアナの部屋とは正反対にあった。彼等は徹底的にリアナと皇子が接触するのを恐れたためだ。

「さすがスフェネル公爵家だな。城と思えば随分小さいが、内装に贅を凝らしているのか」

下手をすれば城にある自室よりも余程金がかかっていそうだと客間を与えられたヴァリアスは室内を見回した。

ジュード達と話し合った結果、内密に三日間だけ公爵家に滞在し城へ帰ることだったのだ。地方の視察と違って完全にお忍びであったため、少なくとも三日間は自由である。外壁の内側であればどこへ出歩いて構わないとのことなので、ヴァリアスは早速出かけることにした。

急遽屋敷へ戻されたリアナは、自室に閉じこめられていた。扉の前には二人の兵士が立つという念の入れようである。いざとなれば窓から逃亡することもやぶかさではない。

「お義兄さま、外に出してください」

「駄目だ」

「お義兄さま」

「…っ！駄目です！」

上目遣いにお強請りされてぐらりと揺れそうになった理性を必死で留めたリユグ。何杯目になるか判らないお茶を喉に流し込んだ。リアナが逃亡しないようにとの処置としてお茶会を開いているわけだが、そろそろ胃袋が限界である。いつもなら楽しいお茶会も、今回ばかりは苦行だった。

「はぁ…。どうして外に出てはいけませんの？」

「客人に見苦しい姿を見せるわけにはいかないだろう。我慢しなさい」

「客人が第二皇子だからですか？」

どうやらばれているようだ。下手に嘘をつくよりも正直に話した方がいだろう。

「その通りだよ。今はまだ君の存在を公にする時期ではないからね。しばらくは私の可愛いリアナ義妹でいておくれ」

膨れている桃色の頬に唇を落とす。それだけで怒りが消えたわけではないがリアナは受け入れた。大人しく頭を撫でられていたリアナだが、そう言えばと思い出す。

「お義兄さま、私竜騎士になろうと思います」

「は？」

「ジュードお義兄さまが殿下に私を竜騎士を目指す少年と紹介してしまいましたの。ですから近いうちにシャックスとお城に上がりま

すわ」

「え？ ええ！？ …ユーナ。今すぐにジュードを呼んできなさい！」

指差されたリアナの侍女が慌てて呼びに行く。時を置かずして顔を現したジュードにリユーグは冷ややかな眼差しで説明しろと迫った。

「兄上？ 状況がよく…」

「リアナを竜騎士にするとはどういうことだ？」

怒っている。常より青紫色の瞳が濃くなっている時は兄が怒っている証拠なのだ。洗いざらい吐かされたジュードは、視線を外されたことでようやく額に滲んだ汗を拭き取った。

「殿下がリアナと手合わせをする際に手を抜けばいい。そうすれば単に少年の憧れで終わるだろう」

「そんな簡単にいくでしょうか？ 殿下は御年十五でられますが、国でも有数の使い手。騙し通せるかどうか…」

「ならば得物を変えればいいだろう。普段使うリアナの剣ではなく、小剣を使えばどうだ？」

慣れない武器を使えば確かに難しいかもしれない。よしそれでいこうと当の本人そっちのけで二人は細々と話し合った。

そして、当の本人といえはこっそり窓から抜け出していた。

ここならば見つからないだろうと木の枝に座って目を閉じる。風がリアナの髪を遊び、心地良い太陽光が眠気を誘う。しばし身を浸らせているところへ無粋な音がリアナを邪魔した。

落ちた小枝を踏んだ音の方へとリアナが視線を向けるのと、男が緑の世界で場違いな色彩へと視線を向けるのは同時だった。混じり

けのない紫の瞳が絡み合い、一時の時間を切り取る。

誰もが美しいと賞賛するであろう少女に目が離せない。この世に存在して良いのだろうかと思ふような美しい少女は次の瞬間驚くような行動に出た。

木から飛び降りるかと思いきや、宙に浮いたのだ。それが魔術だと気づいた時には強い風が吹き、少女の姿はない。夢か？男は幻のような少女を忘れられなかった。

一方、リアナは気が緩んでいたとはいえ迂闊にも接近を許してしまった己を悔やんでいた。

見間違えような黒髪に同じ瞳の色をした青年は第二皇子である。目が合ってしまったからには百計逃げるに限る。目隠しに強風を起こし、その間に遙か上空へ逃げた。兄達のお陰で少なくとも公爵令嬢とは気づかれていないはず。

怒られるのを覚悟で自室へ戻った。

一瞬の邂逅（後書き）

あと一話載せたら、設定集に着手します。登場人物が多すぎるので、まとめようかと。作者すら判らなくなってきましたので。↑おい。

旅立ち

鏡に映った姿はどこをどう見ても可愛らしい少年にしか見えなかった。

「凄いわ、みんな！ありがとう」

親指を立てたままリアナの笑顔を正面から見た侍女が鼻血を流して倒れているが気にしない。幸せそうだし放っておいても問題ないだろう。

「お嬢様駄目ですわ。今はリトル様なんですから」

「あら。でしたらお嬢様ではなくお坊ちゃまですわね」

焦げ茶色の髪に黒に近い紫色の瞳をした少年がにこりと微笑む。鏡越しに直視してしまった哀れな侍女がまた一人散った。扉をノックする音が響いてリユーグが顔を出す。

「用意は出来たかい？リアナ。……ふむ」

頭の中から爪先まで往復させたリユーグは顎に手を当てた。

「いけない道に走ってしまいそうな可愛さだね。よく似合ってるよリアナ」

物騒な言葉と共にリアナを抱き上げる。ぐりぐりと頬擦りしながら可愛いを連発するリユーグ。

くすぐったいですと言葉では言いながら抵抗する様子はないリアナとリユーグの姿に、ほうと生き残った侍女達は感嘆の息を漏らす。

何と絵になるお二人だろう。美男美女ならぬ美男美少年ではあるが、違和感がないのだ。改めてお嬢様の侍女でよかったと思う三人だった。

「兄上！一体いつまで…」

乱暴に扉を開け放ったジュードはかぱっと口を開けたまま硬直した。実に見目麗しい青年と少年が戯れる図。いや、片方は実の兄でもう片方は義妹の筈である。間違っていない、よな？

「ジュード、扉を開ける時はきちんとノックをして静かに開きなさい。扉が壊れてしまうだろう」

「すみません、兄上」

「ああ、もう時間だな。いいかいリアナ。武器はジュードに用意して貰ったから、手加減して負けるんだよ」

「はいお義兄様。ではなく、リユージュ様？」

「いや、兄上でいいだろう」

「ですが遠縁の息子なので、立場上兄上は拙いかと。騎士見習いですし、リユージュ様もしくは若君になるか？シャックス」

「僕の弟分ですから様でしょうか」

「判ったわ…判りました、シャックス先輩？」

慣れとは恐ろしい。リアナは口の中で何度か反駁してから練習場に向かった。

「お待たせしました殿下。リトルを連れて参りました」

リアナは騎士の作法に則って、膝を床について頭を垂れる。許しがない限り顔を上げてはいけないのだ。

「ああ、堅苦しい挨拶は無しにして始めるぞ。いつも通りにすればいい、リトル」

ジュードから受け取ったリアナはその場で二、三回振り回した。しっくりこないが、まあ大丈夫だろう。

急所を狙いそうになる度に動きを止めるリアナを不審に思いつつヴァリアスは小剣をはじき飛ばした。あっさり手の平からこぼれ落ち、参りましたと頭を垂れたところへヴァリアスが首元に切っ先を突きつける。

慌てたのは外野だ。止めようとしたジュードとシャックスにリアナが目配せする。

「お前どういうつもりだ？ 態と手を抜かれるのは不愉快だ」

答えなければ許さないと冷えた眼差しが告げていた。恐れながらリアナは目線を上げる。

「私はいつも通りに致しました。嘘では御座いません」

「ではいつも手を抜いていると？ 竜騎士を馬鹿にしているのか！」

「いいえ。ですが本気を出せば殿下を傷つけることになります。万一にでも殿下に傷を付ければ、一族が憂き目にあうのは必至。それでも構わないと申しますか？」

「俺は十分に自分の立場を理解しているつもりだ。例え我が身に傷が付こうとお前自身にも処罰がつかぬと宣言しよう。いいな、ジュード？」

「……畏まりました、殿下。リトル。本気でやれ」

リトルは頷き、小剣を拾わずに立った。口を開きかけたヴァリアスを先回りして言う。

「今度は本気でございます。徒手空拳ではありませんが、極力被害を避けるためと告げておきます。殿下こそ本気で相手してください。魔術も使ってくださいって結構」

「はっ！上等だ」

研ぎ澄まされた殺気がリアナの体から発せられる。それだけで膝が笑いそうになるのを叱咤してヴァリアスは唇を湿らせた。

魔術による身体強化によって十倍の速さでリアナに迫る。そのまま振り下ろしたところで、いきなりリアナの姿が消えた。

抜かれたと思った時には手刀が首筋に添えられている。剣は天井に刺さっていた。

「そこまで！」

ジュードの声でリアナは距離を取って一礼する。ヴァリアスは戦慄し、耐えきれずに膝を折った。力の差は歴然だった。

「あははは！面白い！リトル、お前魔術は使えるか？」

「はい？まあ、一応は」

「ジュード！俺はリトルが気に入った。こいつを俺にくれ」

「殿下！それは…」

「リトル。お前さえよければ俺の学友兼護衛になれ！身元もはつきりしていれば問題ないだろう」

手を差し出されリアナは混乱の極みであった。ここで手を取らなくても、外堀を埋められていつの間にかヴァリアスの傍にいたなんてことも本気でやりそうだ。しかしリアナは公爵令嬢で間違っても男ではない。

「考えさせてもらえますか？ち…公爵様に伺ってみなければお答え

できません」

「明日、出立するまでに決めておけ。よい返事を期待している」

楽しそうに笑いながらヴァリアスは練習場をあとにした。

話を聞いた公爵はうつかりカップを割ってしまった。しかしそれを気にするよりも怒りに支配されていた。

「駄目だ！絶対に許さん。誰が嬉しくて愛娘を騎士にする親がいる！私の方から殿下に断りを入れよう」

「父上の言う言葉も尤もですが、竜騎士として言わせて頂ければリアナを預けてはもらえないでしょうか？あの通り殿下は強さも相まって護衛を置くことを嫌うのです。それが今回殿下自らがハンティングしたのですから…」

「確かに殿下の護衛嫌いは有名だ。しかし、リアナは女。いつまでも続けられるものではないだろう」

「お義父さま、リユーグお義兄さま。リアナは行きとうございます」「リアナ！！」

ばんと机を叩いて公爵と嫡子がリアナに詰め寄る。落ち着いてくださいとリアナは淹れ直したカップを押しつけた。渋々受け取る二人。

「竜騎士になればリユーシーやグレンとずっと一緒にいられるでしょう？」

家族はドラゴン以下なのかと二人ならず三人はショックを受けた。悪気はない分余計質が悪い。

「公爵家の一員として、最低限の責務は果たします。それを妨げなければ構いませんでしょう？」

むしろその条件が呑めなければ、ヴァリアスに仕えることはしない。これがリアナの一線だった。

「：ジュードが最低限リアナの面倒を見ること。それから公爵家が後見となること。半年に一度は顔を見せること。三日に一度はリーグと夕飯を取ることに。月に一回は手紙を送ること。屋敷は王都別邸を使うこと。手入れを怠らないこと。シーズンには公爵令嬢として出席すること：」

ずらずらと百個ばかり並べられた条件に少し改訂を加えてリアナは了承した。

覚悟を決めたら引かないことは経験済みなので、公爵一家は溜め息をついた。こうしてリアナの城仕えが決まったのだった。

出立の朝。

リアナはヴァリアスのドラゴン、テイクに同乗することになっていた。

公爵家次男の見送りの名の下に、ベイルとリーグは思う存分別れを惜しんでいた。ゼイスもジュードもただ見守っている。リアナとの別れは身を切るような寂しさを憶えることを理解していたからだ。

あまりの過保護っぷりに理由を知らないヴァリアスだけが笑っている。

「お待たせしました殿下！：テイクよろしくね」

空高く舞い上がるドラゴン。故郷を視界に納めながら、リアナは少しだけ涙を流した。

旅立ち（後書き）

あっさりですが、ひとまず皇都に旅立ったってことで。スピノフ書きたいですがその前に設定集を次は載せます。

リトルという少年（前書き）

今回はずばり皇都に入るための手続き？でしょうか。
またも新キャラ登場です。

リトルという少年

スフェンネル公爵領で見つけたリトルという少年はヴァリアスから見て何もかもが規格外な少年だった。

竜騎士を率いる隊長の護衛として最低限竜騎士と同じ力量を求められる。

とりあえず、魔術がどの程度使えるのか判らなかったので、王都に着くなり魔術師の集まる魔術塔へ連れて行った。

素質や属性を調べるためにリトルを預けたところ、宮廷魔術師の名を冠する三人にリトルをくれと泣き付かれた。何でも極めれば国一番の使い手になるだろうと言うのだ。拉致されそうになってたところを間一髪で助け出した。

次に教師陣と引き合わせた。リトルはヴァリアスより四つ年下で、学友として扱うには無理があるかもしれないだろうと思ったからだ。完全に杞憂だった。各分野の教師を唸らせるような知識の持ち主で、研究所に是非くれと所長直々に嘆願書が届いた。勿論却下した。

最後に復帰していた竜騎士達に引き合わせた。彼等は優秀なのだがそれぞれ変人である。大いに人格に問題があろうと実力さえあれば問題ないという根っからの実力主義だった。

リトルは圧倒的な実力を持っていたためかはたまた素直な性格が幸いしてか、顔合わせの際には絶句していた（顔立ちはこの世の者とは思えないほど整っているの）がこちらの予想通りあっという間に馴染んでいた。

その後連れて行った厩舎で騎士達のドラゴンが例外なくリトルに群がるので凄いことになっていたが。

そして現在リトルは皇太子たるヴァリアスの兄、リュディアスの

膝の上で寝ている。

兄と言えば、愛おしそうにリトルの頭を撫でていた。

色々間違っていないか？と思うが兄の子供は既に親離れしており寂しかったらしい。

単に顔合わせだけの筈だったが、すっかりリトルを気に入ったようであれこれかまっているうちにリトルが眠ってしまったのだ。

「いっそリトル君僕の息子にならないかな？ いやそれよりも息子のお嫁さんにいいかもしれないな」

「兄上！？ リトルは俺のものです。あげませんよ！ 大体リトルは男です。嫁は他に当たってください」

虚をつかれたリュディアスはヴァリアスは知らないんだったなと思いついた。リュディアスも皇帝も公爵から直接リトルの事は聞いているのだ。つまり性別を偽っていることも知っている。初見でなぜこれ程可愛いのに女の子だと思わないのかむしろヴァリアスの感性が不思議だ。

「良いじゃないか、別に。綺麗な顔してるし女の子の格好をさせれば問題ないよ。でも寝顔は可愛いなあ。そう思うだろう？」

我が兄ながら理解不能だとヴァリアスは諦めた。冗談なのか本気なのか柔和な面立ちからは判断がつかないからだ。

「……確かに可愛いとは思いますが！ リトルは男です。全く、この程度で寝るとは。体力をつけてやらないといけないな」

「リトル君はまだ十一だよ？ 育ち盛りなんだから寝かせてあげなよ」

「甘やかしては軟弱な男になります。起きろリトル！ 帰るぞ」

耳元で叫ばれ、身じろぎしたリトルは目を開けた。

眠そうに目を擦る姿は愛らし：じゃなくて、腕を引っぱって自室へ戻る。

ヴァリアス専属の騎士としてリトルの部屋はヴァリアスのすぐ隣だ。部屋は一枚の扉で繋がっており、いつでも駆けつけられるようになっていたが、なぜかドアはリトル側からしか開けられない。

これは兄の仕業だった。リトル専属の侍女に後は任せ、ヴァリアスはベッドに倒れ込む。

疲れる一日だった。

竜騎士の儀式（前書き）

お、お待たせしました。

竜騎士の儀式

次の日リアナはヴァリアス率いる竜騎士隊に連れられて、ドラゴンの生息する禁域へ来ていた。

竜騎士隊は禁域の外で待機し、実際中に入るのは皇族たるヴァリアスとリアナだけだ。

竜騎士として正式に入隊するために自分の相棒となるドラゴンを選ぶためだ。

実際はドラゴンに選ばれるのだが、当然ながらドラゴンに選ばれなければ竜騎士になることは出来ない。

大抵は本人の属性によってドラゴンを選ぶ基準になるのだが、生憎リアナは全ての属性を持っているためどのドラゴンと契約を交わすのか騎士達の間で賭になっているのは秘密だ。

さて禁域へと足を踏み入れたはいいが、いつもはうるさいドラゴン達が息を潜めて伺っていることにヴァリアスは首を傾げた。大抵は侵入者を察知して姦しいほどにドラゴンの鳴き声が森中を支配するのだ。

「様子がおかしいな。いつもならば威嚇してくるのに大人しすぎる」

ドラゴンは基本的に獰猛だ。自分より下と思えば、容赦なく攻撃を加える。そのためドラゴンを得るまでに命を落とす人間も少なくない。

ドラゴンが人間を選ぶ基準は様々だが、屈服させるのが条件である。つまり、ドラゴンが自ら頭を下げた時にドラゴンが認めたことになるのだ。そして今、ドラゴン達は二人を遠巻きにして完全に頭を下げているのである。いっそ不気味なほどだった。

「さてどうする？この中から選んでもいいし、もう少し登れば上位種もいるだろうが」

禁域の奥、巨大山脈へと近づくほどにドラゴンの格は上がっていく。つまり歳を経て、力あるドラゴン達が山奥に集まっているのだ。入り口付近は年若いドラゴン達ばかり。

「上へ行ってもいいでしょうか？ここの子達は恐れているみたいなので」

「恐れる？」

リアナは曖昧頷くだけでヴァリアスはそれ以上問うことはなかった。

結局あれから半日歩き、さすがのヴァリアスもここまで奥へ足を踏み入れるのは初めてである。

日も暗くなり、野営の準備かと思っているところで突如として頭上が翳った。何事かと見上げる二人の前にこれまで見たドラゴンより倍以上は大きなドラゴンが土煙を巻き起こして降りてきたのだ。

ウェイアーとヴァリアスが力無く呟く。そのドラゴンは巨体を折り曲げてリアナの前に頭を下げた。本能が圧倒的強者を前に警告を発する。ヴァリアスは動くことも出来ず、ただ硬直した。

ドラゴンの優しい眼差しにリアナはそつと鱗に触れる。

『よくぞ参られました。■■■■■。初源の神子よ』

実の両親より与えられた真の名を紡いだドラゴンにリアナは目を見開く。

「なぜそれを貴方が」

『我は竜王ドラグニルの子供ゆえ。今でこそ主ルトナ神に従っておりますが神子のことは父や主から聞いておりました』

「そう。ルトナ神には感謝を伝えてください。今の私ではお会い出来ないから」

『承った。神子には我が眷属を。少しでもお役立てれば良いのですが』

ウェイアーの咆哮が響き、一頭のドラゴンが降り立つ。本来なら皇族の一族にしか従わない虹色の鱗を持つドラゴン、スタードラゴンだった。ヴァリアスの相棒ティークとは比べ物にならない強さを秘めている。呼ばれたドラゴンは神の子を前にして当然の如く頭を垂れた。

『これは私の末息子。やんちゃ坊主ですが、能力は随一でしょう。どうぞお連れ下さい』

「ありがとうございます。……殿下。僕この子にしました」

「あ、ああ。いいのか？」

「保護者の同意もとれましたし。名前はええと……そうですね。ルークーフエル。おいでルー」

ルークーフエルは名前を与えられたことで嬉しそうに嘸き、リアナに頭を擦りつける。ドラゴン達が頭を下げる中、リアナは意気揚々と禁域を後にした。

「お前はつくづく規格外だな」

「そうですか？」

「ちゃんと守ってやるから」

「ヴァリアス様？」

髪を掻き混ぜられる。後ろで相棒となったルークーフエルが騒い

でいるようだが無視。リアナが無理矢理引き剥がすまでそれは続いた。

既に報告は王都へもたらされている。

新たな竜騎士の誕生とそして皇族以外に従うことはないスタードラゴンの乗り手に今頃宮中を震撼させていることだろう。誰かの御落胤かと大きな噂になっているに違いない。当の本人はそれだけはないと断言していたが。

これは最悪リュディアスの言う通りリアナが皇族入りする日も近いかもしれないと一人ごちた。

竜騎士の儀式（後書き）

ストックから手直し修正していたら遅くなりました。大分ストックが無くなってきたので投稿が徐々に遅くなるかと。

テスト近い、レポート書かなきゃということ、誠に勝手ながらしばらく更新は遅くなる予定です。

立場

晴れて竜騎士となったりアナだが立場は少々、いやかなり複雑だった。

まずは竜騎士でありながら第二皇子ヴァリアス専属の護衛だということ。竜騎士の個人に与えらえられる仕事は軍の中枢を担うだけあって多岐に亘り、とてもではないが第二皇子の護衛まで手が回らないのだ。

次にあまりに若すぎることに。

そしてスタードラゴンの中でもトップレベルを誇るルークーフエルを相棒にしてしまったこと。

まず一つ目と二つ目だが、第二皇子が元々竜騎士を束ねる隊長であつたため竜騎士の称号を持ちながら実質は補佐として働くことになった。担当地区や率いる兵を持たない代わりに皇子の護衛や各竜騎士の補佐が主な仕事である。

士官学校も出ていない、実務経験もないぽつと出の少年が突然補佐をするなんてと竜騎士の下で働く兵士達からやつかみが来ると思いきや、かなり熱烈に歓迎されていた。

あまりの激務に仕事をサボタージュしたりボイコットする騎士も少なくなく、そんな彼等に仕事をさせる存在として今や人気は鰻登りである。更に竜騎士達は変人揃いで有名で、それを御せる気数少ない人物としても尊敬されている。

そして最後だが、これはかなり紛糾したらしい。なんせ皇族の権威を揺るがしかねない事態なのだ。皇族に取り込むかそれとも抹殺するか議論は貴族達の間で揺れた。

最終的には生まれの身分は低いが後ろ盾があのスフェンネル公爵であることと、皇帝や皇太子が諸手を上げて賛成したことが決め手となり、皇太子の二番目の令嬢の許嫁として将来的に入り婿、つま

り皇族として名を連ねることで沈静化した。らしい。

というのも、当の本人は人伝に聞いたただだからである。恰好がつかないとのことで名ばかりの爵位と領土が与えられた以外変わったことはなかった。

「皇太子殿下の二番目の息女といえば、リトルの五歳年上の方ですね。確か第四部隊の隊長だったと思いますが」

冷めたお茶を啜りながらクートが丸眼鏡を押し上げた。いつも微笑みを浮かべ、学者然とした人物であるが彼も歴とした竜騎士である。

愛妻家として有名で、穏やかな人柄から竜騎士の中でも1、2を争う常識人として名高い。書類を届けに来たところでお茶に誘われ、リアナは休憩も兼ねて一服していたのだった。

「第四部隊といえば、副隊長のカラルさん率いる実働隊じゃないですか。強いんですね」

一から十番隊までは実働隊で職業軍人の花形でもある。戦場でも先陣に立つせいか気性が荒いので有名だ。イメージとしては筋骨隆々な人が勢揃いである。

「その内果たし状がくるかもしれませんよ？ 姫は自分より弱い男とは結婚しないと常々豪語していますから。ああ、今のところ竜騎士でも手合わせすれば勝てるのは十人くらいでしょうね」

十人と聞いてリアナは純粋に驚いた。竜騎士は基本官僚のような仕事ばかりだが、個人の戦闘能力は決して弱くない。どころか魔術の素養は勿論、何かしら武芸に秀でているため下手な武術集団より遙かに強い。生物の頂点に立つドラゴンを相棒にしている時点でそ

れは明らかであるが。

「万一にも貴方が負けることはないでしょうが、気の済むまでやらせてあげてください」

「？クートさんは殿下が苦手ですか？」

「あはは。……会えば判りますよ。それよりお茶をもう一杯いかがですか？」

「貰います。今日も良い天気ですね」

「はい」

どこかで爆発音と怒号が響いているが気にしない。官舎でそんなことは日常茶飯事なのでいちいち驚いては身が持たないのだ。遠くでリトルの名が呼ばれている。この後騒ぎの後始末をさせられるのだろうと思えば、いかに温厚なリアナとて溜息が出る。

せめてもの抵抗と注がれたお茶をゆっくり飲んだ。

立場（後書き）

サブタイトルが思い浮かばない！でも番号を付けるのは嫌なんですよ、はあ。

果たし状

ヴァリアスが勉強している間、リアナは魔術塔と研究所に足を運んでいた。

本来ならば必要のないことだがそれぞれのトップがヴァリアスにから是非にと泣き付いたからだ。待遇も破格で、専用の部屋まで用意されている。

魔術塔では実験体として研究所では植物の研究をしている。寒暖に強い植物の品質改良を主に手掛けているのだ。

そしてその土地は与えられた名ばかりの領地である。人口は僅か五人。つまり一家族が住んでいるだけの寂しい土地であった。

「領主様！よくきたべ。一通りはお言いつけ通りに耕したべが……」

一家の大黒柱の男が様子を見に来たリアナを見つけ駆け寄ってくる。一通り挨拶した後、耕された畑を見てリアナは一つ頷いた。

彼には試験場、つまり畑の管理を任せているのである。ちなみに給金はちゃんと出しているので食べていくのには困らなかった。

「今回は三種類持ってきたんだ。右からバク麦、リズ豆、レアナ草。きちんと分けて植えてくれる？それからこれが肥料で、三日に一度あげて欲しい。発芽したらまた知らせてくれ」

「判っただ。明日から早速とりかかるべ」

「ありがとう」

昼食を誘われたが断って、再び大空へ飛び立つ。ルーク・フェルは他のドラゴンよりも遙かに速く飛べるので、昼を過ぎる頃には王都へ戻って来られた。

午後からは執務の時間になるので足早に王宮を歩く。

「お前がリトル・グルテアか？」
「そうです」

途中大柄な男達に道を塞がれる。迂回しようと踵を返しかけたところで声をかけられた。仕方なく足を止めたリアナを正面から破壊力抜群の美貌を見てしまった男が怯む。

誰だろうと小首を傾げたところで何人かが鼻血を噴いて倒れたが、誰も助けようとはしなかった。

「何の用でしょうか？」

こうして一人でいる時を狙って絡まれるのは少なくない。ほとんどは顔を真っ赤にして走り去るか、迫ってくるか、倒れるかのどれかなのだが今回はどれでもなかった。

「た、隊長から貴方に伝言だ！」

手紙を押しつけられ、男達は逃げ去った。恍惚とした表情で倒れている男達は置き去りである。

訳が判らずも手紙を持ったまま、執務室へ急いだ。

「遅刻だぞリトル！右端は全部カラル、ドリユー、ジュードに渡せ。それからこれはサンスに。そろそろ視察から帰ってくるはずだ、逃げないように確保しておけ。それが終わったらこの本を長官に返してくれ。ついでに騎士隊長に兄上を甘やかすなど伝えろ。終わったらルーの手入れに行ってい。厩舎の奴等が泣いていたぞ。あとレミアの手綱を外して自由にしてやってくれ。全部終わったら戻るように。……何を持ってるんだ？」

「手紙です」

手を止めずに言い切ったところでヴァリアスがようやく視線を上げた。問題ないだろうと手紙をヴァリアスに渡す。

「先程兵士の方に貰ったのですが、誰からなのか判らなくて…」

差出人の名前がない手紙を裏返したヴァリアスは即座に顔を顰めた。押された封蝋に見覚えがあったのだ。紫の蝋が使えるのは皇族のみ。そして押された紋章は間違いなく姪のものだ。リアナに断つてから封を切れば予想通りの言葉が並んでいる。

「『本日鐘が七つ鳴る頃に第二練武場にて待つ』か。まあ、適当に頑張ってくれ」

「殿下？」

「今は二人きりだろう」

「でん：ヴァリー。よければ教えてくれませんか？」

言い直したリアナに気を良くしたヴァリアスは手紙を持ち主に返してペンを置いた。

「俺の姪っ子。といっても、全員年上なワケだけどな。キーファ姉上のものだ」

現皇帝の子供は皇太子であるリュディアスとヴァリアスだけだ。ヴァリアスが姉上といった時はつまりリュディアスの子供たちを指す。リュディアスの一番目の息女は既に嫁いでいるので、男達の呼んだ隊長という呼称から推測されるのは。

「リュディアス様の二番目の姫？」

「そういうこと。お前の許嫁からだな。大方手合わせの誘いだろう。」

姉上は強い男にしか興味ないから」

ようやく得心がいった。のだが、生憎今夜は先客がある。

「ヴァリー。この場合断ったらどうなりますか？」

「ああ、そう言えば今日はあの日だったな。俺からウェイザー子爵に話を通しておこう。それで問題ないな。因みに断った場合、姉上の部下総出で探された挙げ句に逃げても追い回されるから覚悟しておけ」

「……経験なさったんですね」

「訊くな。お前の腕ならまあ安心だから、適当に相手してやってくれ」

心なしか青ざめたヴァリアスに同情したりアナだった。

果たし状（後書き）

なんとかアップできました。誤字等ありましたらお知らせくださいませ。

勝負の行方

時間通り律儀に練武場へと入ったリアナは野太い歓声に迎えられた。よくよく見れば、昼間に会った男達である。

中には俺と一晩過ごしてくれなどと下品窮まりない野次も飛んでいたのだが、生憎リアナにそういった知識はなかったので微笑むに留めた。一瞬静けさが戻り、爆発的な熱狂が飛び交う。

そんな彼等を前にして、椅子に座り目を閉じている男装の麗人がいた。

皇家にありがちな黒髪を一本に纏め、背中へ流している。リアナは純粹に綺麗だなと思った。

「来たか」

組んでいた足を解いた麗人が、紺色の瞳でリアナを射抜く。

「女より美しい男というのは少々妬けるな。貴殿が我が許嫁、リトル・ゾア・グルテアで相違ないか？」

ゾアとは子爵位につけられる名だ。正式名を呼ばれてリアナは間違いないとにこやかに告げる。顔を背けた麗人はほとんど咳払いして己を戻した。

「キエリファ・ユーシア・バーリアスの名において貴殿に決闘を申し込む。私が勝てば貴殿との婚姻を白紙に戻したい。よろしいか？」
「僕としては問題ありませんが、これは政治的な結びつきですし一概に答えられません」

予期していなかった答えなのかぱかと口を開けるキエリファとその部下達。それは響く笑い声で遮られた。

「お父様!？」

「リュディアス様」

二人の声が重なる。ばれてしまったかと肩を竦めながら歩いてきたのはキエリファの父リュディアスとヴァリアス。そして兄のリュグとジュードだった。

「ごめんね二人の邪魔をして。でもやっぱりリトル君は惜しいなあ。今からでも僕の息子にならない？」

「ご冗談を、殿下。リトルは私達の弟同然。慎んで辞退させていただきます」

「どのみち選択肢はないけどね。暫くは貸してあげるよ」

リュディアスがにこやかに告げ、リュグが悔しげに睨みつける姿はなんだか新鮮だった。いつも丸め込まれる弟側としては一枚上手のリュディアスを応援したくなる。

「リュディアス様。僕は物ではありませんし強いて言えばヴァリアス様の物なのでヴァリアス様の許可を取ってからにしてくださいますか？」

「おやこれは手厳しい。ヴァリー、リトル君をしつかり繋いでおくんだよ？」

「? はい。わかりました兄上」

確実に理解していないだろうヴァリアスにリュグは頭に手を当てて、リアナも苦笑い。焦れたキエリファがんと地面を蹴った。

「父上、決闘の邪魔をしないでいただきたい」

「そうは言ってもキーファ。お前とリトル君の婚約は決まったこと

だ。我が儘も大概にしなさい」

「我が儘ではない！そんな貧弱な少年と結婚するなど真っ平ごめんだ」

「うゝん。ごめんねリトル君。君にこんな馬鹿娘を押しつけるのは悪いんだけど」

あっさり娘を無視してリアナに話を振るリュディアス。兄の腹黒さを垣間見たヴァリアスはこっそり目を背けた。

「いえ、可愛らしい方ですね。僕には勿体ないくらいですよ」

いえいえ、貴方の方が何倍も可愛いですよ。と満場一致の心の声は届かない。

「姫！確かに僕では貴方のような可憐な方から見れば頼りないでしょう。ですが貴方に相応しい相手でありたいと思います。だから決闘を受けます。それでもよろしいでしょうか？」

「構わぬ。貴殿の心意気は気に入った！存分にかかってこい」

邪魔をしないようにと壁際に寄ったヴァリアスは、勝敗の決まった決闘に苦笑を禁じ得ない。

「リトルの奴も健気だな。嫁にするなら確実に姉上よりリトルを選ぶよ」

「おや？ヴァリーはリトルのことが好きなのかい？」

「嫌いだったら専属護衛なんて頼みませんよ。……いざとなったら女装でもさせるか」

「殿下。そんなことをさせたらすぐにでもリトルは返して貰いますよ？」

そこらの女よりドレスが似合いそうだし、リトルなら何でも出来そう。一つ年上の甥ほどでもないが、ちらほら縁談が届いているヴァリアスとしては利用したいのだがそれをすればリユークが恐ろしい。

「鈍いヴァリアスにはリトル君をあげないよ？」

「あ、兄上？」

「だから皇家にリトルを渡すつもりはありませんと申し上げたでしょう」

狐と狸の化かし合いに挟まれたヴァリアスは体を縮こませた。

勝負は一瞬だった。

ヴァリアスと違って寸止めではあったが、ナイフがキエリファの首筋を捕らえている。鋭く研ぎ澄まされた闇が黒紫色の瞳に宿っていた。底知れ無さに膝をつきそうになったところで細い腕に支えられる。

「大丈夫ですか姫？」

先程の冷えた眼差しではなく穏やかな色が宿っていたことに知らず安堵を漏らしたキエリファは、綺麗な顔立ちに目を瞠った。いつの間にか横抱きされているのも気づかず見惚れる。

「姫？」

「だ、大丈夫だ！？それよりも降ろしてくれ」

睫毛が数えられるほど近くで見えていたことに気づいたキエリファはようやく己の状況を察した。暴れるキエリファに怒ることなくリ

アナは地面に降ろす。

「お、お前の想いは確かに受け取った！だがこれで勝ったと慢心せず、精進しろよ！」

「はい、姫。怪我はありませんか？」

心配そうに見上げられてキエリファの心臓は限界まで鼓動を刻んでいた。血液が顔面に集中し赤くなるのを抑えられない。

なんなのだ、これは！

彼に見つめられる度に心臓が張り裂けそうになる。彼に触れられた箇所が熱を持っている。

この想いはなんなのだ――！

「ない！これ以上近寄らないでくれ！」

「姫？」

一步下がればリトルが一步距離を縮めもう一步下がれば再び距離を詰められる。もう限界だ。

キエリファは即座に剣を収め走り去っていった。その様子を大半が啞然としながら見送った。それ以外の一部であるリュディアスは腹を抱えて大笑いし、ヴァリアスはリトルの漢っぷりに感心し、リユグとジュードは複雑だった。

後にはきよとんと首を傾げるリアナが残された。

花の園

副隊長カラルは女たらしである。野性的な肉体は女を興奮させ、その手練手管に数多の蝶が虜になったとか。

「で、だ。殿下も出かけるしお前も今夜は男になろうぜ、リトル。俺が奢るぜ」

「娼館、ですか。ところで娼館って何です？」

リユークが聞けば確実に激怒するであろうが、生憎お目付役のジュードはいなかったことが災いした。

無垢な少年にその道の先輩は色々と教えてやるものだと思気込んで、カラルはジュードの目を盗んでやってきたのだ。

「娼館っていうのはな、綺麗な姐ちゃん達とうはうはするところだ」「うはうは？」

「カラル。やはりリトルにはまだ早いのではないか？」

「甘いつて殿下。殿下が十歳の時には既に手取り足取り教えてやったじゃねーか」

洗面を浮かべるヴァリアス。彼はリユークからリトルを護衛とする際にくれぐれもと頼まれているのだ。一応こういう遊びは保護者の許可を取った方がいいのではないだろうか。

「兎に角仕事が終わったら裏門に集合な。他の奴等にも声かけとくからよ」

返事を返す間もなくカラルは手を振って出て行ってしまった。ジュードひいてはリユークとのお願いと天秤にかけて洗面を浮かべる

ヴァリアスに、リアナは無邪気に問いかける。

「殿下。娼館とは何ですか？」

「ん？ そうだな、花を売るところだ」

「花？ 花屋とは違うんですか？」

「（どこまで世間知らずなんだ？） まあ、行けば判るって。楽しみにしてろよ」

釈然としないながらもリアナは頷いた。

夕刻。仕事を終えた竜騎士達に連れられて色街へとやってきた。煌びやかな建物にぽかんと口を開けてしまう。夜だというのに城以上に眩しいのではないだろうか。

「なんというか派手派手しい所ですね」

男達が吸い込まれるようにして建物に入っていく。

騎士達もそれぞれ散っていく中、護衛も兼ねているのでリアナはカラルとヴァリアスと行動を共にしている。建物の中でも一際目を惹く豪華な建物へと三人は足を踏み入れた。

「いらっしやい、旦那。頼まれた用意は出来てるよ」

「おうありがとな。んじゃふたりとも行くか」

勝手知ったる何とやらでカラルは迷うことなく進んでいく。フードを取って良いと言われるまでは被っているのとヴァリアスに言われたので、通り過ぎていく女達が興味深げにリアナを見ていた。

「黄金の間はここだな。……ようこそリトル。大人の世界へ」

きざったらしく扉を開けたカラルに促され、ヴァリアスと部屋に入る。

水晶で出来たシャンデリラに甘ったるい香り。調度品はどれも一級品だと知れた。

ソファにはあられもない恰好をした五人の女性達が座っている。それぞれが三人の姿を認めると、上着を脱がせソファへ導いた。

その内の一人がリアナの外套を受け取った時、ぽかんと口を開ける。動きを止めてしまった仲間を咎めるように視線を向けた女達も同様に啞然とした。後ろではカラルとヴァリアスが笑っている。初対面でリアナを見た大半の人間は女達と同じ様な反応を返すのだ。

ヴァリアスは既に慣れた様子で女の前で両手を合わせる。大きな音に我に返った女は慌てて服を掛けに行った。

「随分と綺麗な子を連れてきたのねえ、旦那あ」

「新人のリトルだ。初めて連れてきたから可愛がってやってくれ」

「じゃああたしがやってもいい？」

「ええ！あんたは旦那担当でしょう」

「リトル君っていうんだ。カラル様あ、この子借りても良い？」

一人の女性を膝に乗せてワインを煽っていたカラルはいいぜとあっさり許可を取った。三人の女に手を取られてリアナは別室へ移動させられる。

「やだあ、この子お肌すべすべよお」

「きやく羨ましいわ。ねえこっちの方が似合うんじゃない？」

「ええーこっちよ。フリルの方が似合うって」

あーでもないこーでもないと騒ぐ女達にリアナはスフェンネル公爵家の侍女達を思い出した。姦しさに程度はあれど、誰もが同じ様

なものかと遠い目をしているリアナを余所に女達はそれぞれ着飾らせていく。

数十分後。

「完璧ね」

「絶対驚くわよ」

「折角だからカラル様達を驚かせましょうか」

力作を眺めて女達は頷いた。姿鏡には世にも可憐な美少女が映っていたのだ。つけ毛をカールさせ、薄く化粧を履いた姿は傾国の美姫もかくやと言わんばかりである。

こつちよと手を引かれるままにリアナは女達に囲まれて廊下を歩く。前方から客が来たのだろう、女達に言われた通り、頭を下げて廊下を譲る。すれ違うと思われた男はしかし、足を止めてこちらを見ていた。

「その子は新人？」

「は、はい」

ふうんと呟いた男がリアナの顎を掴んで顔を上げさせる。はっと息を呑む音がしてリアナもまた驚いていた。

澄んだ紫の瞳に簡単に纏められた黒髪。隠しようのない気品に溢れた姿。そしてよく似た顔の存在をリアナは知っている。

予想が間違いないかなぜ彼がここにいるのだろうか？

「君の名前は？」

「リトルでございます」

「そう。折角だからこの子に持ってきて貰ってよ。ヴィターニユの二十五年物を頼むよ」

「畏まりました。すぐにお持ちいたします」

満足げに頷いた男は、案内係を伴って角を曲がって行った。

「どうしましょう」

「落ち着きなさい。新人には手を出さない決まりよ」

「ジード様は上客だから逆らえないわ。リトル様。申し訳ありませんが」

おずおずと申し出た女にリアナは快く頷いた。男の護衛は何しているのかと問い質したい気持ちを抑えて。

「お安い御用ですよ、お嬢さん方。先程の方にお酒をお持ちすれば良いんですね？」

「今用意してくるからあゝ、ちょっと待っててねえ」

いくらリトルが許したとはいえ失態だ。残された女二人はこれ以上被害がないようにと手近な部屋で、後輩を待つ。程なくして戻ってきた後輩に、カラル達に伝言を頼み、ジードの元へリトルを案内した。

「……リトルが？」

「さっすがリトル。ちゃあんと女装を拝まないとな」

気分が昂揚しているカラルとは対照的にヴァリアスは渋面を浮かべて黙り込む。ジードという名に嫌な予感がするのは気のせいだろうか。

一本で金貨五枚はする高級酒を頼む上客。そして王家御用達の娼

館へ足を運ぶ人物。該当する人物は恐らく――。

そこまで考えたところで、舌打ちを隠さず身を起こす。ヴァリアスの様子を不思議そうに見上げるカラルを放って向かおうとした矢先に、来客の訪れが来た。通されたのはジュード。

「失礼します、隊長。リトルはどこにいますか？」

淡々と紡がれる中に苛立ちと怒りが見え隠れしていた。カラルも興が冷めたのか人払いをしている。

「それは、」

「女達のお遊びに付き合わされてるぜ？んなことよりお前も楽しめよジュード。今日は非番だろ？」

「皇帝陛下のご命令です。直ちにリトルを連れてこいとの」

「兄上が？」

極秘裏なのだろう。現にジュードは制服ではなく平服を着ている。命令とあらば従わなければならない。

ジュードの握り拳には気づかず、ヴァリアスは女を呼んだ。

花の園（後書き）

1
1／28 改稿

鈍さは罪？（前書き）

一応全年齢対象なのですが、ちょっとまずい、かも？しれないです。まずいだろうと思われる方、すみませんが教えてやってください。

鈍さは罪？

ノックをして声をかけてからリアナは部屋に入った。

今までの部屋とは違い、落ち着いていながら何処か上品な作りの内装だった。丁寧に磨かれた飴色の壁に、誰でも知っている、あの有名な画家の絵が大きく飾られている。

ジードは中央のソファに腰掛けていたが、リアナにして見れば完全に絵画の方に興味が移っていた。衣擦れの音によりやく他人に気づいたくらいである。

女達に教えられた通り、ワインをグラスに注いで部屋を下がろうとした。しかし背を向けたところで突然腕を引かれる。慣性の力に流れるままジードの膝の上に座ってしまった。

きょとんとするリアナに笑ってからジードはグラスを呷る。上向かされたかと思えば口を開けられた。ひんやりしたものが唇に押しつけられ、芳醇な液体が流れ込んでくる。

突然のことに咽せてしまったリアナの口から零れたワインをジードが舐め取った。

今のは一体何？

そちら方面の教育にはまだ早いと、徹底的に排除されていたために、リアナはジードの行動が判らない。ただ、触れた冷たい唇が気持ちよかった。

許容範囲を超えてしまい茫然自失のリアナをどう捉えたのか、ジードが唇を啄む。抵抗がないことに気をよくしたジードは小さな口の中に舌を入れた。さすがに驚いたのか逃げようとする頭を後ろから押さえて強引に絡ませる。

酸欠と突然の出来事に頭が真っ白になったリアナを助けたのはジュードだった。

蹴り倒す勢いで侵入を果たしたジュードは唇を触れ合わせている光景を見て激怒する。腰に穿かれた剣が相手に伸びようとしたところで。

「ジュードよせ！」

辛うじて間に合ったヴァリアスによって止められる。理性と感情で葛藤した後に、べりつと義妹を男から引き剥がした。荒く呼吸する唇は濡れて艶めかしい。咄嗟に視線を逸らしたジュードは入り口まで下がった。

「人の邪魔をしないでくれないかな、叔父上」

「やっぱりお前かジード。悪いがこいつは俺のものだ」

「僕が先に目をつけたんだけど？」

「残念だったな。あれは男で俺の専属護衛だぞ」

えと目を丸くしたジードに満足したヴァリアスはリアナを促して部屋を出る。大人しくジュードに抱かれていたリアナは頬を撫でる風でようやく己を取り戻した。

「あれ？ここは……」

「気づいたか、リトル」

「ジュード様」

今の自分の姿は酷くちぐはぐだ。女達によって着飾られた恰好の上に脱いだ外套をかけられ、腰に剣をつけている。気づけば馬上でジュードに運ばれていた。

「もうすぐ別邸に着くから我慢してくれ。兄上が待っている」

「リユージュ様が？今日はお仕事で忙しいはずでは」

「切り上げたそうさ。お前が娼館に行くと聞いて飛んで帰ってきたんだぞ」

無然とした様子にリアナは首を傾げる。そもそもリアナにとって娼館に女の人が沢山いてお酒を飲むところではなかったのだ。

けれど邸前で待っていたリユージュに強く抱きしめられて心配させてしまったんだなとすまない気持ちになった。

「ああ、リアナ。酷いことはされませんでしたか？貴方が娼館に連れて行かれたと聞いて心臓が止まりそうになりましたよ」

「ごめんなさいお義兄様」

「リアナが謝る必要はないですよ。全てはあの馬鹿皇子と愚弟が悪いのだからね」

辛かったら泣いて良いんだと言われ、益々リアナは困惑する。それに気づいたのはジュードだった。

「どうしたリアナ？」

「あの、ジュードお義兄さま。私は何か悪いことをしたのでしょうか？」

「……？」

「いえ、心配させてしまったようなので処罰されるような事をしてしまったのかと……」

色恋沙汰とは全くと言っていいほど無縁だったリアナにとっては至極当たり前の確認だったのだが、兄弟は顔を合わせて目で会話していた。

どういう事です、兄上

リアナの教育課程でそういった類は徹底的に避けてきました
将来的に考えてそれは、

リアナは永遠に私達の妹でいればいい。違いますか？

……そうだな

意見の一致をみた二人は頷いた。このまま言及せずにおこうと。
かくて誤認したままリアナの娼館騒動は呆気なく幕を閉じた。

「父上」

「おやお帰りジェラルド。夜遊びも程々にね」

「ええ。ですが今宵は面白いことがありまして」

「なんだい？」

「噂の綺麗な小鳥が一匹迷い込んできたんです。飼い主は小鳥に氣づいていないようですが」

父親と同じ顔をした青年は楽しげに笑った。父もまた満足そうに
頷く。

「気に入ったみたいだね」

「とても。なかなか美味しかったですよ」

「もう味見をしたのかい？困った子だ」

ワインをグラスの中で弄びながら脳裏に小鳥の姿を思い浮かべる。
無垢で何も知らない可愛い小鳥。

「あれは何も知らないようですね。苛め甲斐がありそうです」

本当に楽しそうな息子に珍しいと目を細める。環境か、はたまた

性格のせいかな何事にも冷めている息子がここまで興味を見せるとは思わなかった。

近いうちに会わせてみようか。期待に想像を膨らませながら、リュディアスは妻の待つ寝室へ向かった。

鈍さは罪？（後書き）

11／28 改稿

ドラゴンの独り言（前書き）

お、お待ちせいたしました。
とても短いですが、どうかお許しを。

ドラゴンの独り言

我が主はとても恐ろしく、そして優しい方だ。一日に一度は我に会いに来てくれるし、遊んでくれるのは楽しい。

だが主よ。なぜ我以外も構うのだ？主のドラゴンは我だけだというのに小童どもが調子に乗って我としては気に入らん。

主を独り占めしていいのは我だけなのだ。憶えておけ餓鬼共。

主と同じ紫の瞳を細めれば、慌てたように餓鬼共が散り散りなつて逃げていく。

主に仲良くしなきゃ駄目と怒られてしまったのだ。何で我が怒られなければならないのだ！

だが主にブラッシングされれば全てがまあいいかと思ってしまう。恐るべしブラッシング。我はこの時間が好きだ。

その後は訓練と称して主を背に乗せて空へ飛び立つ。これは我だけの特権なのだ。主とは他の人間共と違って我らドラゴンと意思疎通が出来るので手綱とやらも必要ない。

ドラゴンたる我にそんなものをつけようなどと片腹痛いわ！勿論主のためなら耐えられるが…。

主の愛らしい声が我を呼ぶ。主の隣には23番目の姉の息子の息子の……とにかく我から見れば取るに足らぬ小僧が従っている人間がいた。

む、主の隣は我のものだぞ。しかしあの人間は恐れ多くも主の主らしい。主がなぜあんな平凡な人間に従っているのか不思議だ。主は全てを統べる尊き御方なのに。

主自ら極上の魔力をいただき、我は肌もつやつや。さすが主の魔力は素晴らしい。最後にお休みの挨拶とかで主の唇が落とされ、我は巢穴に帰る。今夜も良い夢が見られそうだ。

皇家の陰謀 前編（前書き）

お待たせいたしました〜！晴れて夏休み。
頑張って更新したいです（願望）

皇家の陰謀 前編

騒動から数日後。週に一度の婚約者との茶会の席で、一番に頭を下げられた。ちなみに婚約者との茶会は名目で、正しくは婚約者一家に愛でられる会なのだが。豪華な顔ぶれに、宮廷人ならば誰もが憧れるであろう。

頭を下げているのは婚約者であるキエリファ。キエリファの両親も申し訳なさそうにしていた。

「あの、姫。頭を上げてください」

「愚弟に代わって私から謝罪しよう。貴方に不快を与えてしまったのは事実だ」

困ったなと内心想っていた。あの騒動の次の日、ヴァリアスからも謝られたし、恐れ多くもリュディアスからも内密に謝罪されていた。だがどれに関して謝罪されているのか全く心当たりがないのである。

酒を飲むのがいけなかったのだろうか？

リュージュの施した教育は思わぬところで裏目に出ていた。

「不快な思いはしておりませんし、ヴァリアス様からもきちんと謝罪の言葉を受けましたから気になさらないでください」

「だが、貴方はうら若き女性ではないか。そんな貴方を娼館などに連れて行くなど許し難い行為だ。男の風上にもおけん！」

キエリファはあの決闘の後、両親からリアナの性別を知らされていた。当初は怒り狂ったが、女性の身で竜騎士を務めるなど素晴らしい心意気だと、今では親しい友人付き合いをしている。元々可愛い物好きなので、リアナのことを妹のように思っていた。

「キーファもその辺でやめておあげ。リトル君が困っているよ」

リュディアスの助け船に不承不承キエリファは頭を上げた。リアナは目礼して感謝を示す。

「ところでリトル君。今日はもう一人お客を招いているんだ。私の息子でジェラルドと言うんだけど……」

「あの子ったら遅刻かしら。迷子になってないと良いけれど」

扇で口元を隠すこの貴婦人はリュディアスの妻であり皇太子妃であるヴィエッタだ。成人を終えた三児の母とは思えない、見た目は20代のとても若々しい御方なのである。紫紺の瞳をした侯爵家の娘で、大輪の花を思わせる華やかな面立ちに呆れ顔を作っていた。

「さすがに迷子になる歳でもありませんよ、母上」

生け垣の間から現れた青年にリアナは席を立とうとし、リュディアスに阻まれる。結局椅子に座ったまま迎えることになった。

「初めましてグルテア卿。ジェラルドです」

リアナの前で膝を折ったジェラルドがリアナの甲を持って唇を落とす。貴婦人に対する挨拶に恐縮することもなくリアナも返した。

「恐れ入ります、皇太孫殿下。リトル・グルテアです」

リュディアスの若かりし頃を思わせる面立ち。二人が並べば瓜二つだった。そして先日娼館であったジードという青年で間違いない。

「もう、遅いわよジード」

「すみません母上。白薔薇が盛りでしたので遠回りしていたんです。」

……ああ、こちらをどうぞ」

持っていた一輪の薔薇をリアナに差し出してから、ジェラルドは席に着いた。本来なら不敬と取られてもおかしくないリアナの態度も、怒る様子はない。

てきぱきとお茶の用意をしたリアナがカップを差し出せば微笑まれた。

「もうそんな時期なのね。そうだわ！折角だからジードがリトルに案内なさい。遅刻した罰です」

「皇太子妃殿下?!」

「リトル。そんな他人行儀に呼ばないで頂戴。お母様と呼んでくれて構わないのよ?」

むしろ呼びなさいといわんばかりに詰め寄られる。隣ではリュディアスがじゃあ私のことはお父様と呼んでくれとにつこり微笑まれ、キエリファに至っては私はお姉様だな!と喜んでいる。新顔のジェラルドは楽しそうに笑っているだけで誰も味方はいなかった。

頬を紅潮させ、恥ずかしそうにもじもじしている姿を皇族一家は、可愛いなあと心ゆくまで楽しむ。普段の凛々しい姿とは異なるギャップが彼等の心を攪るのだ。

何度か口を開けたり閉じたりを繰り返した後、意を決してお母様と呼んでみた。なあに?ととろけそうな笑顔が返ってくる。

「そんな、皇太孫殿下に案内などと恐れ多いです」

「まあリトルったら。そんな堅苦しいこと言わないで。ねえジード?」

「ええ。僕と一緒に嫌でしょうか?」

「そんなことはありません!」

ムキになって否定するリアナに一通り笑った後、手を繋いで席を立った。端から見れば男同士。変な噂を流されてもおかしくない。

「早くリトルがわたくしたちの娘にならないかしら」

「ジードが興味を持っているみたいだからね。あの子さえ良ければ候補に入れようと思っている」

「気が早いではありませんか？」

二人の背が完全に生け垣へと消えたのを確認して三人はどうリアナを皇族へ迎え入れるか真剣に話し合っていた。人払いをしてあるので護衛達も話の内容は聞こえない。

「だがジードはもう17だ。私がジークの歳には既に君を迎え入れてミラが産まれていたよ」

「あと3年。ヴァリーには悪いですけど、譲れませんものね」

彼等にとってヴァリアスは自分達の子供と変わらない。だが、リアナがスタードラゴンを手に入れたしまった時点でヴァリアスに渡すわけにはいかないのだ。例えばヴァリアスに皇帝位を狙う気が無くても、周囲が黙ってはいない。問題は全く関係のない男に盗られることだが、リアナの兄弟がいる限りその可能性は限りなく低いだろう。

「私は反対だ。ジードよりもまだヴァリーの方がましだな。ジードにリトルは任せられん」

「でもねキーファちゃん。ジードだって決めた人には一途だと思うのよ。だってリュドにそっくりなもの」

過去の遍歴を持ち出されリュディアスは苦笑した。彼自身ヴィエツタに出会うまで数々の浮き名を流してきたからだ。ヴィエツタに

会ってからは全員と手を切ったが、そのせいでヴィエッタを口説き落とすまでに二年かかったのだから。

「む。だがリトルがジードを気に入るかどうかはまた別だろう」

「そこが問題なのよ！困ったわ」

頬に手を当てて溜め息をつくヴィエッタ。彼等の中でリアナが義娘になることは決定事項なのだ。

「ダメだったら私の妃にするから大丈夫だよ」

「そうですわね。それも楽しみですわ」

笑いあうおしどり夫婦。不憫な奴だなど自分のことは棚に上げてキエリファはリアナを思った。

皇家の陰謀 前編（後書き）

11／28 改稿

皇家の陰謀 後編（前書き）

短めです。

皇家の陰謀 後編

そしてリアナはジェラルドに腕を取られたまま、バラ園へとやってきた。この温室は限られた者しか入れないそうで、ジェラルドのお気に入りなのか。

「リトル、と呼んでもよろしいでしょうか？」

「勿論です皇太子殿下」

「うーん。じゃあ僕のこともジードと呼んでくれないか？ 堅苦しいのは好きじゃないんだ」

突然素に戻ったジェラルドに、リアナは判りましたと頷いた。既にヴァリアスで慣れている。

「ところで君、女の子だね？ 叔父上は男だって言ってたけど明らかに違う」

「さあ、どちらでも良いではありませんか。僕はヴァリアス様の護衛で竜騎士。それ以外の何者でもありません」

やはり面白いとジェラルドの瞳が煌めく。リアナは一輪、薔薇を傾けると息を吸い込んだ。甘く上品な香りが鼻腔を擦る。

「僕は気になるんだよね。……ちょっと失礼」

どこにそんな力があるのだろう。軽々とリアナの腰を攫ったジェラルドは近くにあったテーブルの上にリアナを乗せる。文句を言うようと顔を上げたリアナの口を塞いだ。

甘い吐息を奪いながら股へと手を当てる。やはり男にあるべきものはない。

酷薄な笑みを浮かべて、最後に唇を舐めた。ぎりぎり唇が触れるか触れないかの距離で気に入ったよ、と囁く。そして再び重なりかけたところで。

「……何で邪魔するの」

素早く挟まれたリアナの手の平によって阻止された。

「こういうことは恋人か家族以外としてはいけないとジュード様と言ってらしたので」

キスの意味すら全く知らなかったリアナにジュードが教えたのだ。疎いリアナは意味が全く判っていなかったが、恋人（兄が認めた将来を誓う相手）と家族以外は唇同士でキスをしてはいけないらしい。流石に貞操観念の危機を憂えたジュードが出した苦肉の答えだった。

先程は不意打ちで防げなかったが、今回はきちんと阻止できたことに満足する。

「ふうん。そう言えば昨日もジュードに邪魔されたんだよね」

あっさり離れたジェラルドは何となく察した。昨日も感じたことだが、この娘は何も知らない。この年でキスの一つも知らないのは不自然だ。近しいものが徹底的に排除している証拠。

恐らくそれを制限しているのはジュード。そこから身元も容易に探り出せそうだ。

逃がさない。遊び尽くすまでは放すつもりはなかった。

年が近いだけあって昔から一つ下の叔父とは何かと張り合ってきた仲だ。そんな彼が一番の信を置く、この娘を奪ったらどうなるだろうか？

先日邪魔されたことへの意趣返しも込めて、それはとても良い考えに思えた。

何より一から教えるのも、つまらない王宮の生活からすれば、丁度良い暇つぶしになる。

「ジード様？」

「ねえ。じゃあ僕が君の恋人になればいいんだよね」

あつたばかりの人間にどうしてここまで固執するのか判らない。ただ、あの柔らかな唇は悪くないと、そう思ったただけだ。今まで通り、飽きれば切り捨てるだけ。

「僕が、ですか？」

「そう。無理にとは言わない。ジュードは抜きで、君の考えで判断して欲しいな」

「……」

どう判断していいのかわからないから視線が宙に泳ぐ。恋人イコール兄が認めた将来を誓う相手、つまりジュード抜きでは判断がつかない。ぐるぐると思考がループする。

考えた末に、兄はジュードだけではないではないという結論に至る。

「ジュード様を抜いても僕の考えは変わりません」

「は？それは結局……」

どっちなんだと言う前に、タイムアップなのか侍従が二人を呼びに来た。いくら影のような存在とはいえ、侍従の前で口説く趣味はない。うやむやのまま、ジェラルドの告白は宙に浮いた。

その頃。二人からは死角になる繁みでは。

「あっはっはっ。上手くかわされてるね」

「情けないわ。そこは愛の言葉の一つや二つ、囁いてみせるところでしょうに。でも、リトル相手にストレートに言葉を紡いだことには評価をあげても良いわね。あの子は鈍いから」

「二人とも。そろそろ戻らないとばれますよ」

「キーファ、よく覚えておきなさい。ああいう男をへたれと一般では言うのよ」

「母上……あまりにもジードが可哀相では？」

「リトル君を使ってヴァリーで遊ぼうとするからだよ。ああ、いい気味」

強ばった身体を伸ばすリユディアスは笑ったままだが、だからこそそれが本音だと判った。我が親ながら身も蓋もない。

皇家の陰謀 後編（後書き）

この後はまだ考えていないので、少々時間が空くかと。す、すみません。次は旦那をアップしたいと思います。

11／28 改稿

お忍び（前書き）

新章の開始です。

お忍び

ヴァリアスのお忍びに付き合っていたリアナは外壁から城へと伸びる中央道を歩いていた。中央道は歩道と馬車道に分かれており、歩行者が馬車の妨げにならないようになっている。

二年前にはリュディアスが皇帝に即位し、リアナは十四歳、ヴァリアスは十八歳となっていた。

「まだ食べるんですか、ヴァリー」

「当然だ。お前が来てから記念すべき一回目のお忍びだぞ。ああ、ここはロディアのミルフィーユがおすすめで……」

城にヴァリアスの護衛として上がってから三年。なぜ今になってお忍びの供をすることになったのかと言えば。

「よかったな。お前の家族から許可が下りて」

正しくはリユークと公爵から、である。彼等は後見人として、形式上リアナには別の家族がいることになっているが、例の娼館騒動以来、外に出すのは危険であるとの判断からお忍びにはついていけなかったのだ。馬車や馬上で通ることはあれど、自分の足で歩くのはこれが初めて。

物珍しさでいっぱいだ。

隣を歩くヴァリアスはまたも何か買ったらしく、腕には沢山の食べ物を抱えていた。お前も食えと出された串焼きを、休憩も兼ねて座った噴水で食べる。

老若男女問わずリアナを見ては驚愕し、次いで頬を染め足早に去っていくのだが二人は気にしなかった。

「この串焼き美味しいです」

「そうか。ここにたれが付いてるぞ」

幸せいっぱいといった感じで頬張っているリアナに指で拭って口に含むヴァリアス。想像豊かな女性陣が黄色い声を上げてばたばた倒れ落ちたのは言うまでもない。

「ありがとうございます」

「お前はまだ14なんだよなあ」

「?どうしたんです、急に」

突然頭を撫でだしたヴァリアスの不可解な行動に首を傾げる。

こういう何気ない仕草が可愛いんだよな。ってこれは男だぞ! 錯覚しそうだがこれはまごう事なき男。いくら見た目が細くても女顔でも、涼しい顔で大の大人を片手で吹っ飛ばすような男だ。断じて可愛い、のは否定しないがもっと触りたいなんて思っていないからな!

「ヴァリー? 聞いてますか」

「あ、いや。お前って大人びてるからつい同年か年上みたいと思うけど実際は年下なんだよな」

「態とそう見せてるんですから当然です。ヴァリーの前では偽ってないつもりですけど」

「俺のせい、だよな」

若すぎるからこそ人一倍の成果を求められる。羨望や嫉妬。些細なことで揚げ足を取られないように、リアナは上手く立ち回ってきた。

「後悔しておいですか?」

「いや。というかし今俺が後悔していると言ったらお前、即座に帰る気だっただろう」

「よく判りましたね」

輝かんばかりの微笑みで肯定される。絶対本気だったとヴァリアスは確信していた。危うく惜しい人材を無くすところだった。

「……ジードの所へ行くつもりか？」

「まさか。ジード様に仕えたいとは思いませんよ」

ほっと安堵の息を吐いた。何かとちょっかいをかけてくるジェラルドは、事がある度にリアナを自分付にしようと画策してくるので困っている。

元々何を考えているのか判らない一つ年上の甥は苦手なのだ。

「殿下。私はあと一年でお側を離れる身です。別の形で遇うことになっても、私の気持ちに偽りがなかったことは憶えておいて下さいね」

「リトル、どうしても帰るのか？」

後一年。最初にリトルを護衛として雇う際に条件としてつけられたもの。なぜ四年契約なのかは知らない。しかしそれをヴァリアスは呑んだ。

契約期間の間に一生自分の護衛として働くよう説得するつもりであつたし、これからも手放すつもりもない。だがこの三年。陰に日向に支えてくれたリトルは決して頷かなかった。

そして一年を切り、少しずつ後任に引き継ぎを始めていることを知っている。意志は変わらないと突きつけられた気がした。

「決められたことなんです。殿下も大きくなりましたし、もうお世

話係はいらないでしょう？」

「俺はお前がいらないといやだ。俺の仕事を前以外の誰が補佐をする。大体キーファ姉上はどうするんだ？」

あれ程嫌がっていたキエリファが、最近着飾るようになったのを知っている。きっとリトルに恋をしているからだろう。

「姫も陛下も当然了承済みですよ。だから僕が婚約者として姫の相手になっただけです。一年先には姫は別の人と結婚しますし。なんでもラブラブ？だそうです」

「そうなのか？」

スタードラゴンの使い手として外聞が悪いから婚約者になった。だが貴族達が皇女を一介の田舎者にやるわけがない。裏では、四年後には専属護衛の契約が切れ、城を去る。そんな取引があったからこそ認められたのだ。

公にはなっていないが既にキエリファの結婚相手も決まっており先方も了承済み。というか、先方は秘密の逢瀬を楽しんでいる節がある。当の本人に言わせればスリルも恋愛のスパイスだ、というにとらしい。

「はい。ですから……っ！」

続けようとしたリアナははっと息を呑んだ。

なぜここにいるの？

捕り物

間違えるはずがない。恰好が多少変わったからとはいえ自分がある人を間違えるはずがないのだから。

内密に護衛している騎士達に視線をやってヴァリアスを任せると、リアナは路地裏へ入っていったその人物の後を追いかける。

後ろで制止の声が聞こえるが無視をした。

表通りを抜けて辿り着いたのは、裏通りの中でも寂れた倉庫。きよろきよろしていた人物は誰もいないことを確認してから中へ入っていた。

気配を隠しながらリアナは倉庫を一周する。天井の窓が一番見やすいだろう。

見当をつけて飛ぼうとし、背後に気配を感じて振り返った。声には出さず静かにと合図して手招く。

「どうして着いてきたんですか、ヴァリー！危ないでしょう」

「こっちの台詞だ。いきなりふらつといなくなったら驚くだろう。迷子になったらどうする」

「それでも毎日皇都上空を飛んでるんですから地理は覚えています！退いては……くれないですよね」

困った。とても個人的なことでヴァリアスを巻き込むわけにはいかない。しかし絶対に大人しくしてくれないのは性格上判っている。これでも強いから自分の身くらいは守れるだろう。ここで逃すよりは叱責覚悟で巻き込むか。

迷いは一瞬。自分の身を安全第一に考えることを確認させてから、リアナは魔術で空へ飛んだ。曇ったガラスから内部の様子を覗き込む。勿論魔術で盗聴するのを忘れない。

「……束です。薬をください」

「中を確かめてからだ。気づかれずに持ってきたらどうな？」

「はい。荷の一つに偽物を混せて検問に見せたら通してくれました」

「よく考えたな」

内部にいるのは十三人。内十人は身のこなしが違う。彼等は三人のくたびれた若者から棺桶くらいの箱を受け取っていた。

一人が中身を確認し、残りの人間に頷いた。三人の若者と話していた男が懷から小瓶を渡す。

「ご苦労だった。報酬だ」

若者が唾を飲み込んで薬を受けと……。

「そこまでだ！」

ガシャーン！

ぱらぱらとガラスの破片が男達に降りかかる。即座に抜刀した男達は、鞘で窓を割ったヴァリアスとその隣で苦笑いしているリアナを睨みつけた。

魔術で緩和しながら倉庫内へと侵入したヴァリアスとリアナが男達と対峙する。

「お前達何者だ？」

言うが早いか連携された動きで男達が襲いかかる。リアナはヴァリアスを下からせてから剣を一振りした。耐性がなかったのか呻き声を上げて簡単に男達は倒れていく。簡単に言えば剣に雷を纏わせ

て感電させたのだ。

軽いショックを与えただけで殺してはいない。若者達はヴァリアスが手刀で気絶させ、残りは手近にあったロープでぐるぐる巻にした。

「全く、護衛対象は大人しくして下さい。怒られるのは僕なんですよ？」

「お前も言うようになったな」

「当然です。考える前に動くのは止めてください。それだから、影で脳筋族と言われるんですよ」

「待て！その噂は初めて聞いたぞ」

「今、初めて言いましたから。前から思っていました。が、ヴァリーはもう少し考えて行動することを学習してください。この前だってそれで振られたでしょう？」

「……何で知ってるんだ」

「貴方の傍にいれば判りますよ、それ位。何年一緒に居ると思っますか」

分が悪い。これ以上暴露されない内にと、ヴァリアスは箱の一つを開ける。そこには何百もの液体が入った小瓶が詰められていた。間違はなく若者達が渡された物と同じだろう。

「麻薬、か？」

「麻薬とは匂いが違います。これは知らない味ですね」

少量の液体を手の中で燃やし、そして口に含んだリアナは知識の中に該当しないことを伝える。毒かもしれないのに躊躇いなく口を付けたリアナの行動にヴァリアスは呆れた。毒に対する耐性は二人ともついているので問題ないだろうが。

「持って帰って一度クレハさんに分析して貰った方がいいかと。彼等も警備隊ではなく城の牢屋にいます」

「理由は？」

本来なら、犯罪者は警備隊の詰め所に連れて行くのが妥当だ。

「全員海の国トートスの軍人です」

男達を調べていたリアナがズボンをたくし上げる。そこには海色をした足輪が鈍く光っていた。

仮装舞踏会 前編

年に一度の社交界の訪れを告げる仮装舞踏会。皇帝より正式な招待状が届いた者のみが入場できる。

この日ばかりは奇抜な恰好が当たり前。入り口で入念な身体検査と招待状に徽章の確認を経て、初めて参加が認められる。まだ成人前のため、社交界に入れないリアナもこの日は正式に招待されていた。しかも皇帝本人から手渡しで。

「皇族は季節を模した衣装なんですよね」

「ああ。俺はもう臣籍だから違うけどな。はあ、欠席したい」

王宮の一室。ヴァリアスの本邸は、成人した際に臣下に下った証として城外にあるのだが、竜騎士の隊長として王宮に部屋を賜っていた。専属護衛であるリアナも普段は官舎ではなく、隣室で寝泊まりしている。

二人は丁度衣装の最終確認をしているところだった。社交の場を嫌うヴァリアスも、さすがに皇室が開く宴は拒否できない。

ここ数年、未婚の令嬢は公爵位を賜ったヴァリアスか皇太子のジエラルドの妃にと望む者が多く、いい加減辟易しているのだ。衣装も他の招待客と被らないようそれとなく情報を流すので、仮装舞踏会といっても誰がどの仮装をしているのか筒抜けである。未だ婚約者もいない二人はパートナー探しだけでも必死だった。

「腕周りは問題ないですか？」

「丁度良い。それよりお前こそ大丈夫なのか？」

「なんなら練習も兼ねて踊ってみますか？」

「いや……。今更だな」

苦肉の策。それはリアナをパートナーとして出席することだった。仮装舞踏会、つまり男が女に仮装しても問題ない。というわけで、今回リアナをパートナーとして選んだのだ。

これなら面倒事もなく宴が楽しめると、自ら出した折衷案にヴァリアスは喜んでいる。

「それにしてもまさか兄上がこれを贈ってくるとは思わなかったな」

これと指差したのはリアナの仮装服。兎をモチーフにしているように、白いふわふわのもこもこで出来ている。耳までついていた。しかも女物。

「リトルも着てみるよ。絶対似合うぜ」

「僕はヴァリーの前に確認しましたから。そうだね、コレット？」

「はい。リトル様のそれはお可愛らしいこと。殿下も当日を楽しみにしててくださいな」

「なぜパートナーの俺に見せに来ない？」

「君だけずるいじゃないか。当日はリトル君のパートナーになるんだからそれまで楽しみにしてなよ。勿論僕とも踊ってくれるだろう？」

「ジード！ いつの間に入ってきたんだ」

気配もなく、いつの間にか扉にもたれ掛かっていたことに、ヴァリアスは目を剥いた。いくら何でも気を緩めすぎだ。

「『なんなら練習も兼ねて』辺りから？ ヴァリーは忙しいみたいだし僕と踊ってみようか」

そう言うなりジェラルドがリアナの腕を取って踊り出す。口ずさまれる有名な曲に合わせて足を動かす。それはヴァリアスの前言をあっさり翻すほど完璧だった。

最後のステップを踏み終え、ジェラルドがリアナの頬にキスを落とす。

「とても上手だったよ。名残惜しいけど当日までとっておくことにしよう。じゃあまたね」

もう一度キスを落として颯爽と出て行くジェラルド。この光景は既に見慣れたものでヴァリアスは悪態を漏らす。

「あいつは一体何しに來たんだ？毎回リトルにべたべたと。リトルも嫌なら嫌がれ！」

「どうして挨拶を嫌がるんですか？ジード様は優しい方ですよ」

「騙されるなりトル！あれは腹が真っ黒だぞ。優しいあいつほど恐ろしいものはない。何か物を貰ったら請求される前に突っ返せ」

「よくお菓子を貰いますけど何も請求されたことありませんよ？」

「それはお前に大きな貸しを作るための布石だ。油断するな」

「そうなんですか？」

「ああ」

いちいち素直に頷くリアナの頬をハンカチで拭ってやるヴァリアス。

コレットは微笑ましそうに二人を見ていた。

仮装舞踏会 前編（後書き）

短いですが、構成を考えて一旦ここで切らせていただきます。

仮装舞踏会 中編（前書き）

タイトル変更。三部作でいきます。

仮装舞踏会 中編

最後の方に足を踏み入れたリアナは、大広間の賑やかさにぽかんと口を開ける。

入場は基本的に位の低い貴族から始まって、高位貴族は遅くに入るのが慣習だ。当然皇帝入場までには会場入りしていなければ締め出しを食らうのだが。今回はヴァリアスの付き添いなので、順番は後ろから数えた方が早い。というか、ほぼ最後だ。

真昼にも勝るとも劣らぬ何百もの眩い光が広間を照らし、それぞれが贅を凝らした仮装で着飾る。この日ばかりは女性も足を大胆に見せたドレスやズボンを穿き、男達は時折鼻を伸ばしながら話しかける。位の垣根も取り払い、誰もが対等に話すことを許された。

そして今宵注目の一人であるヴァリアスが会場に足を踏み入れた時、彼の妻の座を欲する貴族達がさり気ない視線を送り絶句した。傍らにはいつもの見目麗しい騎士ではなく絶世の美女が立っていたのだ。背を向けていた貴族達も話し相手が後方に釘付けになっていることに訝しみ、同じように目を見張る。

この場を支配しているのは、豊かな栗毛を複雑に編み込み、兎を模した衣装を着た美女だった。そんな周りの反応も知らず、いや慣れているからこそ当の本人は周囲を見渡す余裕を持っていた。隣ではライオンに扮したヴァリアスが紳士らしくエスコートしている。

「さすがリトル。恐ろしい奴だな」

「ヴァリー、あの絵が有名な”ルトナ光臨”ですよね！ガドラング最後にして最高傑作」

天井を見上げていたリアナはヴァリアスが止まったことに気づかず、軽くぶつかってしまふ。

「やあ可愛いうさぎさん。あんまり余所見をしていると狼さんが食べちゃうぞ?」

「お義兄……リユージュ様!」

「しーっ。ここでは本名は御法度だよ」

「あ」

ぱっと可愛らしく手の平で口を塞ぐリアナにでれでれとリユージュの顔が緩む。隣にはスフェンネル公爵本人がいた。

挨拶を返しながらヴァリアスは冷や汗を掻く。リアナを氣遣ってか二人とも始終笑顔でありながら、ヴァリアスに鬼気迫るような氣配を発していた。その眼はなぜリアナがここにいるんだと怒っている。リアナはまだ未成年で、本来招待されるような年齢ではないからだ。リアナの身を預かっているヴァリアスにその怒りが向くのは当然だった。

そして、三人の無言の攻防を余所に、またも周囲にどよめきが奔る。あの氷の貴公子の異名をとるスフェンネル家の嫡子が、ヴァリアスが連れている女性を前にして笑っていたのだ。にこやかに会話する様子から、それなりに付き合いがあることが察せられる。

筆頭公爵家と皇弟が懇意にしている謎の美女として、一夜にしてリアナの噂は宮中に駆け巡ったのは言うまでもない。なんといってもどちらにも未婚男性の優良株。すわどちらかの許嫁かという話まで囁かれた。周りの思惑はともかくその中心である少女は何も知らずに、義兄と義父との会話を喜ぶ。

時に周囲を巻き込み、ベイルやリユードがさり気なく二人の仲を妨害しつつ歓談していると、皇帝及び皇族の入場の合図が鳴り響く。一瞬で静寂に満ちた中を皇族が堂々と進んでいく。正面にそれぞれ

座り、最後に皇帝が座る。そして彼が舞踏会の開催を告げ、音楽が流された。

最初の一曲は秋と春の装いをした皇帝と皇后が中心で踊りそれ以降は貴族達も混ざっていく。

壁際には贅を尽くした料理と酒がふんだんに振る舞われ、休憩室も開放されている。この日のために庭師が力を込めて整えた庭は等間隔に篝火が焚かれ、恋人達の密事を隠すよう適度な暗がりが作られていた。

バルコニーで火照った身体を冷やしていたリアナにふわりと上着が着せられる。松明の炭が爆ぜ、二人の影を揺らした。

「先程の踊りは素晴らしかったよ。淑女同士の踊りに皆目を丸くしていた」

「本来なら僕は冬の方のパートナーですから当然です。気づかれた方もいるのではないでしょうか」

女性にしては少し大柄な冬の衣装で着飾っているキエリファが女側を、可憐な美少女が男側を務めるダンスは大きな拍手で終えた。宴もたけなわとなり、面白い趣向だと思われたかもしれない。

「まさか。今頃躍起になって公爵やヴァリーに君の素性を探っているだろうよ。それよりいつまで休憩しているつもりだい。僕と踊ってくれる約束だろう？父上や母上とも踊っているのに私だけ踊っていないのはずるいじゃないか」

約束を破るわけじゃないよね？低い声がリアナの耳を擦る。

「ジード様のパートナーの方が探していらっしゃるようですが？」
「放っておけばいい。勘違いされても困るから」

「勘違い？」

「リトルは知らなくても良いよ。まだね」

態と垂らされた髪を梳きながら後ろへ流される。手袋越しとはいえ素肌に指先が掠り、リアナは少しだけ身を竦ませた。

開かれた襟袷りに噛みつきたい衝動を抑えながらジェラルドは涼しい顔で手を差しだした。そして剣を握るとは思えないたおやかな手がおずおずと乗せられる。

逃げられないように強く腕を握り、音楽の洪水へと身を乗り出した。

仮装舞踏会 後編

「何なんですよ、あの女！」

憎々しげに扇子を掴み射殺さんばかりに睨みつける先は、バルコニーでジェラルド様と談笑しているウサギに仮装した女。

ジェラルドのパートナーであり名門ランズデイ公爵令嬢カタリナは、取り巻き達が様子を窺っていることにも気づかず美しい顔を歪めた。身分や年回りが釣り合うことから、周囲からは将来の皇太子妃として見られていたし本人もそうだと自負していた。

そして、これまで妹しかエスコートしなかった皇太子が今回カタリナをパートナーに選んだことで、近々婚約が発表されるだろうと舞い上がっていたのだ。しかし。そんな思惑をあっさりと覆したのがあのウサギ女だ。

主催者である皇帝自らが手を取った。それは即ち皇帝に認められた存在であること。そして皇帝だけでなく皇族一家全員と踊った、つまりそれだけ皇族にとって重要な人物であると知らしめたのだ。それだけでも驚きなのに、あの氷の貴公子と名高いウェイザー子爵やスフェンネル公爵、宰相など国の要職に就く者達とも親しい様子。

皇弟殿下の恋人なら良い。でも、もしかしたら。カタリナの心にとす黒い感情が渦巻く。

なぜジェラルド様はあの子と楽しそうにしているの？ どうしてあの子にはそんな優しい眼差しを送っているの？

いつも見ていたから。幼少時から会うことを許され、多くの時間

を共有しているカタリナだからこそ、眼差しの意味に気づいてしまった。どこかで彼が自分に興味がないこと——将来の伴侶としては見えていたかもしれないがそれだけだった——は判っていたではないか。

しかしそれを認めるにはカタリナの自尊心が高すぎた。顔が良いだけのぽつと出の女に自分が負けるはずがない。

二人がダンスを終え、皇弟殿下と談笑しているのを見計らってカタリナは近づいた。

「疲れたみたいだね。休む？」

「大丈夫です」

「ふらふらしてる奴が何言ってるんだ。兄上に義理も果たしたしもう帰るか」

宴もたけなわとなり、さすがに眠いのか、うつらうつらしているリアナをヴァリアスは受け取った。とろんとした姿が可愛らしく、うっかり抱きしめそうになったところで自制する。男を抱きしめる趣味は断じてない。一度認めたら何かが崩れるような気がする。

「帰ると言ってもどうせ城の部屋だろう？ 僕が送っていくよ」

「遠慮する。大体お前は主賓だろうが。お前目当ての女達の相手でもしてろ」

「それなら君だって同じ事だよ。あそこの令嬢なんてどうか？ さつきからこちらを見ているようだけど」

「あれはお前のパートナーだろうが。残念だがこれは俺のパートナーだ」

「じゃあ交換。後は任せたよ」

「お前なあ……」

どちらがリアナを帰すかで一悶着起こしているところへ。

「どちらに行っておりましたの夏の御方。お探ししましたわ」

ジェラルドは見えないように小さく舌打ちし、ヴァリアスは丁度良いタイミングだと心の中で喝采を浴びせた。間に挟まれたリアナはほとんど夢うつつである。

「これは失礼。こちらのウサギが体調を崩されたそうで、今から休憩室に送っていくところですよ」

「まあそうでしたの。ウサギの御方もお気をつけあそばせ。今宵は多くが極上の餌を求めて飢えておりますから」

「ご心配なく、可愛らしい子猫殿。この私が責任持って面倒を見ますので。二人には迷惑をかけました」

「とんでもない。主催側として客人を放っておくわけにはいきませんよ」

「どうぞお構いなく」

「いやいやそちらこそ」

「はあ。この様子ではいつまで経っても決着がつきそうにありませんわね。うさぎの御方。わたくしがお連れしますわ」

渋々といった感じで切り出したカタリナだが内心にんまりと笑っていた。この二人から引き離せばこちらのもの。牽制するなり脅しかけるなりすればいいのだから。社交界の華として君臨するカタリナにとっては造作もないことだ。

一步も譲らない三人に思いも寄らない人物がやってきた。

「御心配には及びませんよ。彼女は私が送りましょう。おいで」

三人の不毛な争いを遮ったのは他でもないリユーグだった。氷の貴公子の呼び名に相応しい冷えた眼差しが若い二人に注がれる。恐ろしさを身に持って知っているヴァリアスは背筋を凍らせ、ジェラルドはうっすらと微笑んだだけだ。

リアナだけにとろけるような微笑みを浮かべて手を差し出せば、素直に身体を預けられる。それに満足して三人に簡単に挨拶を交わし、颯爽と会場を後にした。

遣り取りを見守っていた老臣達は気の毒そうに二人を見、まだまだ甘いのかと笑っていた。

仮装舞踏会 後編（後書き）

またの名を兄ちゃん漁夫の利編。可愛い兎を狼の前にぶら下げるほど優しくありません。

とある公爵家に務める侍女より2（前書き）

侍女は見た！のパート2です。

とある公爵家に務める侍女より2

皆様お久しぶりです。リアナ様の侍女、ユーナでございます。

ただいま私たちはマニアでなくても垂涎ものの光景を目にしております。眼福でございます。お嬢様の可愛いらしい寝姿だけでなく、何と兄君であらせられるリュウグ様の寝姿までも拝しているのですから。

お嬢様と若君のご年齢から考えるとご兄弟でお休みになるのは少々、いえ、かなりいけないことだと思うのですが、この神々しいまでの美しさを前にして邪魔をすることなど出来ませんとも。

昨晩は夜会に出ておられてお二人とも疲れているのでしようが、そろそろ起こさなくてはなりません。

リュウグ様の寝起きの悪さは侍女達の中でも折り紙付きなので、誰が起こすかと押しつけあ……コホン、討論していると、突然廊下が騒がしくなりました。

何事かと思おうとしたところで扉が蹴破らんばかりに開け放たれます。

「リュウグ！お前だけずるいぞ！」

公爵様の大声が響き渡ります。私達は慌てて頭を下げました。普段は温厚な公爵様がここまで怒るのは非常に珍しいのです。勸んで火の粉を被りたくはありません。

「朝から騒々しいですよ父上」

不機嫌そうに寝乱れた髪を掻き上げられる若君の姿は大変麗しい

です。お嬢様も公爵様の声に驚かれたようで、若君の手を借りながら身体を起こされたところでした。

「儂だつてリアナと一緒に寝たかったのにずるい！折角の親子水入らずの邪魔をするでない」

「それを言えば私とて兄妹水入らずなんですよ。大体父上に添い寝などされた日にはリアナが圧死してしまう」

「なっ！なぜそれを……」

「母上から昔聞きましたよ。父上の寝相はそれはとてもとても」
「それ以上言うな！」

くあと可愛らしく欠伸を漏らしたお嬢様は私共の所へ来られました。どうやら相手にするだけ馬鹿馬鹿しいと思われたのでしょうか。そこには私たちも激しく同意いたします。

「おはよう、みんな」

目を擦っている様子からまだ眠いのでしょうか。その仕草のなんと可愛らしいこと。公爵様やリュウグ様が度々抱きしめて頬擦りする気持ちが良い判りますわ。

既に浴室の準備がされているのでお嬢様をつれて浴室へ。そして耐えきれずに三人が鼻血を噴いて倒れてしまいました。私とお嬢様の裸を直視できません。

少女と女性の危うさを見事に兼ね備えたお嬢様の裸は背徳的な何かを感じずにはおれません。同性の私達ですらこの有様なのですから、将来お嬢様の夫となられる方はさぞ理性を試されることでしょう。

あら？その場合は欲望に従えばいいのかしら。羨ましいですわね。

こほん。少々興奮しすぎました。

お嬢様の真珠のようなお肌を美しく磨いた後は朝食の席へ。身支度を完璧に調えたリュウグ様と公爵様がお嬢様を迎えます。

久しぶりに朝食を共にするとだけあって公爵様の顔の筋肉が緩みっぱなしだったのは侍女として見ない振りです。

さて。ここは皇都の公爵家別邸なのでいろいろと勝手が違います。けれどお嬢様の日常はあまり変わらないようです。いえ、前より悪化したのでしょうか？

いくら敷地内とはいえ、私達を連れずにどこかへ消えてしまいました。正式に公爵家の騎士になったシャツクス、いえ、シャツクス様がおられるので大丈夫でしょうが、不安はつきません。

夕暮れ時に突然お嬢様がお戻りになられたかと思えば、大量のお菓子を渡されました。それらは全て、皇都でも有名な菓子屋のマークでした。

どうやら外へお一人でお出かけになったようです。監督不行き届くとして私達が怒られてもおかしくなかったのですが、リュウグ様はあくまでお嬢様を叱責されておりました。

「貴族の令嬢が供もつけずに一人歩きとは、嘆かわしいよりアナ。約束を破るのかな？」

いつになくリュウグ様は怒っているようです。日頃お嬢様には見せない冷たい眼差しは、叱責を受けていないはずの私達の心臓を凍らせそうです。

「破るつもりはありません。ですが」

「理由はどうあれ、君が我々の期待を裏切ったことに変わりない」

約束とは何のことでしょうか？それにしてもこれ程までに冷たい方だとは思いませんでした。噂に聞く氷の貴公子の一端を垣間見た気が致します。

「若君、お待ちを」

「お前がいながらなぜこのような醜態を晒したんですか、シャックス？リアナ、君にも失望したよ」

「お兄様！シャスはわたくしの我が儘を聞いただけで関係ありませんわ！」

「リアナは暫く部屋で反省しなさい。私が許可するまで外に出るのを禁ずる」

「お兄様！」

聞く耳持たず。私達は若君の命令で、姫様の部屋から退出しました。ごめんなさいと謝る姫様の表情は痛々しく、とても見ていられません。

つい若君に対して恨めしげな視線を送ってしまいます。

あそこまで冷たく当たる必要はあったのだろうか。

釈然としない思いを抱えながら私達は与えられた仕事を黙々とこなしました。

真相

八つ当たりだと判っていたのだ。リアナの悲愴な顔を見て瞬時に血の気が下がったのは言うまでもない。それでも口は独りでに動き、気づけば廊下を歩いている。

まさに後悔先に立たずとはこのことだろう。話も聞かずに勝手に決めた挙げ句、決して口にしてはいけないことを放ってしまったのだ。胸が痛い。

肺が空っぽになるくらい大きな溜息が自然について出る。

そもそもの元凶はあの皇帝だ。あろうことかリアナを皇太子妃にと打診してきたのだ。リユージュの母は前皇帝の妹で、時折皇族とは婚姻を結んでおり、別段おかしな事ではない。スフェンネル公爵家は今時珍しい貴族で、代々の当主は良く言えば欲がない、悪く言えば引き籠もりばかりの変わり者として有名だ。

本人達の心情としては面倒は嫌いという一点につきるのだが、権力を欲する者達からは羨むばかりの名門一族で、皇族にしてみれば体の良い一族だ。どの貴族も口を出せない名門で、しかもその一族は中央権力に興味がない。これ程便利な外戚はいないのだ。

そんな公爵家から皇太子妃を輩出するのは全く問題ない、のだがリアナは事情が違う。リアナは養女で、皇族や公爵家の血を一滴も継いでいないのだ。血統主義社会において、これ程マイナスになるものはない。当然貴族院が認証するはずもないし、議会は大きく揺れるだろう。

しかし公爵もリユージュも絶対に貴族達の反論を許さないだろう証拠があることを知っている。澄み切った混じり気のない紫の瞳。神に愛されし初代皇帝の血を引く者しか持ち得ないその色を持っている

ることは大きな意味を持つのだ。

本気になればリアナは簡単に奪われてしまう。それは公爵もリユーグも望んではないのだ。仕方なかったとはいえ彼女を養父母から取り上げたのは二人の中でしこりとなっている。せめて穏やかな生活を、と望んでいるのに周囲がそれを許さない。

机の前に両腕を組み、額を乗せる。机の木目を何と無しに見つめながら打開策を探っていく。とはいえ皇帝の方が一枚上手だ。机の上に置かれた料紙を苛立たしげに睨みつける。

正式な押印で封をされた皇妃主催の茶会の招待状。宛名はリアナ。社交デビューをしていないリアナを呼ぶための茶番だ。ごく私的なもので断ることも可能だが、社交界へと出る際に皇妃の茶会を欠席した人間として名が傷つくのは必至。加えて出席者は皇太子妃候補と目される令嬢ばかり。

何が楽しくてそんなところへ可愛い妹をやる兄がいるだろうか。頭が痛い。

扉が叩かれる音に入室を許可する。入ってきたのはシャックスとリユーグの専属護衛兼侍従であり、シャックスの兄シェイスだった。時間を空けて連れてくるよう指示したのを思い出す。

「若君」

「ご苦勞でしたシェイス。シャックス、先程は取り乱してすみません」

「いえ。私の不手際で、リアナ様の逃亡を許してしまったのですから」

処罰は当然のことだと生真面目な答えにリユーグは苦笑する。頑

固さは兄以上のようだ。

「あれを止めるのは不可能でしょう。それよりなぜ勝手に抜け出したのか教えてください」

「それは…」

歯切れの悪い答えにシェイスがはっきり言えと弟を叱責する。シヤックスは尚も逡巡したようだが、迷った末に切り出した。それを聞いて二人は目を丸くした。

数時間前のこと。朝食を食べ終えたリアナは、庭の手入れのために質素なドレスに着替えていた。公爵家の皇都別邸の庭は専属庭師も雇っているのだが、彼は気のいい人物で、リアナに時々手伝わせてくれるのだ。いつものように庭師に借りた藁帽子を被り、スコップを片手にせっせと土いじりする姿は、ぱっと見ではとても貴族とは思えないだろう。

だから油断していたのだ。手入れに夢中で背後を取られたことに気づかなかった。

「おい、その侍女。リトルという少年を捜しているんだが知らないか？」

「……………」

「聞いているのか！」

「……………」

「おい！」

「ふぁい！」

ぽんと肩を叩かれ飛び上がらんばかりに驚いたリアナは振り返った瞬間、目を見張った。同様に相手もまたこちらを凝視していた。ここは裏庭で、間違っても彼のような者が入る場所ではないのだが。リアナは内心の動揺を押し隠して目を伏せる。

「……何の御用でしょうか？」

「あ、いや」

ヴァリアスは驚いていた。まさかあの歩く凶器といっても過言ではないリトルと同じ顔がこの世に二つもあるのだから当然だ。本人かと思ったが、声も違えば服も明らかに女物。

「お前はリトルの双子か、兄妹か？」

「……」

ここで領けば、リトルという人物の生い立ちそのものが嘘になってしまう。彼の家族構成には両親しかいないのだ。まさか本人です、とは言えず沈黙を選ぶ。髪は帽子の中で隠され、瞳の色は帽子の陰になって黒紫色に見えなくもない。想定外の出会いに、どうするべきかと首を横に捻っていると笑い声が届いた。

「あははは。いや、すまない。あまりにも兄妹でそっくりだからな」
「……」

勝手に解釈してくれれば願ったりだ。そのまま沈黙するリアナに気を悪くした様子もなく、ヴァリアスは言葉を継いだ。

「ところでリトルを知らないか？昨夜はこっちに戻ったんだらう？」
「兄はええと……そう、領地！自分の領地の様子を見に行きました。畑が気になるようでして」

「そうか。休日だから誘いに来たんだが残念だな」

苦しい言い訳かなと思ったのだが、あっさりと退いてくれたので知らずに握っていた拳を解いた。緊張で手の平は汗がびっしょりだ。

「ところで」

「っはい！」

「そんな緊張しないでくれ。無視されて怒っているわけではない」

気軽に頭をぽんぽん叩くヴァリアス。どうやら一々大きな反応をするリアナを怖がっていると勘違いしたらしい。大人しくしていたリアナだが、ヴァリアスの服装を見て嫌な予感がした。

「お前、甘いものは好きか？」

「それは好きですけど……」

警鐘が頭の中でがんが鳴っている。ここで回れ右してすぐに屋敷内へ入るのだ。聞いたら絶対後戻りできない。

「なら丁度良い。ちょっと付き合え」

「はい？……ってうわっ！」

ヴァリアスに腕を取られ門へと歩いていく。庭師が目丸くしているのを尻目にヴァリアスが少し借りていくぞと声をかけて通り過ぎた。リアナが握っていたスコップや、藁帽子を押しつけるのを忘れない。

「リアナ様！？」

「シャス！！」

「そこのお前！しばらくこいつを借りるぞ」

「え？」

ようやく見つけたリアナにシャックスは驚いた。引きずっていた相手は何とあの皇弟殿下だったのだから。直ぐに我に返るが、相手は臣下の位に降りたとはいえ、皇族には違いなので手を出すことも出来ない。躊躇うシャックスに、大丈夫だと目配せする。門を出たところで、ようやくヴァリアスが歩調を緩めた。

「……お前リアナって言うのか。俺はリトルの同僚でヴァリーだ」

「判りました。ところでそろそろ手を放していただけませんか？」

「駄目だ。放したらお前、逃げるだろう」

「当たり前です。ぼ、私には仕事があるんですから」

「兄の不始末は妹がするべきだろ？心配しなくても夕刻には送ってやる」

「関係ありません！どういう理屈ですか。……それよりいい加減放さないで、警備隊を呼びますよ」

「本当にリトルとそっくりだな。俺に対してずけずけ言うのはあいづくらいだぞ。よし、リアナ。今日は俺の奢りだから沢山食えよ」

ヴァリアスってこんな強引な人だったかな？と遠くへ視線を飛ばしながら思った。

真相（後書き）

ちよこつとヴァリアスとリアナの場面を変更しました。

仲直り（前書き）

後半を付け足しました。

仲直り

散々街中を振り回されて屋敷へ帰ったのは、既に日が沈もうかという所。腕には付き合わせた札だと、戦利品の山が抱えられている。

「久しぶりに楽しかったぞ、リアナ。また時間のある時は付き合ってくれ」

「暇なら仕事してください」

「何か言ったか？」

呟いた小さな本音はどうやら届かなかったようだ。またなど、挨拶代わりに頬に唇を落としてヴァリアスは暗闇に融けていった。リアナは不可抗力とはいえ無断で家を出て行ったことを怒られるだろうと覚悟して、足取り重く裏口の扉を開いた。

そして前述に戻る。

事情を聞き終えた後、室内は不気味なほどに静まりかえっていた。勘違いとはいえリアナを傷つけてしまったことに変わりはない。

「……リアナは愚かな兄を許してくれるでしょうか」

頭が冷えた今、改めて自分のしでかした仕打ちに頭を抱えなくなる。大切にするとっておきながらこの様か。さぞ呆れているだろう。

「リユージュ様。自己嫌悪に陥る前にお嬢様に謝ればいかがかと。お嬢様とリユージュ様の絆はその程度で壊れるものではないでしょう？ お二人は家族なのですから」

家族。

昔、自分がリアナに告げた言葉だと気づき、苦笑いする。

「相変わらずシェイスは厳しいですね」

「何年お側に仕えているとお思いですか？善は急げですよ。早くお行きください」

「ああ、判ったよ。だから押さないでくれ」

どこか吹っ切れたようにリユーグはリアナの部屋へ足を向けた。

合図をしてから扉を開ける。部屋は灯りもつけず真っ暗だった。明るい月の光を頼りにリユーグはうつ伏せているリアナの姿を見つける。

ベッドが音を立てて軋んだ。伏せたままのリアナに迷いながらもそっと手を伸ばす。ぴくりと一度身体が震えたがそれだけだった。

「すまなかったリアナ。君の言い分を聞きもせず勝手に決めつけた挙げ句、決して許されないことを口にした。本当にすまない」

「……………」

「私達が強引にリアナに枷をつけた。リアナが私達を詰りこそすれ、私達がリアナを責める資格はないんだよ。そのことを忘れてはいけなかったんだ」

「……謝らないでください」

「リアナ？」

「わたしが自らこの道を選んだんです。決して囚われたわけではありません。あの時お義兄さま仰いました。私達は新しい家族だと。家族内の規則を守るのは当たり前のことと、破った私が反省すべきことです。それとも私は他人ですか？だからお義兄様は私に何も相談してくださらないのですか？」

曇りのない紫の双眸がリユーグを射抜く。ここ数日、思い悩んでいたことにリアナは気づいていたのだ。氷の仮面がふっと緩み、華奢な身体を抱きしめる。

「違うよりアナ。君は私の大切な妹だ。大切だから守りたい。父もジュードも同じ気持ちなんだ。君は自慢の妹だよ」

不安だったのだろう。優しく接するのは大事な政治の駒だから、とても賢いこの妹なら思っていたのかもしれない。確かに初めはそんな理由だったかもしれない。

だが彼女と言葉を交わし、共に暮らしていくことでいつの日か公爵家のかげがえのない存在になっていたのだ。この自分が無条件に手放したくないと思える程には。

「ほんとうに？」

感情が少し高ぶっているせいかな少し舌足らずだ。

リユーグを見上げる瞳は潤んでいても涙を流した跡はない。どこまでも気丈なリアナに思いきり泣かせてやれない自分の不甲斐なさを感じながらも本当だよ、と頭を撫でる。絹の服が皺になる程強く握られた拳が精一杯リアナの感情を映しているように。

可愛すぎる。思いきり抱きしめて頬擦りしたい。流石に状況を鑑みて辛抱するが、背中に回された指がわきわきと動くのは仕方ないだろう。リユーグの不穏な動きに気づかずリアナは滑らかな頬に唇を押しつけた。

「では、仲直りの印ですお義兄様」

「仲直りの……そうだね」

お返しとばかりにキスの嵐を顔中に降らせたのは言うまでもない。

次の日。

「おはようございます、ヴァリー」

「ああ。昨日はお前の妹に世話になったな」

「彼女から聞きましたよ。随分強引だったとか」

「リ、リトル？」

顔はいつも通り穏やかに笑っているのに、声が1オクターブ低い。静かな怒りを前にヴァリアスの背中に冷や汗が滲む。

「この際ですから言わせていただきます。貴方にとっては僕の妹でしょうが、彼女は貴方のことを何も知らないんですよ。突然知らない人に連れて行かれて人攫いと間違われてもおかしくないんです。日頃から口を酸っぱくして言っているつもりですが、立場を弁えてくださいよ。彼女だから今回は良かったものの、皇弟が人攫いなんて洒落になりません。そもそも女性に対する扱いが為っていない。いいですか。女性というのは……」

この調子で二刻程小言を言われ続け、ヴァリアスは改めてリアナに謝罪の手紙を送ったという。対照的にリトルはいつもの三倍増し爽やかオーラを振りまいていたそうだ。

仲直り（後書き）

最後はやっぱり兄ちゃんが甘めです。リユーク兄ちゃんは書きやすいんだけどなあ。ジュードさんは難しいです。

お茶会 前編

今更ながら、ドレスを着て接見するのは存外恥ずかしいものだ。仮装舞踏会で一度見せたことがあるとはいえ、あの時は変装していた。

つまり何が言いたいかというと、リトルしか知らない人間に、リアナとして会うのはなぜか気恥ずかしい。

「お招きいただき光栄です、皇后殿下。お初にお目にかかりますリアナ・レイス・スフェンネルと申します」

惚けていた表情は一瞬にして、柔らかな微笑みにすぐ変わる。お淑やかな所作で一礼したリアナに、顔を上げさせたヴィエッタは私の茶会へようこそ、とリアナの手を軽く取った。内緒話でもするように小声で遣り取りする。

「とっても良くお似合いよ、リトル。きっとジードも貴方に目を奪われるわね」

「皇太子殿下も出席なさるのですか？」

出席者の名前は全て頭に叩き込んである。その中にジェラルドの名前は記載されていなかったはずだ。

「ええ。仕事の合間に顔を出してくれる予定なの。今回はあの子のために開いたようなものですから当然ね」

「ジード様も大変ですね。でしたら尚更、私は場違いではありませんか？」

「心配しなくても貴方にも関係あることだから。顔合わせに呼んだけれど、実際にお相手は決まっているのよ」

「そうなのですか？では近いうちにお祝い申し上げなければなりませんね。ヴァリアス様にもそろそろ身を固めて欲しいものです」

どこまで鈍いのだか。扇で溜息を押し隠しながら、ヴィエツタは横目でリアナを見た。

まさに究極美といっても過言ではない完璧な美しさは呼吸しているのが不思議なくらいだ。動かなければ精緻な等身大人形と間違えかねないが、裏切っているのはその瞳の輝きと表情。浮かべる軟らかい表情が、ともすれば人形のような冷たさを払拭しているのだ。

肩書きでなく、一個人として見てくれるから傍にいて安心できる。大なり小なり重責を担う者、特に皇族に括られた者達にとって、それがどんなに難しいことか本人は気づいていないだろうが。その愚かなまでの素直さが惹きつけてまないのだ。

近頃、息子がリアナを見る目が変わったことにヴィエツタは気づいている。以前は好奇心の方が勝っていた様だが、ある時からそれが変わった。両親が変化を歓んでいるなど、息子は知らないだろうが、リアナの娘発言は二人にとって本気だった。

噂に聞いていた外見を直に目にして、それは決定事項に変わる。政治的にも反対する余地など、ない。

「そうね。わたくしも楽しみにしているわ」

見えないように何十もの糸を操って、気づけば獲物は絡め取られているだろう。その時が待ち遠しい。

隠れた口元には笑みが浮かんでいた。

皇妃のお茶会に招かれていたカタリナは、皇妃が連れてきた彼の人物を目にして絶句した。髪色を変えていようと、忘れるはずもない。仮装舞踏会で会った、あのウサギ女ではないか。

「皆様新しいお客様を紹介させていただくわね。こちらスフェネル公爵令嬢リアナよ」

「初めまして。若輩者ですがどうぞよろしくお願いします」

「まあ。では貴方があのスフェネル公爵の掌中の珠と噂の……」

フォンベル侯爵令嬢レアナシアの眩きを拾ったカタリナも、その噂を知っていた。数年前に公爵家の養子になったその娘は、血筋を何よりも重んじる貴族社会では嘲笑の的にもなっていたはず。それを払拭したのが、本人と直に会った貴族達と、引き取った公爵一家だった。その溺愛ぶりは有名なのだが、公爵の隠し子という噂が流れなかったのが不思議だったほどだ。

成る程。本人を前にすれば嘲ることなど出来るはずもない。最も高貴とされる、混じり気のない紫の瞳を持つ者を侮辱するのは皇族を侮辱するのと同じだからだ。

「お久しぶりね、リアナ。最近手紙が来ないから心配してたのよ？」

片手にクッキーを摘んだまま挨拶をするこの不法者はデーリン伯爵令嬢リディアン。こんな身分の低い者と同席するのは嫌なのだが、彼女はあのキエリファ皇女のお気に入り。昔からその合わない皇女とは極力接触を避けたいので、表面上は適度に距離を保っている。

「リディアンと知り合いだったなら早いわね。リディアンの向かい側に座るのがフォンベル侯爵令嬢レアナシア。私の姪に当たるわ。」

彼女の隣に座っているのがランズディ公爵令嬢カタリナよ。カタリナはよく皇城に遊びに来ていたから、いろいろ訊くと良いわ。宮中のしきたりにも詳しいわよ」

「そんな。皇妃様程ではありませんわ。わたくしなどまだまだ足元にも及びませんもの」

「そう言っ下さると嬉しいわね。リアナは来年デビュタントがあるの。わたくしではうんと前の話になってしまうもの。だから若い貴方達の話聞かせてやってちょうだい」

デビュタントがまだ？

それはつまり、社交界のデビュ前ということだ。先日開かれた宴を思い出し、人違いだったのかとカタリナの瞳が揺れる。あれは社交デビューしていないと招待状が届かないからだ。

「私達の体験談でよろしければ」

「んー。でも正直面倒くさいだけよ、あれは。一族総出でやらされるから大変。あんなのに夢見る女を尊敬するわね」

それは貴方だけでしてよ、猿女。

「あら。わたくしはとても楽しみでしたわ。ドレスや装飾品をあれだけ取り揃えるのを許されるのは、一生に二度しか経験できませんもの。最初で最後の機会かもしれませんから、存分に楽しむと良いですわ」

「二度？」

「そうね。成人を認められるデビュタントと結婚式だけだもの。まさに一生の思い出なのよ」

「素敵ですね」

おっとり頷くりアナ。溢れんばかりの笑顔を直視してしまったカタリナはうっと引いてしまった。嫌味で言ったつもりなのに、全然通じていない。計算か天然か。侮れない。

落ち着ける意味を込めて、お茶を口に運ぶ。薔薇のエキスを抽出、濾過を繰り返して作られる稀少な薔薇茶の甘やかな芳香が口に広がる。

「カタリナ様のドレスはどんな仕様でしたか？咲き初めのような初々しい薔薇色もお似合いでしょうね。それとも、今着ていらっしゃるような、瞳に合わせた朝露をたっぷり含んだ緑色かしら？」

「え、ええ。わたくしのドレスはロジエッタに頼んだ萌葱色のドレスでしたわ」

「ロジエッタ！さぞ素晴らしかったでしょうね」

ほうと熱い溜め息さえついて見せるリアナに気をよくしたカタリナは、当然とばかりに頷いた。その様子を見て、ほくそ笑んでいたヴィエッタに気づいたのはリディアンだけだった。

「レアナシア様はどのような？」

女達の話題は尽きることなく、穏やかな時間が流れていく。

お茶会 前編（後書き）

ジェラルドさんのキャラはいまいち掴みにくいです。さてさて、これから動き出すわけですが、エンドをどう終わらせるかで悩み中。

最悪二つ考えるのもありかと、構想練ってます。

近々アンケート作るかも。

その時が来ましたら、ご協力お願いします。

後半部分を削りました。下書きを消し忘れたようでして、すみません。

お茶会 中編

すっかりリアナが打ち解けた頃に彼等はやってきた。

「全く、母上も人が悪い。手錠まで持ち出すのはいくら何でも反則だと僕は思うよ」

「とぼっちりを受ける俺の身にもなってくれないか、本当に。俺は関係ないだろう？」

「いやいや、叔父上は僕より先でしょう、やっぱり」

「こんな時だけ叔父扱いするな。大体俺より年上だろうが」

「毒を食らわば皿まで。死なば諸共」

「頼むから巻き込むな」

薔薇の生け垣を越え、物々しい雰囲気で、囚人よろしく近衛兵に囲まれて手枷をかけられたジェラルドとヴァリアスが現れた。

「あら、いらっしやいジード、ヴァリー。後で話したいことがあるから覚悟してらっしやい。……ご苦勞様。下がって良いわ」

「はっ」

鈍い音を立てて枷が外される。そこに施された文様を見てリアナの目が僅かに開かれる。

見間違いでなければあれは魔術師専用の手錠だ。魔術塔の許可なく使用できなかったはずだ。

手錠の後をさすりながら、ジェラルドがヴィエッタの手を取って口づける。

「三日ぶりですね、母上。今日はいつにも増して美しいですよ」

「ご無沙汰しております、皇后殿下。仕事があるのでこれで失礼します」

「今日は仕事がお休みなことはリトルから聞いて承知ですよ、ヴァリー。ジード、それを言うべき人は他にいるでしょう？」

逃げ道を封じられ舌打ちするヴァリアスと、嫌々ながらに出席者へと視線を移したジェラルド。見回した双方ともがある一点で視線が固定される。

「まさか……」

「あの時の妖精……？」

は？とヴァリアスには似つかない単語が飛び出してきたことにジェラルドの眉が寄せられる。悪戯が成功して鼻歌でも歌いそうなヴィエッタは二人の前に、一人の少女を差し出した。ジェラルドは愉悅に染まり、ヴァリアスはぼかんと口を開けたままその姿を凝視する。

「こちらはスフェンネル公爵令嬢リアナ。今年デビュタントを控えている令嬢よ。こっちがわたくしの息子で、間抜け面してるのが甥のヴァリアス」

「お初にお目にかかります、両殿下。リアナと申します」

伏せた面を上げれば、曇り無い鮮やかな紫眼が覗く。誰もが驚く双眸を、しかし二人は動じなかった。

「ようこそ皇城へ。リアナと呼んでも？」

「構いませんわ、皇太子殿下」

両者共に挨拶を交わして隣を見る。が、いつまでも呆けているヴァリアスをジェラルドが脇を突いて挨拶を促した。

「す、すまない。ヴァリアスだ。よろしく」

ぎくしゃくと手を差しだしたヴァリアスに、（本来なら手の甲にキスを落とすのが挨拶だ）やや驚きながらもリアナは握りかえた。挙動不審すぎるヴァリアスに、内心気づかれたかと冷や汗を掻きつつも差し出されたジェラルドの腕に掴まる。

男達はそれぞれリアナとリディアン、カタリナとレアナシアの間に座る。改めて侍女達が全員分のカップに新たにお茶を注いだ。先程とは違い、清涼感を感じさせるすつきりとした味だ。

「噂の姫君に会えて光栄だな。実際は公爵の話に聞いた以上だったけど」

「どのような話か、よければお聞かせ願えますか？どうせ、お転婆とかじゃ馬とか聞かされたのでしょうか」

「おや、君はお転婆だったのかい？僕が公爵から聞いたのは、目に入れても痛くないほど可愛い娘がいるってことだけなんだけどね」

自分の失言にしまったと頬を染めるリアナ。普段でもぐらっと来るのだが、きちんと女性の姿でこれをやられると凶悪なほど可愛い。猫可愛がりする、あの一家と知っているであろう両親の気持ちがよく判るジェラルドだった。

当然そんな二人を面白く思わないのが、対面に座るカタリナとヴァリアスだ。時折口を挟めば、ジェラルドにあしらわれる。ジェラルドがリアナに興味を持っているのは明らかだった。

他の花嫁候補達とは普通に会話に興じているのに、なぜかカタリナはやりわりと避けられていた。

一体なぜ？

これまでは自分の優位性を信じて疑わなかった。公爵令嬢という高い地位。それに見合う整った容姿。徹底的に教え込まれた礼儀作法。その名に恥じぬだけの行いをしてきたつもりだ。だからこそ皇太子の花嫁筆頭候補とまで目されるようになったのだから。しかし、この少女が現れたことによって、全てが水泡に帰している。公爵家の中でも筆頭のスフェンネルを抱き、容姿端麗は言うに及ばず、何より皇后のお気に入り。欠点といえば血筋だが、皇家直系にしか継がれないはずの純粋な紫の瞳を持つ限り、誰も彼女を貶めることなど出来るはずがない。これまで築いたものが崩れ落ちる音がした。

「カタリナ様？ お顔が真っ青ですが御気分でも悪いのですか」

耳当たりの良い、涼やかな声に現実が戻ってくる。冷たくなった指先は、暖かな陽射しで感覚を取り戻す。演技ではなく気を遣っているのだろう、いつの間にか注目されていることに狼狽した。

「本当だわ。具合でも悪いのかしら」

「あ、いえ……。その気分があまり優れませんので。申し訳ありませんが失礼いたしますわ」

中座する非礼を詫びて、侍女に支えられながら屋内に入っていく。それを見届けて、ヴィエッタは空を見上げた。太陽の位置が大分傾いている。

「あらもうこんな時間なのね。風が少し冷たくなってきたわ。そろ

そろお開きにしましょうか」

その言葉を皮切りに、ヴィエッタによるジェラルドの花嫁候補達の顔合わせが終わった。

お茶会 後編

「……リー。ヴァリー！」

「あ？リトルか」

「リトルか、じゃありません！一体どうしたんですか、ぼやっとして。さっきから手が止まってますよ」

手元を見れば確かに一枚も進んではいなかった。報告書の字を追っても、直ぐに思考は別へと飛んでいく。これ以上は仕事にならないと判断して、机に書類を放り投げた。

「珍しいですね。貴方が集中できないなんて」

普段から何だかんだ言いながら、手際よく雑務を片づけていくのがヴァリアスだ。どうしても我慢できなくなると、有無を言わず何処かへ出かけてしまうことはあれど、前回の出奔の時期から考えてまだ早い。彼の活動源でもある菓子も、先日買い揃えたばかりで切れているわけではない。はて何が原因かと首を傾げるリアナに、ヴァリアスは組んだ手に顎を乗せて溜め息をつく。

脳裏からは先日の茶会の席で紹介された令嬢の姿が離れない。彼の令嬢はリトルの主家に当たるのか、とぼんやり見ていた。

熱っぽい目で見られて、リアナはいよいよ調子がおかしいと額に手を当てる。熱、ではないようだ。季節外れの風邪か？いやいや、ヴァリアスの体調管理は万全の筈。起床から就寝、果ては夜の交友関係まで精通しているリアナは、体調も把握している。今朝迎えに行った時点で特に体調不良にも見えなかったのだが。

先程から人の顔を見る度に溜息を漏らすのは止めて欲しい。気づかないうちに不興でもかったのだろうか？

「あの、ヴァリー」

「ん？どうした」

「僕の、どこがいけなかったのでしょうか」

「はあ？」

「いえ。先程から僕に言いたいことがあるようなので、正直に言うてください。何処か気に入らないことがありましたか？」

「は……？ いやいや、お前はいつもよくやってくれている」

「はつきり言ってくれて構いませんよ？ 納得できれば改善しますから」

「十分だぞ。これ以上ないくらいにな」

実際リトルが居てくれなければ、満足に仕事も出来ないだろう。これもまたあと一年足らずかと思えば憂鬱になる。

この山のような仕事をどうしろというのだ！

リトルの連れてきた後任は、それなりに仕事は出来るのだがリトルと比べれば格段に劣る。更に彼はあくまで事務官であって、公私を分けた腹心とはいかない。それがまた頭痛の種だった。

目の前の仕事溜まってるのに集中できず、むしろくしゃりするばかりだ。例の令嬢とリトルの顔がぐるぐると頭の中で混じり合い……。

「お前、そっくりだな」

指の隙間から覗くその姿に、どうして今まで気づかなかったのか不思議なくらいだ。

「誰がですか？」

「むしろお前の妹が、か？　そういえば、あの娘もリアナだったな。いやまさか」

ヴァリアスの顔色が変わる。スフェンネル公爵令嬢のリアナ。リトルの双子の妹。スフェンネル公爵遠縁のリトル。

もしかして、という淡い期待。そもそもスフェンネル公爵子息であるジュードやリユークのリトルに対する過保護っぷりは少々、いやかなり目に余る。

そりゃあ同じ顔が二つもあればどちらも可愛がりたくなるだろう。

肝心な点でずれているヴァリアスは腕を組みながら納得したように何度も頷いた。人外美貌がこう何人も居ては堪らない。頭の中ではリトルの妹Ⅱ公爵令嬢リアナの図が出来上がっている。

どういった経緯か、リトルの妹は公爵家に養子に出された。そして共々公爵一家に可愛がられているとすれば全て丸く収まる。きつとこのことに悩んでいたのだなと自己完結したら少しすっきりした。

「誰だって同じ顔が三つもあれば気になるよな。お前も水臭いな。妹が公爵家の養子になってると言ってくれば良かったのに」

以前一日城下を引っ張り回してしまったではないか。道理で慌てていたわけだ。

「えーと？　すみません。会話についていけないのですが」

「先日皇后殿下のお茶会でスフェンネル公爵令嬢とお会いした。あれはお前の妹だろう？」

確信した問いに、舌打ちしたくなるのを抑えてリアナは言及を避けた。

「さて、次の仕事をお持ちしますね。それが終わるまで今日は帰しませんから」

ヴァリアスの叫びを後に、リアナは極上の笑みを浮かべて部屋を出た。

薔薇の甘い薫りを乗せて、風が生け垣を揺らす。すっかり冷めてしまったお茶を含みながら、自然と笑みが零れてくる。

「人が悪いですね、母上」

「あら、失礼ね。わたくしはいっだって息子のためを思っているのですよ。その母に向かって人が悪いとは親不孝な息子ね」

「でも、感謝しますよ。これも貴方と父上の狙い通りですか？」

「人の気持ちまで操作することは出来ませんよ。……けれど、欲しくなったでしょう？」

「ええ。彼女なら立派に務めを果たしてくれることでしょう」

「それだけ？その程度なら彼女の番人が許してくれませんかよ」

「お分かりのくせに。ヴァリーが出来たんだ。必ず手に入れてみせますよ」

「期待しないで待っているわ。あの人も本気で動く様ですし、精々負けないように頑張きなさい」

強敵の参戦に苦虫を噛み潰したように顔を歪める。一体何を考えているのか判らない。自分の後宮にでも入れるつもりだろうか？

「分が悪い勝負ですね。可愛い息子のために母上も協力して下さい」
「可愛い子には旅をさせろと言うじゃない。でもそうね。公平を期すために一年だけ、縁談は抑えておくわ。それからあの人の名誉のために言うけれど、娘にする手段はいくらでもあるのよ」

「……本人の意志は？」

「ないわ。けれどこれは決定事項。公爵もそのつもりで連れてきたのでしょうね。恐らくヴァリーに宛うつもりだったのでしょうけれど、わたくしもあの人もそれは望んでいないわ。だって気に入ったんだもの」

「強欲ですね」

「そうよ。だからね、ジード。本気で欲しければなりふり構わず攫ってしまいなさい。あの人はそうしたわ」

懐かしそうに眼を細めるヴィエッタ。当時、母には婚約していた幼なじみがいた。相思相愛だったと聞く。今のヴィエッタとリュディアスを見れば二人の仲を疑うわけではないが、母はどう思ったのだろう。

「父上を、恨んではいないのですか？」

「どうして？ あんなに情熱な人は他にいないわよ。……うふふ。心配しなくてもわたくしはあの人を愛しているわよ。ロジーのことは愛していたけれど、リュドの背負っているものを一緒に背負いたいと、そう思ったのはあの人だけよ」

「やっぱり君は私には勿体ない女性だよ、ヴィエリ」
「あなた！」

少女の様に頬を染める母を、母にしか見せない優しい顔をした父が背後から抱きしめる。そのまま二人の世界に突入した両親から視線を外して、夕焼けに染まった薔薇を觀賞した。

あの時の白薔薇を手折ったのもここだった。甘い薫りが記憶を誘い、先日のような感触を思い出させる。

人知れず微笑を浮かべる息子に、両親達は意味ありげに視線を交わしていた。

お茶会 後編（後書き）

連続投稿でっせ。一時間後にもう一話予約入れています。

竜騎士の日常

なんの変哲もない扉の前に立ち止まったリアナは、大きく息を吸って気合いを入れてからノックをする。なんせ、死体の一つや二つ、転がっていないのが不思議な部屋だ。今日こそ、死者が出てその始末に追われることになってもおかしくない。竜騎士全体の雑用を一手に引き受ける身としてはごめん被りたいところだ。

ここの住人がノックを聴かないのはいつものことなので、無断でドアノブを捻って扉を開けた。

「クレハさん。分析は進みました？」

「やあいらっしゃい、リトル。そこにでもかけて待っててよ」

足の踏み場もない部屋の、唯一の空間である寝台に腰掛けたリアナはぐると部屋を見回す。何に使うのか、怪しげな動物の剥製からがらくたのような欠けた壺まで置いてある。予想していたものはなかったのではっと一安心。

それにしても……。

つい一ヶ月前の大掃除を思い出し、頭が痛くなった。

竜騎士にはクレハのような生粋の研究者も多く、執務室と呼ばれる彼等の仕事部屋のほとんどは似たり寄ったりな感じで散らかっている。整理も兼ねて、時には実験体から助手までさせられる彼等の部下達を総動員して一月に一度、大掃除を行っているのだ。

その都度、本人を無視してこちらが不必要と判断したものは容赦

なく廃棄しているはずなのだが、なぜ一月でこうも仕事に関係なさそうなものが増えているのだろうか。部下達は何をしているのかと問いつめてやりたい。

久しぶりに抜き打ち掃除でもしようかと計画を立てているところで、ようやくクレハがお盆を持って現れた。いかにも不健康そうな顔には隈が定着し、よれよれの白衣は様々な染みがこべりついている。

掃除の前に必要なことがあるようだ。

「洗濯に食事、ですね。後で部下を向かわせます」

「やゝ、いつも悪いねゝ。ほい、リトル。どっちか選んでよゝ。一つは手違いで隊長に盛っちゃった新種の神経麻痺の改良版で、もう一つは旧来のアメラナの根を二倍にしてみましたゝ」

アメラナの根とは、自白を促し、幻覚作用を及ぼす毒草のことだ。二倍、つまり通常に使われる量の二倍をお茶に入れたらしい。クレハミドウ、皇城の一級薬師でもある彼だが、趣味は毒薬開発とやや危ない人だ。一級薬師の称号を持つだけあってその腕は確かなのだが、誰彼構わず毒を勧めるので竜騎士でも5本の指に入る要注意人物に当たる。

因みに受け取り拒否はほぼ不可能。実験に対する熱意は凄まじく、彼から逃げ切れるのは同じ竜騎士くらいのものだ。室内に足を踏み入れた瞬間ロープで捕らえられ、有無を言わせず飲まされることもあるのでクレハを訪ねる者はほとんどいない。リアナが来てからは、主に彼女が窓口として間に入っていた。

「また新しい実験ですか？毒薬の経過に付き合うほど時間に余裕がありませんよ」

「君なら大丈夫だよ。過去に僕の毒を制した生物なんて君くらいだからね」

「だったら今回も無駄なことは判るでしょう？」

「ん？だって、僕の部下達みーんな寝込んでるんだよね。実験体がないからつまらないんだよ」

「ぞろ目隊は？」

「前回、2週間ほど病院送りにしちゃってゼイスに禁止されてるんだ。だからいいでしょ？」

「解毒薬は？」

「きつと大丈夫だよ」

作ってないのか。確かに自分以外に飲ませるわけにはいかない。ここで逃げても新たな犠牲者が出るだけだ。流石に、この忙しい時に解毒薬など調合する暇はない。

ねえねえとお願いされて、リアナは腹を括った。仕方なく片方に口を付ける。期待の目で見られても居心地が悪い。

「微かに舌の痺れを感じますね。味は甘いのでしょうか？シロップの代わりに使えそうです」

「……即効性の薬なんだけど。今回も失敗か」

けろっとしたまま、有用性を語るリアナに悄然と肩を落とすクレハ。彼の最大の目標はリアナにも効く毒を生成する事だそう。創造神の子供であるために、この世界から作られたものがリアナを害することは決してない。ようするに、毒の類は一切効かない身体だ。努力するだけ無駄とは言えなかった。解毒不能の毒を作ることには有益だったので。

毒薬仕込みのお茶と一緒にお盆に乗せられた書類を受け取り、目を通す。それは先日解析に回した薬成分の更なる詳細だった。薬の元となる植物がどこの地方で採れるかなどが書かれている。

特筆すべきはその主成分である植物が極めて温暖な地方に自生している植物であること。道端の雑草でしかないそれは、ある植物を条件にすると、驚くべき効力を発揮するのだ。

”青海の山賊”が、危険を冒して国境付近で活動していることも関係しているのかもしれない。

「ご苦労様です、クレハさん。くれぐれも僕の部下達に差し入れしないでくださいね？」

「努力するよ」

生返事に、部下の冥福を祈りながらリアナは哀れな部下という名の子羊を探すべく、待機室へと足を向けた。

竜騎士の日常（後書き）

現在、番外編でジュード兄ちゃんの話を書いています。暫くは小ネタを載せたいですね。

予定では、前回拍手御礼で1位を取ったにも拘わらず出てこなかったジュード兄ちゃんとヴァリアスさんを書こうと思っています。

あくまで予定なので期待しないで長い目で待ってやってください。

天国か地獄か 前編

ヴァリアス兼竜騎士達の補佐であるリアナにも、竜騎士の一人として執務室を当てられている。その隣にはリアナ直属部隊の待機室があり、リアナの用事はそこにあった。

「隊長！どうしたんですか、こんな時間に」

隅の机で仕事をしていたそばかすの浮いた副隊長が、唐突に現れた上司に虚をつかれる。太陽はまだ中点を越えていない。

「騎士長の仕事が一段落したから見回りに来たんです。他の者は？」

「倉庫の備品整理に行ってますけど……」

見回り、と聞いてぎくりと身体が強ばる。嫌な予感をひしひしと感じながらも、答えた。

「リックさん、少しだけ時間ありますよね」

「いえ、僕は先月の経費の計算中ですので無理です。これの締め切り明日なんですよ」

元々経理課で働いていたリックだが、偶々兵庁の担当でもあったことでその仕事ぶりを目につけられ、リアナに引っこ抜かれた経緯がある。

その彼でさえ、リアナの仕事量に比べれば微々たるものだ。隊長であるリアナの意向（門限がある）で残業の許されない職場では、常に全力で当たらないと仕事が片づかない。そして明日までに片づけなければならぬ書類の束が、あと二つほど残っているのだ。

「時間、ありますよね？」

片づかないのだが。有無を言わせない圧力を感じて、一心不乱に動いていた手がようやく止まる。視線を合わせるな、視線を合わせるなと念じながらも米神から伝う汗が、書類に染みを残す。

「副隊長！、倉庫の整理終わりましたぜ」

おお。神は僕を見捨ててはいなかった！

ウェイアーに感謝を捧げ、丁度良いタイミングで戻ってきた隊士達を涙目で迎えるリック。その視線を受けた隊士達は、何事かと首を傾げ、この時間は騎士長の執務室に詰めているはずの上司を認めて固まった。

「たた、隊長！？何でここに……」

「おや、皆さんお疲れ様です。この後は確か訓練の時間でしたよね」
「は、はひ！」

裏返った声が、ここにいる者達全員的心情を表している。決められたスケジュールがあるから上司がやってくることはほとんど無い。つまり例外という名の変更がない限り。

訓練で扱われるだけならまだいい。問題はそれ以外の、つまり雑用係としての方だった。予定にない雑用は、大抵録でもない相場が決まっている。

「それ、中止です。今日は一斉掃除を行うことになりました」

笑顔で告げられた死刑宣告に、全員が固まった。それに気づかず、

鐘が三つ鳴る頃に集合してくださいね、と宣い出て行く。ぱたんと扉が閉じられて一拍後。絶叫が上がった。

「うおい、どういことだよ！前回掃除してからまだ一月経ってないはずだぜ？」

「今度こそまともな方々の部屋に当たりますように」
「駄目だ。俺の命は今日で終わりだ……」

予定を確認する者、或いは運を少しでも良くしようと神に祈る者、果ては遺書まで書くこうとする始末。青ざめながらも準備をしようと動く者は一割にも満たない。つまり、一人か二人。

この場の收拾をつけられるのは、リックだけだ。頃合いを見て声をかけるか。そう考えて、再び意識を書類に戻した。

今彼等の目の前には、これからの運命を決める重大なものが置かれている。簡単に言えば部屋割りのくじ。誰がどの場所を担当するか。運が悪ければ、良くて軽傷、最悪死ぬかもしれない。逆に運が良ければ、労いと称してお茶を振る舞われたりする。正に運命の分かれ道だった。しかも一年は同じ担当になる。

名前を呼ばれた者、つまり階級順に呼ばれるのだが、一人一人がこれから断頭台に登るような気持ちでくじを引いていく。全員に行き渡ったところで、開けてくださいと号令がかかる。ごくりと唾を飲み、男らしくえいやっと開けた。この後は先程と同じく現実逃避コースへいく者もいるのだが、生憎時間を無駄にしない麗しの天使様が降臨されているため、無理矢理現実を叩きつけられる。言ってしまうえば強引に連行される。

人生何事も諦めが肝心なのだ。流石にリアナと付き合いの長いベ

テランなどは、既に悟りきっているので虚ろな眼差しながらも目的地へと歩いていく。

天国か地獄か 前編（後書き）

11／1小話を外伝部屋に移動しました。一部レイアウト変更されていますが、内容は変わらないです。

天国か地獄か 後編（前書き）

今回はリアナちゃんの部下にスポットを当てています。

天国か地獄か 後編

日頃の行いが良かったのか、リックの担当部屋はジュードであった。竜騎士の中でもまともな部類に入るジュードの部屋は、個人の性格がよく表れている。実用的な物以外は置いておらず、唯一絵が一枚飾られているだけで殺伐としていた。上司に似るのか、部下も寡黙な人間が多く、黙々と仕事をこなす。

「失礼します。大掃除にやってきた0番隊の者ですが」
「入れ」

どうやら主はいたようだ。ジュード様は地方を総括する竜騎士なので不在な事も多い。流石に勝手にやる訳にはいかないので、その場合は掃除しない。尤も隊長は全竜騎士の予定を把握しているので、そのようなことは一度もないが。

口元に布を巻き、雑巾やブラシ、そしてバケツを持って入室する。相変わらず殺風景……いやいや、こざっぱりとしている。しかし今日は窓辺に一輪咲いた花が飾られていた。

誰が用意したのだろう。不思議に思っていると、ジュード様がペンを止めて顔を上げた。

「それは妹が用意したものだ」

「ジュード様の妹君、ですか」

「ああ」

花を見つめるジュード様の表情は軟らかい。ジュード様の妹を知らない者はほとんどいないだろう。なんせ、この部屋唯一の飾りで

ある絵画の人物像が、その妹君だからだ。昨今有名な画家が描いたものだが、確実に本人の四割り増し綺麗に描かれているだろうと専らの噂だ。それ程にこの絵の人物は美しく、そして愛らしい。万人が完璧だと称する美しい顔立ちに、幸せな夢でも見ているのだろう、思わずこちらが頬を緩めてしまいそうな可愛らしい表情を浮かべて犬と眠っている。

この絵を見つめる時のジュード様の目は優しく、余程妹を大切にしているのだろう。だが、リックはジュード様が隊長と会う時も同じ表情をしていることを知っている。リックが隊長の傍にいたことが多いから気づけたのだろう、些細な変化だ。この絵の少女は隊長にそっくりで、なぜ誰も気づかないのか不思議だ。まあ、実際に隊長がこんな柔らかい寝顔を晒すとも思えないので、別人だろうが。

普段掃除をしない窓の棧や、部屋の隅の埃を取っているとノックがした。顔を出したのは隊長で、見回りに来たのだろうか。

「ジュード様。来期の予算について大体の数値が出たので報告に」

「ご苦労。確認するからそこで待っていてくれ」

「判りました。……ああ、リックさんが担当でしたか」

「お疲れ様です、隊長。あの、それって」

「急いでいるようでしたから、片付けました。いけなかったでしょうか？」

「いいえ、助かりました。ですが、相当数あったはずですが」

少なくとも数時間で終わるような量ではない。しかし隊長は笑顔を残して、お茶を淹れに席を立った。

終わったのだと悟る。僕は自信喪失しそうだ。自分で言うのも何だが、僕は他の人間に比べて仕事能力が高いと思う。けれど、隊長を前にするとそれすらも傲慢な考えなのではないかと思うのだ。隊長の仕事ぶりは速いのに的確でしかも丁寧だ。両手でそれぞれ別の書

類を書いているのを見た時はさすがに驚いた。なぜ出来るのか聞いたけれど、実際それを実行に移すのは普通の人間には不可能だろう。

「リックさんも休憩にしましょう。ヴァリアス様には内緒にしてくださいね」

そう言って出されたのは、某有名菓子店の印の入ったお菓子だった。一口食べれば成る程、有名になるわけだ。ほんのり感じる程度の甘みが、疲れた身体に染み入る。淹れられたお茶も美味しい。

「ジュード様もどうぞ。サルンナの花茶です」

「俺の好きなやつだな。……美味しい」

「よかったです。露店で見つけたんですけど、これはなかなか売ってないですから」

「いつもすまん。毎年作っているのだろう？」

「ええ。でも楽しいですよ。お父様も喜んでいらっしゃるし」

「母上の大切な思い出だからな」

隊長とジュード様は同郷だと聞いている。確か遠縁に当たるとか。そのせいかお二人は仲が良い。今もあの隊長が、年相応に頭を撫でられて嬉しそうにしている。新人辺りは見たら卒倒するだろうなと考えるがらお茶を啜る。大半の者が忘れていようだが、まだ十四歳の少年なのだ。こうして隊長を子供扱いするのは、ジュード様とカラル様くらいだろう。

「ところでリトル」

「何でしょうか、ジュード様？」

「兄上から報告が届いている。いつから帰ってないんだ？」

珍しいことに隊長が本気で困っている。剥がれることのない笑顔

が若干引きつっていた。

「ちゃんと外泊許可は貰っていますよ」

「顔色も悪いな。事と次第によっては、騎士長に直談判せねばなるまい」

「ヴァリアス様は関係ありません！…あ」

「リトル」

ジュード様が低い声で隊長の名を呼ぶ。傍観しているだけの僕ですら怖い形相だ。

「……リユージュ様には言わないでください」

顔逸らしても、ジュード様はかなりお怒りですよ？

腕と腰を捕まえられているから逃げられないようだ。精一杯距離を取ろうとする隊長が、失礼だがかなり可愛い。

「俺の言いたいことは分かるな？」

「……はい」

「俺が起こすまでだ。見張っているから覚悟しろ」

「ジュード様の意地悪」

「兄上に報告を……」

「冗談ですよ、ジュード様」

いつも丸め込んでいる隊長が、言いように手の平で転がされているのはなかなか新鮮だった。脇の下に手を入れて小柄な隊長を軽々持ち上げたジュード様はそのまま隣室へ消えていく。確か、竜騎士に与えられる個室だ。基本的に竜騎士には三つの部屋が与えられる。一つが執務室、そしてもう一つが待機室。待機室は竜騎士直属の部

下の控え室みたいなものだ。そして最後が個室。竜騎士が仮眠をとったりすることが出来る場所で、厨房などちょっとした生活ができるようになっていいる。徹夜で待機なんてこともあるのでその為だ。

お茶を飲み終えても戻ってくる気配はない。リュウグ様と隊長に限ってまさかとは思うが、一体何をしているのだろう。

その疑問は程なくして解消された。

捲った袖を直しながら戻ってきたリュウグ様が扉を閉めるまでに、遠目に隊長が眠っているのが判った。無垢な幼子のような寝顔が一瞬確認できて、僕は思わず見惚れてしまった。隊長が女と見まごうほど綺麗だったのだと、出会って久しく忘れていた感情を喚び起こされる。しかし、無情にも扉は閉められ、じっとリュウグ様が見ていることに気づき、僕は慌てて掃除に戻った。

ここでもう一度、彼がその絵を見ていたならまた違ったのだろう。だが、彼は重い空気に居たたまれず、手早く掃除をして部屋を出たのだった。

0番隊の総数、500。内、皇都勤務50名。無事に生還した数、38。内訳・軽傷者8名、骨折等全治3週間以内の者16名、重傷者8名、意識重体2名、五体満足者4名。
残り12名に関しては、至急救出求む。

天国か地獄か 後編（後書き）

小話を外伝部屋に移動しました。一部レイアウト変更されていますが、内容は変わりません。

尋問

不審人物を捕らえてから早一週間。竜騎士の一人クレハから葉の結果を待って、今日ようやく尋問が始まる。

「あらあ、リトル坊やじゃないの。あんたがここに来るなんて珍しいわね」

「僕が捕らえたので」

「坊やにはちよつときついかもしれないわよん？隊長がよくお許しになったわねえ」

「初期段階なので許可が出たんですよ。僕としてはその先まできちんと見届けたいですけど、隊長の許可が下りませんから」

「そうねえ。隊長はあんたのこと大切にしているから見せたくないのよお、きつと」

女言葉で女顔だがこの人は歴とした男である。名前はチェルス。尋問担当官で城の牢屋の管理を任されている竜騎士だ。リアナにとっては女装癖のある変わった人という印象しかないのだが、衛兵達には恐怖の代名詞になっている。

リアナが牢屋に出向くのはこれで二回目。一回目は案内されただけなので、尋問に立ち会うのはこれが初めてだ。竜騎士として拝命したからには一度全ての部署に放り込まれるのが慣例なのだが、上の圧力によってリアナは闇の部分、つまり拷問や暗殺などの部署は遠ざけられている。

まだ幼いからという理由だが、例え成人してもリアナがそれらを実際に目にするのではないだろう。今回とて単に取り調べに同伴するだけで、それ以上は担当に任せることになっているのだから。当然参加することにヴァリアスは反対したが強引に頼み込んだのだ。

いつになく積極的なリアナにヴァリアスは訝しんでいたが。

「今回の相手は一般市民だし。大丈夫だと思うけど、足手まといになるようだったら直ぐにぼいするからそのつもりでねえ」

「判っていますよ、チェルスさん。今回は無理を言ってますみません」

扉を開けた時から尋問は始まる。その厳しさを知っているチェルスだからこそ、興味半分で来るなら戻れと言っているのだ。しかしリアナも退く気はない。

「……そ。じゃあ行くわよ」

「はい」

衛兵によって扉が開かれる。リアナは顔を引き締めてチェルスの後に続いた。数日前よりさらに憔悴した囚人の姿にリアナの心が痛む。チェルスは椅子に座ると机の前で頬杖をついた。

「うふふ。いい具合に襲れてるわねん。住み心地はどうだったかしら？」

「俺は何もやってない！」

「さあ、それはあんたが判断する事じゃないわ。それより自己紹介しましょう。あたしは竜騎士のチェルスよ。あんたは？」

「……………フレイ」

「よろしくねえ、フレイ。因みにどこの出身地なの？あたしはケリアシャ子爵領の出なの。ヨール山脈の麓にあって、ほとんど雪で覆われた地なの。これがまた交通の便がとくっても不便でねえ。暖期にしか家に帰れないのが難点なのよお。雪なんて大っきらいだわ」

「……俺はスフェンネル公爵領の小さな村だ。年中花が咲いて、特に温期が綺麗なんだ。村中の花が咲いてまるで花の絨毯みたいにな

る」

「いいわねえ花の絨毯なんて。うっとりしちゃうわ。南の方は暖かいから羨ましいわあ。ここも北の方だから寒期になると結構寒いよ。特に飛んでる時なんて最悪。冷たい風がもろ身体に当たるから凍えちゃいそうなの。冬の見回りはとってもきついよねん」

「へえ。でも空が飛べたら気持ちいいんだろうな」

「上空からの眺めは確かに最高よく。というかそれ以外無いって言った方が正しいかもしれないけどねえ。さてと、世間話はこれくらいにして本題に入りましょうかあ」

緩んでいた空気がぴりっと引き締まるのを肌で感じた。少しでも緊張を解すために世間話をしたのかもしれない。相手は訓練を受けたわけでもないただの一般市民だから。

「教えて欲しいのは二つです。一つは遠いスフェンネル公爵領の間が皇都まで何をしに来たのか、もう一つはあの薬は何なのか。教えてくださいますか？」

「君は……いや、人違いかな」

横から口を挟んだリアナに初めて気づいたようで、驚いているフレイの姿があった。それには気づかないふりをしてチェルスは話を進めた。

「じゃあまず一つ目を教えてくれる？こっちだっていつまでもあんなたちに無駄飯を食べさせる余裕はないのお」

「わ、判った。言うよ。今俺達の村で変な病気が流行ってるんだ。最初はただの風邪が流行ってるんだと思ったんだけど、一週間しても治らない。さすがにおかしいと思って医者と呼ばうとしたら、医者も同じものにかかってさ。それどころか村のみんなも寝込んでるっていうじゃないか。父さんも母さんも歳だし、娘はまだ幼い。

妻だって妊娠中なんだ。親方達が止めるのを振り切って村に行く途中で、山賊に会った。その山賊は病に効く薬を持っていると言った。荷物を指定された場所に持っていけば薬をくれると。半信半疑だったけどその時は藁にも縋りたかったんだよ。だから、俺と同じ様な境遇の奴等と皇都まで来たんだ。……本当だよ。頼むから家に帰してくれ」

最後は力無く項垂れる。チェルスにはフレイが演技ではないと思えた。ひとまず保留にして次を呼ぶ。そして、この日の尋問を終えた。

「彼等の証言は全て一致しています。スフェンネル公爵領の奇病に關しては現在エラディオさんに直接出向いて貰っています。公爵は皇都に滞在中なので」

エラディオは、スフェンネル公爵領一帯を担当している竜騎士だ。公爵不在の今は、代わりに竜騎士が対応することになる。

「そうか。初めからお前は彼等と知り合いだったんだな。だからあの時、後をつけたのか」

「……はい。ところで彼等の受け取った薬ですが、スフェンネル公爵領に自生しているドーラという植物が主成分だそうです。南であればよく目にする植物で特に薬草に使われているわけではありません。今回の症例は聞く限りでは風邪に非常に良く似ており、そちらで対応できないかクレハさんに要請中です」

「今は様子見、だな。被害もどのくらいか現時点では判らないが、万一の時には封鎖もあり得る。それでトートスの兵達の方は？」

「こちらはロードさんに確認中です。もし彼等の証言が事実であれば

ば、直ぐにでも手を打たなければいけません。その場合、生き残りだという第七王子リケイの身柄を確保する必要があります。ぞろ目隊を動員していますが今のところ、報告はありません。トートスの兵達も居場所は知らないそうなので」

「引き続き搜索は続けてくれ」

「はい。それからこちらが三年前の資料です」

「助かる」

ヴァリアスは文字の羅列をなぞりながら溜息をついた。三年前に隣国トートスで猛威を振るった謎の奇病。当時の王族はこの病で亡くなり、民衆も相当数が命を落としたという。当時のディレイア侯爵、現国王と第一位の宮廷魔術師が特効薬を早期発見し、更には特効薬を安価に提供したお陰で病はあつという間に収束し、国王の外戚でもあったロクロ侯爵が民衆の支持を得て王位に就いたのだ。そして今まで問題なく外交を進めてきた。

しかし、今回捕らえたトートスの兵達からもたらされた情報は無視できない。この奇病事態が全て茶番で、今回スフェンネル公爵領で流行っている奇病は、バーリアス帝国を侵略するために故意に引き起こされたものだと聞いては放っては置けないのだ。早めに制裁措置を執るなりしなくてはならない。

「青海の山賊」

「リトル？」

「いえ。」三年前”と村人達の”山賊”が一致するなら青海の山賊かと思ひまして。三年前にスフェンネル公爵領で活動するようになった山賊です。少し変わった山賊でトートスからの商人しか襲わないで、寧ろ村に降りては現れては農作業を手伝ったり村人達の手助けをしてくれるありがたい山賊なんですよ。被害に遭うのは悪徳商人ばかりなので、警備隊も動きにくくて。公爵様が形だけ年に数回、

山賊退治を行ってました」

「それはまた随分とあからさまな山賊だな。その中心がリケイ王子ということか？」

「可能性は高いかと。……あの、僕も行っでは駄目でしょうか？」

「故郷が心配なのは判る。だが、お前の役目は他にあるだろう？ ジュードや公爵が動いているはずだ。我慢しろ」

「そう、ですよ。すみませんヴァリー。少しだけ頭を冷やしてきます」

ちゃんと笑えているだろうか？ リアナは溢れてきた激情を少しでも抑えながら、執務室を辞した。

『死』の恐怖

がむしゃらに走ってきたので、立ち止まった時にはここはどこだろうと本気で思った。バルコニーを飛び越え、飛び出た屋根の部分に座り込む。見回りの最中なのだろう。眼下では光源を持った近衛兵が通り過ぎていく。

雲に覆い隠された月へと手を伸ばして握り締めた。暗闇の中で、僅かな光を見つけようと藻掻く。胸が引き裂かれるように痛かった。

「お父さん、お母さん」

今も苦しんでいるのだと思うとすぐにでも飛んでいきたい。あの家を出た時に決して泣くまいと我慢したはずなのに、水滴が両目から溢れていく。

『死』という文字が心を過ぎった。あれ程身近にあった死を、この世界では一度たりとも感じたことがなかったのだ。しかし今になって、初めてその重みを知る。

神の娘にとって死とは魂の消失。肉体は己が世界に還り、魂は次なる世界を作る礎になるのだ。見えることは二度とない。

「逝かないで。私を置いて逝かないで……っ」

これが大切なものを失う痛みなのか。届かないと判っているにも、手を伸ばさずにはいられない心が今なら判る。嘗て死を与える己に乞うた、男や女の姿が走馬燈のように思い出された。

「誰だ！」

誰何の声に驚き、雫が落ちるのも構わずリアナは下を覗く。丁度

隠れていた月が雲間から顔を覗かせる。お互いを認め、目を見開いた。なぜここにいるのか。

「リトル……泣いているの？」

「いえこれは、何でもありません」

「ふうん。じゃあ僕の頬に落ちてきた水滴は雨なのかな？」

水滴を拭った指先を舐め、しょっぱいと舌を出すジェラルド。おいで、と手を差し出されれば従うしかなく、体重を感じさせない軽やかな動きで地面に足をつけた。なぜか泣き顔を見られたくなくて、服の袖で乱暴に涙を拭う。ジェラルドはそれをやんわりと押し留め、懐から出したハンカチで拭いてやった。透明な雫が染みこんでいく。

されるがままになっていたリアナだが、草を踏む音にはっと顔を上げた。同様にしてジェラルドも屈んでいた腰を上げて同じ方に向いている。身体を硬くしたリアナに、今は見られたくないだろうと咄嗟に手を繋いで走り出した。

腕を引かれるまま連れて行かれたのは、いつぞやの温室。夜にだけ咲く花々が、月の光に照らされ美しく彩っている。三年前のあの日と同じ場所で同じようにして机の上に座らされた。互いに成長し、ジェラルドが椅子に座っているにも拘わらず、視線の高さがあまり変わらない。

これまで張りつめていた感情が一気に溢れ出したせいかな、いつまでも大粒の涙が溢れ出てくる。恥ずかしくて俯かせるリアナの目元にジェラルドは口を寄せた。目元の湿った感触に、驚いて泣くのを忘れる。

「あ、の。ジード様？」

「うーん。泣いてる姿もそられるけど、やっぱり君は笑ってる方が良いな。ということ。ほら、笑え」

至近距離で顔を合わせたまま、頬を左右に引っぱられる。

「ふい、ふいーほふあま、いひゃいへす。ひゃなひてくりゃひゃい」
「嫌だね。それにしても…ご、めん…今の君だと元の顔が台無しだな」

泣き腫らした赤い目に、眉尻を下げて頬を伸ばされている何とも間抜けな顔。どれだけ元が綺麗でも折角の美貌が形無しだ。
肩を震わせるジェラルドを睨みつけ、赤くなった頬を擦る。

「そんなに笑わなくても」

「いや、だって。あのグルテア卿が……！」

歩く凶器とさえ密かに呼ばれているほどの超絶美形は、何をしても絵になると専ら評判だ。しかし、誰もこれ程情けない姿を見たことがないに違いない。

「名誉毀損で訴えますよ」

「皇太子たる僕を？いい度胸をしているじゃないか」

「皇族であろうと、人の名誉を侮辱していいことにはなりません」

「そんなことを僕や父上に面と向かって言うのは君くらいだ」

「同じ人には変わりませんから」

特にリアナの前には、無意味な問題だ。自身の存在が超越しているために、今は単に身分という人間のルールを守っているに過ぎない。

「そう。僕達は所詮同じ人間だ。でも周りは同じと見てはくれない。それは確かに必要なことだけど、時々苦しくなるよ。だからかな。君の傍にいと楽になるよ」

「ジード様……」

背中に回された腕の力が強まった。肩に乘せられた頭をそつと撫でる。ヴァリアスもだが、見た目に反して柔らかい毛質をしている。きちんと櫛を通しているからか、指先からこぼれ落ちるようにさらさらと抜けていく。

「なんだか僕の方が甘えているな」

「そんなことはありません。お陰で涙も止まりました」

「君が泣くなんてよっぽどだろうけど、敢えて理由は聞かない。でも、一つだけ約束してくれないか？」

「出来る範囲でなら」

忍び笑いが耳たぶを擦る。

「正直だなあ。そこは同意するところだよ」

かぶと首筋を囓られ舌を這わされて、声にならない悲鳴を上げるリアナ。それにまた笑って、ジェラルドは上体を起こした。

「泣く時は僕のところへ来ること。簡単だろう？」

「え？ いえ、それは……」

今回は完全に想定外だっただけで、泣き顔を晒すつもりは全くこれっぽっちもなかった訳で。どうしたものかと思案していると。

「約束しないとキスするよ」

「判りました。約束します」

反射的に答えてしまっただけでなく、しまったと慌てるのもう遅い。それだけでなく、ちゅつと軽い音を立てて唇が重ねられた。

「狡いです。今のは卑怯だ！」

「約束したらキスしないとは一言も言ってないよ。普段からこれくらい隙だらけだと簡単なものになあ」

動揺している今だからこそ言質が取れたともいう。あーうー唸っているリアナを横目に、ジェラルドはほくそ笑んだ。

忙しなさの中で（前書き）

た、大変お待たせしました。

忙しなさの中で

膨大な書類を抱えながら、リアナは王宮の一角を足早に進んでいた。この後は研究所に行き、薬の精製の進み具合を確認し、足りない原料を補充、及び手配を頼まなければならない。知らせが遅れたのは完全に公爵家の失態である。そちらの事実関係も含め、体勢の在り方を見直す必要もあった。

スフェンネル公爵であるベイルも同様に王宮内を奔走し、リュウグはできたばかりの特効薬を持って医師団と共に領地へと向かった。現地に着き次第、治療を行う体制を作らなければならないからだ。

リアナの部下は現在薬の原料である植物を取りに行かせており、皇都にはいない。人手が足りず、リアナ自ら雑用の全てを一手に引き受けていた。加えてヴァリアスからは今回の責任者を任されており、連日王宮に詰めている状態だ。どれだけ体力があらうと身体は一人分しかない。猫の手すら借りたい現状で、一部の竜騎士たちが自粛しているのが救いだろうか。どうやら彼らも迷惑を掛けている自覚はあるらしい。

身長を越える紙の束を持つために殆ど感覚で歩いていたのだが、突然視界が開かれる。目の前にいたのはジェラルドで、彼は自分のお付きたちに配分して、リアナの手元に残っているのは先程の10分の1程度だ。

「手伝うよ」

「いえ。皇太子殿下のお手を煩わせるわけには」

「そんなに持っていたら前も見えなくて危険じゃないか。それでこ

れはどこに持っていけばいいのかな？」

「ですから」

「お気になさらず、グルテア卿」

「困ったときはお互い様です」

ジェラルドに付いていた侍従や近衛兵が次々に同意する。ありがたい申し出に、今度差し入れでもしようかと決めて、素直にお願いした。リアナの腕前は王宮でも知られているので、彼らはリアナにジェラルドを任せて方々に散っていく。

「ありがとうございます、ジード様。ところで、政務はよろしいのですか？」

「丁度一段落終えて、昼食を食べるところ。リアナも一緒にどうかな？」

「申し訳ないのですが、この後はまだやることはありません」

「ふうん。確か昨日の夜もそう言って断られたけどちゃんと食べてる？」

「……食べていますよ」

一泊あけて返事をしたリアナにジェラルドは微笑み返した。リアナの背に一筋汗が流れる。

「うん。じゃあ行こっか」

「え？ そっちは研究所じゃ」

小脇に抱えた書類を奪われ、右手を取られる。ここは王宮で相手は皇太子。人気が無くとも、どこにめがあるかわからない。振り払うのも躊躇われ、引っ張られるままついて行く。

ジェラルドは侍従に言付けをして、リアナを自室に引っ張り込んだ。批難の視線を無視して強引に座らせる。

「ジード様、僕は…ん?!」

口の中に甘酸っぱい香りが広がる。食べながら話すのは行儀が悪いので、きちんと飲み込んでから口を開いて、また別のものが放り込まれる。

「今はこれしかないけど、用意させてるから我慢してね」

我慢もなにも、食べる暇があれば他のことをしたい。不満が顔に出ていたのか、少し強めに頭を撫でられた。

「君がとても忙しいことは知っているけど、身体に気を配る事も大切だよ。倒れてしまったら、元も子もないだろう?」

「問題ありません。最低限の食事は摂取しています」

限りなく人に近い構造をしているので、流石に食事を取らなければ死んでしまう。

「その割には痩せたみたいだけど? 皇太子命令だ。毎食誰かと共に食べるように」

「そんな!」

「スフェンネル公も心配されていた」

ベイルの名を出され、リアナは押し黙る。

そこへ、廊下が騒がしくなった。ジェラルドがやっと来たかと呟くと同時に扉が慌しく開けられる。息を弾ませてやってきたのは、ヴァリアスだった。控えていた侍女から手拭いをもらうと、汗を拭くのもそこそこに、目を丸くしているリアナを引き寄せる。

「こいつは俺のだ！誰がお前にやるか」

「随分来るのが遅かったね」

言いながら自分の隣にリアナを取り戻したジェラルドは、肩を竦めて見せる。

「あのな。こっちは庁舎にいたんだぞ？これでもまだ速い方だ」

「まあ、ヴァリーが遅いのはどうでもいいけど「よくない！」これ、よろしく」

詰め寄れば書類を押しつけられる。反射的に受け取ったヴァリアスは眉根を寄せた。

「……何だ、これは」

「君の仕事。もう用事は済んだから行っていいよ」

「お前なあ、俺は忙し」

「定時に帰るくせに？」

「ああそうだ」

その日に決められた仕事はきちんとこなしている。文句を言われる筋合いはない。

「ふうん。君の部下は食べる暇も惜しんで働いてるみたいだけど、上司である君は随分余裕なんだね？数日家に帰ってない部下もいるのに」

ここで漸くヴァリアスはジェラルドが怒っていることに気づく。

「部下に上手く仕事を采配するのも上司の役目だ。その点、君は特

定の人物に負担を与えすぎてるんじゃない？」

ヴァリアスは押し黙る。ジェラルドが気にする人物といえば目の前にいる腹心に他ならないだろう。最近は集中できないことも多く、周りが見えなくなっている自覚はある。

「……リトル」

「はい」

「今日と明日は仕事はなしだ。休め」

「無理です！ヴァリーにも仕事があるでしょう」

「……この程度なら俺でもやれる」

「資料の場所は知ってます？」

「さ、探す」

「資料室に入ったこともないのに？」

「……お前の部下を借りれば」

「全員明後日まで帰って来ないですが」

「出来たものを運ぶくらいなら」

「それはジード様付の皆様がやってくれています」

今度こそ沈黙してしまったヴァリアスに、ジェラルドはそつと息を吐いた。

「頼りすぎ」

ヴァリアスは今更ながらに悔やんでいた。本人は来年には辞めると豪語しているが、現状でリトルがいなければ回らないのだから。後任の人物も今与えられている仕事で手一杯。

リアナの見つけた後任は優秀なのだが、いかんせん一人で十人以上の働きをこなすリアナという異常がいるので、ヴァリアスにとっ

てはリアナが普通となっていた。

「そういうわけなので、失礼します」

立ち上がって頭を下げるリアナの上で、アイコンタクトが交わされる。

“癪だが今回は仕方ない。後は任せた”

“君のお願いなんて嫌だけど、リトルのためなら喜んで”

「殿下。昼食のご用意が整いました」

丁度良いタイミングで侍女が告げ、ジェラルドはリアナの手を取って隣室へ導いた。

「うん。じゃあ、行こうか」

「いいか。二日間だけだからな」

「それはリトル次第、だろう？」

「え？ え？」

今だけ利害の一致した二人は、互いに挑戦的な笑みを浮かべ、別れる。取り残されたリアナは脱出を試みようとするも、やんわりと侍女に奥へと促され、断念する。

それから二日間、至極ご機嫌な皇太子の傍らには不機嫌顔の竜騎士が控えていたとか。

忙しなさの中で（後書き）

リアナちゃん、ワーカーホリックの巻でした。医師団云々がないと今後の展開上判りにくいかなと思います付け足しです。

青海の山賊（前書き）

前半ジュード兄ちゃん、後半リアナちゃんです。やっと、本格始動します。

青海の山賊

相棒であるリュシーを公爵家に置いたジュードは、単騎で馬を走らせ、青海の山賊が根城にしていると思われるドリト山へ来ていた。僅かだが人が通った形跡のある獣道を辿りながら登っていく。勿論迷わないように途中で枝を折っていくのも忘れない。

あくまで秘密裏に動く必要があるので、公爵領の私兵を借りる訳にはいかなかった。

近隣の村人達の話では、不定期に山を下りて手伝ってはそのお礼に食料品や衣類をもらっていくようだ。これはあくまで村人達の善意であって、あちらから請求されたことはないらしい。

随分、奇特的な山賊だなと呆れた憶えがある。彼等はいつも違う方へと帰っていくので、根城の本当の場所を知る者は誰もいない。それ程用心深いということだ。今回ドリト山を登っているのは、村人の1人がこの山に煙が出ているのを見たことがあるとの情報を得たからで、確証はない。他にも幾つか候補はあり、外れであればまた別の候補に登る必要がある。こういう時に人海戦術が使えないのは痛手だ。

「机仕事ばかりで身体が鈍っているな。まさかこの程度で呼吸を乱すとは鍛錬不足だ」

スフエンネル公爵領に来るまでに、何度もリュシーのご機嫌伺いしたのを思いだし、苦笑する。ここ数日相手にしていなかったせいで、臍を曲げてしまったのだ。飛び立つ前に、嘘か本当か、リアナの通訳によって予めリュシーの心の内を教えてもらい、更に対処法まで伝授されたのでなんとかあったが、そうでなければ、今頃皇都で足止めを食らっていたかもしれない。

他のドラゴンや竜騎士の相談にもものっているらしく、ドラゴンの体調管理は全てリアナが把握しているらしい。ドラゴン達も、相棒以外の人間では世話をされるのも嫌がるのだが、リアナだけは例外のように彼女がよくまとめて散歩や訓練しているのも見かける。

「顔が見れないのは寂しいからな。早く帰らなければ」

脳裏に愛する義妹の可愛い笑顔を浮かべれば、俄然やる気が出てくる。戻ったら久しぶりに剣でも合わせたいと思っていると、ふいに視界が開けた。咄嗟に木陰に隠れるのと、眼下に男が現れるのは同時だった。

「既に一月連絡が付かない。あいつら失敗したのか？」

「まさか。俺達の国はどうなるんだよ」

「落ちつけて。今、頭領が確認しに行ってるところだよ。ここから、皇都までは馬で飛ばしても10日はかかる。頭領の連絡を待とうぜ」

「そうだな。たいちよ…副頭領もついてるしな」

「ああ」

（当たり、か？）

二人の男達の声が完全に聞こえなくなるのを待って、ジュードは下を覗き込んだ。丁度真下に、鍾乳洞の入り口がぼっかり空いていた。どうやら彼等はここから出てきたらしい。覗き込んでみたが、どうやら複雑に入り組んでいるらしく、人影は見当たらなかった。気配がないのを確認して足を踏み入れる。

あちこちの溶けた石灰岩から落ちる水滴が、感覚を鈍らせる。これだけ靴音が反響しているのに、水の音以外聞こえないのは相手に気づかれて様子を見ているからなのか、それとも更に奥にいて気づ

かないのか。

突然後ろに現れた気配に、しまったと悔やんでも遅い。首の後ろに強い衝撃を感じて意識が遠のいた。

張っていた結界に触れるものを感じ、リアナは顔を上げた。ブラシの腕を止めたリアナにどうした？と問うようにルークーフエルが服を引っばった。

「ごめんね、ルー。今から飛べる？」

了解とばかりに翼を鳴らし、厩舎を出る。突然出てきたドラゴンに世話係は目を丸くし、リアナは彼にブラシを押しつけた。

「少し散歩に行きます。ルーだけ帰ってくるかもしれませんが、厩舎は開けておいてください。危ないから下がって！」

軽く地面を蹴って、ルークーフエルの首元へ跨る。それを合図に、ルークーフエルは大きく翼を振って飛び上がった。ぎりぎりで風圧を免れた世話係を確認して、リアナは声に出さずに行く場所を伝えた。

流石に人目につくのは不味いので、上空でルークーフエルから飛び降りる。空から人が降ってくるのも十分驚くべき事だが、そう空を気にする人間もないだろうと判断。着地の際に風の力を借りて、衝撃を吸収した。

以前は倉庫であり、買収によって更地にしたそこに、フードを被

った二人組が立っていた。地図と更地を睨めっこしている。ヴァリアスに声を届けてから、リアナは後ろから声をかけた。

「こんにちは。どうかされましたか？」

薄汚れた繋の作業服から、通りすがりだとも思ったのだろう。片方の人影がマントの下で咄嗟に伸びた右腕は何も掴むことなく、柔らかな笑顔が振り返った。リアナの背の方が小さいので、フードに隠された顔がよく見える。方や長く伸びた前髪は海色をしており、もう片方は鮮やかな水色の髪が隙間からのぞいている。

「あ、ああ。いや、実はな、俺達道に迷ってしまったみたいでな？坊、良かったら教えてくれんか。この辺りに青い屋根のぼろい倉庫があったと思うんだけど」

するりと手の平に小銭を握らされる。手の中の貨幣を見つめ、リアナは無邪気な顔で微笑んだ。泥で汚れていようと、その輝きが失せるわけもなく、男二人も例外なく美しい笑顔に見惚れる。

「うーん。前はここにあったんだけど、少し前になくなりましたよ」「この場所に間違いないんだな？」

「はい」

がくりと双方の肩が落ちる。残念でしたねと暢気な声を出しつつ、そういえばと手を打った。

「お兄ちゃん達、余所の国の人？ですよね。この国は黒とか茶色とかが多いので。少し前なんですけど、あっちの方でお兄ちゃん達と同じ青い髪をした人達を見かけましたよ」

「本当か？」

「はい。あの、これくらいしか……」

「ああ、いいよ。助かった。ありがとな、坊」

いいえと首を横に振り、リアナは大きく手を振って別れた。

小柄な少年を見送った二人組は、指差した方をみやり視線を交わした。

「……気づいてるか？」

「はい。4、5人といったところでしょいか」

少し前から二人を取り囲む気配に気づいていた。確実に包囲網を狭めている。

「こっちから探す手間が省けたな。やれそうか？」

「問題ありません」

頷くのを確認して、どちらともなく二手に分かれる。一瞬躊躇した空気はすぐさま、別れて双方へと散っていく。少しでも追っ手を惹きつけるために、その場で男は剣を抜いて道を塞ぐ者達に対峙した。

「我々に危害を加える気はない。一緒に同行してもらおう」

しかし男は、何も口にせず斬りかかった。本当に危害を加える気はないのか、彼等が手にしているのは殺傷能力のある剣ではなく、ただの鉄の棒。舐められていると感じながらも、剣を受け止めるその腕は悪くはない。集団の連携もとれており、相手が素人でないこ

とを知る。下手くそな尾行は罨だったのだろう。

焦りが産んだ僅かな隙を逃さず、一人が懐に入り込んだ。不味いと防御した時には遅く、背後から首元にちくりと何かを感じて男は意識をなくした。

青海の山賊（後書き）

外伝の方でも一話アップしました。内容はお遊び企画になっています。興味のある方はどうぞ。

牢屋にて（前書き）

短めでさらっと流しちゃいます。文章が短いので後から付け足すかも。

牢屋にて

「……んちよう！大吾団長！」

誰かが自分の名前を呼んでいる。夢と現の世界を渡り歩いていたのだが、ぴちよりと冷たいものが頬に落ち、一気に意識が浮上した。目を開けて最初に飛び込んできたのは、涙と鼻水を垂らしてくしゃくしゃに顔を歪める部下の汚い顔。

嫌な予感に頬に手を当てれば、ねちよつとした感触がした。即座に顔を洗いたい欲求を抑えて、状況確認も含めて辺りをゆっくり見回す。

「お前は蓮、だな。ここはどこだ？」

「俺ですよ。目が醒めたんですね、団長」

素早く飛びかかってきた蓮を避け、落ち着けと諭す。見事に玉砕した蓮は勢い余ってベッドから転げ落ちていた。決まり悪げに笑うその姿は、一月合わない間に多少痩せたようだが、痛みつけられた様子はない。

「酷いですよ、団長。あんなに熱い汗を流しあった仲だったのに」

「それはお前だけだ、未熟者。いかがわしい事を言うんじゃない！」

「ええ。本当なのにな」

「いいからさっさと本題に入れ」

「了解です！って、俺も詳しくは良く判らないんですけど」

姿勢を正すと、蓮はこれまでの経緯を全て話した。

「……すみません」

「仕方がない。それより後遺症はないんだな？」

頷くのを確認して、大吾はようやく強張りを解いた。自白剤を使われて、訓練をまともに受けてない人間が対抗できるはずもないので仕方ないだろう。それよりも今こうして生きて会えたことに感謝する。用無しになった人間は始末されてもおかしくない。しかしそれが無い、どこか牢屋に入れられているが、それなりに好待遇なことを考えると今のところ相手に殺す気はないのだろう。

そして自白剤や牢の規模から考えて、それなりに力を持つ者に捕えられたと考えられる。少なくとも地方の警備隊などではない。

「相手はロクロの手の者ではないようだ。他の者達も生きているんだな」

「はい。状況説明のために僕だけ団長の牢屋に入れて貰えたんです」

「そうか。ひとまず脱出する手立てを考えねば」

「やめておいた方がいいと思いますよ」

大吾と蓮が振り向くのと牢屋の扉が開かれるのは同時だった。入ってきたのは気を失う前に出会った少年。そして、大吾が更に驚いたのは彼が着ている制服だった。見間違えるはずもない。このバリアス帝国の象徴である生物を自在に操り、戦場では一騎当千を誇るその騎士団は他国から畏怖の象徴とされ、自国では圧倒的な人気を持つ。その存在を。

「バリアスの竜騎士団……」

呆然とした呟きに、精緻なドラゴンの刺繍が施された、派手な玉虫色の制服に身を包んだ少年はふわりと微笑んだ。

「初めまして。トートス第七近衛隊隊長、大吾Ⅱナナカ殿。僕は竜騎士のリトル・ゾア・グルテアと言います」

「私の素性まで調べ済みか」

これまでの扱いにようやく合点がいった。ここでバリアス帝国の力を借りることが出来れば、こちらとしても助かる。口を開きかけた大吾を制するようにリトルが手を上げた。

「先日、トートスからの不法入国者が侵入したとの報告を国境から受けています。貴方がたの素性が漏れたかと。第七王子に危害が加えられる前にこちらで保護したい。教えてくれますか？」

「牢屋に入れられて、しかも敵かもしれない相手にわざわざ教えるとも思っているのか」

「牢屋にあなた方を連れてきたのはここが最も安全だからですよ。騎士団の寄宿舎地下であるここなら城の間者ですら入れません」

「俺達をどうするつもりだ？」

「陛下は隣国との戦争を望んではおりません。それが答えです」

真意を問うように黒と蒼の瞳が絡み合う。先に逸らしたのは大吾だった。

「判った。その代わり我々も同行を」

「勿論です。準備も用意してますから、食事を食べ終えたら上に来てください」

「上に？」

閉じこめられているのにどうやって？と思ったが、答えは簡単に見つかった。捕らえるつもりは本当に無いようで、牢に鍵はかかっていなかったのだ。牢の外に出れば、捕まったはずの部下達が待つ

ており、大吾は驚いた。

そして、指示通りに上に行けばそれを上回る驚きが待っていた。

変装

扉が叩かれる音に準備は出来たかとクエリは席を立つ。その恰好は、いつものドラゴンが描かれた派手な制服ではなく、臙脂色の制服で、街でよく見かけられるものを身につけていた。

目的の場所へとたどり着いたクエリだが、今回の同行者を頭の天辺から足の爪先まで眺め、顎に手を当てて考え込む。その沈黙をどう受け取ったのか、慌てた大吾に落ち着けと諭す。

「し、しかしやはりおかしいのではないだろうか」

「大丈夫ですよ。チェルスさんの腕を信じてください」

「確かに牢番殿は美しかったが、私は」

「ご心配なく。チェルスさんも男性ですよ。他の方々も大吾さんのことを褒めていたではないですか」

あれは絶対面白がっていると大吾は思った。変装と称してやけに楽しそうな牢番に女装させられたのが数刻前。待機するようになると一旦戻されたのだが、その時に部下達に散々からかわれたのだ。彼の一生の汚点である。

彼同様、女装している隣の少年と視線が合い、感嘆を含んだ息を漏らした。中性的な顔立ちには、衣装を替えれば凛々しさを美しさへと変える。まるで違和感のない装いに自分との差を呪いなくなった。

鬱々と考え込んでいると、先程やってきた竜騎士が懐から何かを取り出す。彼はリトルを自分の前に立たせ、何かし始めた。眼鏡のフレームが光り、手が目にも留まらぬ速さで動く。目を白黒させていると、最後にぱちんという音がして終わった。振り返ったリトルを見た時、少し違和感を感じる。

「ああ、気づきました？クエリさんの趣味なんですよ」

ほらと見せられた袖口にはレースが二重に重ねられていた。確かにその方が可愛い。

思わず和んでしまった大吾は我に返った。クエリの冷徹な瞳が今度は大吾を見ている。嫌な予感がする。

「そう言えばその服もクエリさんの手作りなんです。彼は皇都でも人気のお針子さんでもあるんですよ」

後ずさる大吾を視界に入れると、再び眼鏡が煌めいた。そこは防音が完璧な尋問室だったため、男の悲愴な叫び声は幸い届くことはなかった。

「では改めて紹介を。こちらは僕と同じく竜騎士のクエリさんです。彼は皇都の警備隊長なので、今回は彼に協力をお願いします」

腕を組んで頷くクエリに、大吾はようやく彼が着ているものが警備隊の制服だと判った。なぜ女装なのかといえば、探し人が警備隊詰め所にいるとの情報を得てやってきた令嬢とその付き人、案内人という役柄らしい。道中で見られてもおかしくないようにという配慮だった。やり過ぎではないのかと思ったが、竜騎士の顔は一部を除いて大々的に知られており、それぞれに熱烈なファンもついているので容易に気づかれないためということらしい。大吾も名前までは知らないが、彼等の活躍を噂で聞いていたので納得した。

「探し人は令嬢がたまたま拾った異国の人間で、彼は礼を言うなり

何処かへ消えてしまった。怪我もしているのに放ってはおけない令嬢は彼を捜しているというのが肩書きです」

探し人は下町に潜伏しているとあって、極秘に搜索するのは至難を極める。ということで、大々的な海戦術を使うことにした。不法入国者を取り締まるという名目の元、片っ端から怪しいトートスの人間を捕まえることにしたのだ。そうすれば、こちらが王子を探しているのも気づかれにくく、王子を狙っているだろう不法入国者を牽制しやすい。双方を捕まえることが出来れば最上といったところ。今回は竜騎士直属の部下も混ざっているので前回のような失態はないだろう。

皇都でも一番大きな詰め所へとやってきた三人は、予め偽の知らせを受けているせいかなんり奥に通された。事情を知る（と言っても探し人がいるとだけ）所長自らが出迎えて応接室へと入る。

「状況は？」

「現在南ブロックを搜索中ですが、やはり予想以上に反発が大きいです。既に負傷者が二四名。内重傷者一名です」

「予想はしていたが、怒るのも当然だろうな。捕らえた者は？」

「全員地下牢に。暴れる者だけ拘束中です」

「引き続き頼む。例の物は？」

「こちらに用意してあります。お戻りはいつ頃になるでしょうか」

「ひとまずは陽が落ちるまでだな。こちらも用意ができ次第出る。

後から応援を回すからそれまでは任せた」

「了解しました」

扉が閉じられるのを待つて、三人は顔を合わせた。

「強引なやり方だな。言えた義理ではないが、他国の評価が落ちる

ぞ」

「ご心配なく。今はそれでも事が終わればそこまで非難されないと思いますから。馬鹿な貴族のお騒がせ騒動は、国民達の娯楽になるでしょう」

「それでは貴族と警備隊の評判が悪くなるだろう」

「あながちそう言いきれないんです、実は」

「気になるなら街の皆さんに聞いてみるといいですよ」

「いいのか？」

「ええ」

苦笑する竜騎士二人に、大吾は目を点にした。が、これ以上他国に口を挟むのも良くないと追及をやめた。

変装（後書き）

長いので一旦区切ります。

演習

倉庫街へとやってきた二人とすれ違った警備隊に住民の声援が飛ぶ。宿屋の女将から差し入れを貰っている警備隊の姿に、大吾は首を捻った。それを目敏く見つけた女将がやってくる。

「あんた、うちの国にきてまだ日が浅いのかい？」

「え？まあ」

「じゃあしょうがないねえ。珍しいだろ、あれ。大規模な演習って名目で、ああやってよく訓練してるのさ」

「訓練、ですか」

実際は本番なのだが。それにしても訓練とは……。

「そうさ。定期的に国民から犯人役が選ばれて、それを捕まえるんだ。ああ、勿論日程は公開されてるよ。あたしの旦那も前々回が犯人をやらされてね。確か暴力団に金を横流しする役、だったかな？早々に捕まったもんだからあの人一日、あの地下牢に入れられたんだよ。羨ましい」

「牢屋に入れられたのが羨ましいんですか？」

「当たり前だよ。ああ、地下牢っていうのは表通りにある立派な宿屋のことさ。捕まったらその日は一日あの豪華な宿屋に拘留されるんだ。当に至れり尽くせりってんで、人気なんだよ」

大吾は言葉も出ない。リトルの悪戯っぽい顔を見れば、それが本当だということが判った。なんて非常識且つ、大規模な演習なんだと思ったが、国民受けはかなり良いようだ。不定期に開催されるようだが、一生に一度は順番が回ってくるので納税者達も楽しんでいられるらしい。当人達には悪いが、街中はちょっとしたお祭り騒ぎだ。

実戦を想定しているの、街の住人達がどちらに荷担しても良いというルールまであるので、警備隊にしてみればかなり鬼畜な訓練であった。

その後二、三遣り取りを交わして気の良い女将と別れた。頃合いを見計らって、売り子の少年と話していたリアナはお兄ちゃんと声をかけながら駆け寄る。真っ赤な顔をして頭を下げる少年に手を振り返し、大吾の腕に手を絡めた。

予め大吾が心当たりのある宿をいくつか提示し、二人はそこに向かっていくのだ。

今回の演習は急な話であったが、実際にトートス人の幾人かの協力を得ており、通常の演習と何ら変わらない。ただ、その裏の本当の目的が警備隊には知らされていないだけだ。演習を利用して、リアナの部下や一部の竜騎士の部下が警備隊として紛れ込み、怪しいと思われる人物や今回の目的人物を搜索している。こちらが絞り込んだ場所は、正規の警備隊が入り込まないよう各地の警備隊に配されているクエリ直属の部下が巧妙に探索区域を外しているためだ。

「今更ながら貴殿らの国は型破りだな。成る程、これならば怪しまれることもない」

「入国の際に他国の方々からも許可を頂いてますから、非難される憶えはありません。実際十二年前に西のローラン王国の人間をターゲットにしたこともあるようです」

「その時も裏があったのか？」

「これ以上は秘密です。……さて、次に行きましようか。お兄ちゃん」

人差し指を唇に当てる仕草があまりにも蠱惑的で、兄と呼ばれた大吾は思わず怯む。意識してやっているのだろうが、男だと知っている大吾ですら、本気で迫られたら陥落しそうだ。

いや、迫られるって私は一体何を考えている！今は任務中だ。

煩惱退散も込めて頬を叩く大吾の気も知らず、リアナは無邪気に次の目的地へ向けて歩いていった。

「リアナ嬢！？」

背後から呼ばれた名前に、天を仰ぎたくなるのを抑えてリアナは振り返る。声の持ち主と、その隣に立つ人物を認め、溜息をついて見せた。釣られて同じように振り返った大吾は、殿下！と声を張り上げて駆け寄って行くこうとして思いきり転ぶ。野球選手も真つ青なスライディングぶりに、一同唾然。態と足を引っかけたリアナだけが涼しい顔をしていた。

「きゃあ？！お兄ちゃん、大丈夫？駄目よ、捕まえるのは警備隊の役目なんだから。ヴァリーさんもお兄ちゃんの言うこと聞かないですよ。隊員さんのお仕事の迷惑になるでしょ。……警備隊さーん、怪しい人発見です！」

大吾を助けるふりをしてさり気なく、上から押さえつける。角に身を潜めていた部下に目配せすれば、何食わぬ顔をした警備隊の制服を着た部下達が、ヴァリアスの隣に立っているトートス人を囲んだ。

「失礼だが、貴方を麻薬密輸の疑いで逮捕する。大人しくついてきてくれれば手荒な真似はしない」

ぽかんと口を開けた男は、慌てて懷から身分証を探す。

「言いがかりだ。俺は何もしとらん。身分証もあるで」

ほら、と出した腕に無情にも縄がかけられる。一瞬だが向けられた視線に大吾は首を横に振った。

「ちょ、放せや！」

「おい暴れるな。くそっ」

腕を噛みつかれた隊員が後ろに下がり、反対側で連行していた隊員が布を口元に当てた。数秒もしないうちに男の身体ががくりと落ちる。一連の鮮やかな動きを住人達は囁し立てていたが、やがて日常生活へと戻っていく。警備隊の真似事をするのも程々にな、嬢ちゃんも困った兄さんを持ったねえ、と大吾やリアナの肩を叩いて去っていく。それらに一つずつ反応を返し、人がいなくなるのを見計らって、それまでのほにかんでいた少女から一変して厳しい顔つきになる。

逃亡できないようヴァリアスと手を繋ぎ、その反対側には大吾を連れて、一軒の酒場へと入った。

馬車の中で

店内は薄暗く、扉の僅かな隙間から外の光が漏れている。掃除のためかカウンターに上げられた椅子を三人分下ろして、リアナは座るよう促した。閉店中に入ってきた客を咎めることもなく、こちらを一瞥したマスターは黙って外へ出て行く。

「お前はリトル、か？」

「そうですよ、ヴァリー。見てのとおり僕は今、仕事中です。護衛は？」

「捲いてきた。……あ、いや違うぞ。あそこのフルーツパフェを食べに來ただけだ。で、あいつは甘いのが嫌いだから外で待たせている」

明らかに視線を泳がせるヴァリアスにリアナは小さく溜息をつく。ヴァリアスは護衛を何だと思っているのか。

「担当はロッドでしたね。護衛対象に捲かれるなどこちらの失態です。後で鍛え直さなければ」

「いや、その、許してやってくれないか。俺が態と捲いたんだ」

リトルの鬼畜っぷり、もとい鬼教官ぶりは、自他共に認めるほどで、竜騎士でも1, 2を争うほど厳しい。嫌が応にも実力はずつと上がるが、その過程たるや大の大人が震え上がるほどの訓練内容と有名だ。

以前、某砦で行われた訓練にてそれを目の当たりにしたことのあるヴァリアスは、心の底から震え上がったものだ。あの恐怖は未だ根付いている。

余談だが、訓練を終えた後の砦の兵士達の動きは目を見張るほど

で、定期的な模擬戦で全戦全勝を果たしたというおまけ付きだ。

「存じております。貴方が本気になれば、大抵はついていけないでしょうから。それでもやるのが護衛です。実力不足で護衛できなかったと言いつくにはならないんですよ」

「すまなかった。俺が悪いんだ。ロッドにあまり無茶な訓練はさせないでくれ」

「善処しましょう。……ヴァリーのお説教は後です。マスター、用意は？」

「裏口に呼んでおきやした」

いつの間に戻ったのか、マスターが壁に凭れて待っていた。全く気配が感じられなかった二人は驚くが、リアナはマスターを見ることもなく淡々と紡いでいく。

「ありがとうございます。すみませんがもう一つ、二軒先の喫茶店の支払いをお願いします」

「気にせんでくだせえ」

「また飲みに来させてもらいますよ」

実はここの酒場。三桁ぞろ目隊御用達の酒場で、主人も隊員である。当然それは隠されているが、情報を売買する店として裏では有名な酒場だ。

パフェ代に少し上乗せして、呼んで貰った辻馬車に二人を乗せる。最後に乗ったリアナは口を開こうとした大吾を制した。扉を閉じれば馬車は目的地に向けて走り出す。歴史あるバーリアス帝国の皇都というだけあって、城下は勿論、主要な道は全て綺麗に舗装されているので、揺れは極端に少ない。

流石に走る馬車に聞き耳を立てるのは難しいだろう。景色が動く

のを確認して、リアナは向き直った。

「お陰で助かりましたけど、先の通り彼の行動は完全に想定外でした。彼は同僚ですが、今日の午後は休みなんです」

「では偶然だと」

「ええ。証拠はないので信じて頂くしかないのですが」

探るような視線をリアナは受け止めた。双方が出方を探り、やがて大吾の方から視線を外す。どうやら一応信じてはくれたらしい。

一方ヴァリアスから見れば、二人が見つめあっている様にしか見えず、面白くなかった。腹心に声をかければ、冷ややかな態度で接しられ、益々苛立ちが募る。

「おい、リトル！一体どういう事だ」

「どうもこうも、予め説明して許可も頂いたはずですが？まさか憶えてないなんてこと、ありませんよね」

ここ最近、仕事中に上の空であることを承知で訊ねるリアナに、ヴァリアスは冷や汗を流す。自分が認可しているのだ、一度内容を読んでいるはずなのだが、記憶を攫っても欠片も憶えがない。

「はあ。余程お疲れのようですね。やはり一度、長期休暇を取られてはいかがですか？今回の件が終わったら調整しましょう。だからそれまでは頑張って下さい」

違うと否定したかったが、確かに成人してから数年、まとまった休日を貰ってないことを思い出して言葉を呑みこんだ。疲れている

のかも、しれない。心にゆとりが持てれば、このもどかしい気持ちも収まるだろうか。同じ顔で別人の人間が傍にいるだけで、ともすればどうかなりそう。反射的に手を伸ばそうとするのを、これはリトルだと言ひ聞かせて我慢する。特に今のような恰好は、ヴァリアスにとってサフラをぶら下げられた馬と同じだ。

頬を緩ませては落ち込むのを繰り返すヴァリアスに、城に戻ったらヴィエツタに相談しようと思った。母親代わりでもある彼女ならきっとどうにかしてくれるだろう。不甲斐ないが、ここ数日何かに悩んでいる様子のヴァリアスがリアナに口を開くことはなかったから。

少し寂しいと思うが、我が儘は言っていられない。それでも軍部を握る一角なのだ。彼の一つ一つの決定が大きな意味を持つ。それまで致命的な失敗もなかったので見守っていたが、仕事に支障を来すようでは放置しておくことが出来ない。

偽りの探し人

両者の思惑を乗せて馬車は目的地へと止まる。辿り着くまでにヴァリアスを念入りに変装させて、四人は警備隊の詰め所へと入った。裏口では、既に連絡を受けていたクエリが所長を従えて待っていた。ヴァリアスを見て、リアナ同様こめかみを押さえている。第三者の登場に、所長に怪しい者ではないとだけ説明して、先程着替えた部屋へと連れてこられた。

「なぜ貴方までがここに？」

「俺は……」

「ヴァリーは非番で、偶々趣味の甘味巡りをしていたようです」

被せる様に言葉を発したリトルにクエリが一瞬目を見開き、成る程と相づちを打った。リトルが主君であり直属の上司であるヴァリアスを人前で、しかも愛称で呼ぶことなどあり得ない。それはつまり、正確な素性を知られたいと判断したからだろう。恐らく途中でヴァリアスが一人歩きしているところを見つけてしまったのだろう、本来護衛の立場であるリトルがやむなく連れてきたのだろう、とそこまで推測し、クエリはあくまで一介の竜騎士として扱う。

「非番といえど、今は緊急事態。協力していただきますよ」

有無を言わず断定したクエリに、しかしヴァリアスが反論することはなかった。正しくは、しても無駄なのでしなかったのだが。隣から発せられる無言の圧力には逆らえない。頷くに留めたヴァリアスを確認して、クエリは細い二本の指で眼鏡を押し上げる。室内のランプの光が反射して眼鏡が煌めいた。

「抵抗した者は地下三階に収容。内ネズミが3。目標は地下一階に」
「どれだけ入り込んでいるか判りますか？」

「確認できるだけで8だ」

「一人だけ狙ったにしても少ないですね」

眉根を寄せるリアナにクエリも頷く。大吾の話では、三年前に彼が率いていた一個小隊丸ごと逃げてきたらしい。つまり、第七王子の護衛は最低でも二十五人はいることになる。それに対していくら手練れといえど、8人ではあまりにもお粗末すぎる。本来の目的は王子ではなかったのか、それとも小隊自体を確認されていないのか？当時の資料では、六年前から第七王子の姿は公に見せていない。そして、三年前から”青海の山賊”が目撃されるようになる。三年の間、王子は何をしていた？

情報が足りなさすぎる。ひとまず思考を遮断して、目先のことを考える。今をどう切り抜けるかが先だ。

「とりあえずあの方をお連れしましょうか。あまり暗くならないうちに家へ帰らないといけませんもの」

「畏まりました、お嬢様。ではご案内いたしましょう」

小さく手を合わせて微笑む姿は可愛らしい令嬢そのもので、それが防音の魔術を解いた証だった。あまりにも自然すぎて判りにくいが、少しでも魔術を囁ったものならそれがどれだけ難しいことなのか判るだろう。相変わらずの腕に舌を巻きつつ、ヴァリアスは慣れない制服の詰め襟を正した。

陽が一切届かないその場所は染み一つ無い白い壁で作られており、

牢屋というよりも研究所と言った方がしっくりくるだろう。等間隔に照らされた灯りを壁が反射して、地下であるはずなのにどこか明るい。

階段を降りて直ぐの牢屋に、その男は入れられていた。薬が効いているせいか、未だ目覚める様子はない。万一のためにヴァリアスを鉄格子の外に置いて、クエリとリアナ、大吾が手早く着替えさせる。最後に鬘を被せて完成だ。どこか草臥れた青年風の仕上がりになり満足してクエリも外に出た。

懐から出した気付け薬を嗅がせれば、心底嫌そうに男の顔が顰められる。あまりにも強烈すぎる香りなので、その効果を知っているリアナは予め全員に鼻を摘むよう指示している。それでも完全に回避できるわけではなく、慣れていない所長や大吾に至っては直ぐにでも回れ右をして新鮮な空気を吸いたいはずだ。

暫く待っていると蒼色の虚ろな視線が無機質な白い天井を彷徨う。頭を押さえながら上体を起こした男は、漸く直前にされた仕打ちを思い出し、声を出しかけた。が、それを察したリアナが即座に口を覆い、静かに、と諭す。男は大吾に視線を移し、それを受けた大吾が頷き渋々ながらも声を上げるのを止める。落ち着くのを待って、リアナは男の両頬に手を置いて、潤んだ瞳で見上げる。そのたおやかな外見も手伝って、演技を見ていた男達は庇護欲を掻きたてられた。お強請りされれば思わず頷いてしまうだろう。勿論間近で見せられた男も例外ではない。

「ああ、探しましたのよ。こんなに攫れてしまわれて。さあ、屋敷に戻りましょう？」

「あ、ああ」

「私の自己満足だと判っております。けれど、どうか屋敷で安静になさってください。酷い怪我なのでしょう？」

「ああ」

良かった、と安堵するように胸を押さえ、次には花が綻ぶような笑顔が現れる。男は暫しその美しい笑顔に魅入られ、次の瞬間には鳩尾に衝撃を受けてリアナに被さるようにして気を失った。演技だということを忘れていた男達も、牢内に響くリアナの半狂乱の声で我に返る。

「きゃあ！？どうしよう？傷がきつと開いたんだわ。早く屋敷に連れていってお医者様に見せないと」

「所長。私がお嬢様とこの者を送っていても？」

「ああ、頼む。彼だけでは人手が足りんだろう。お前も一緒に運んでやれ」

「わかつ……えー、了解した」

「ささ、お嬢様。参りますよ」

「ええ。そうっとね、そうっと」

五人の遣り取りは聞こえているだろう。当然捕まっているはずの三人の不法入国者も聞いたはずだ。同じトートス人が運ばれる理由もこれならば不自然ではないはず。これはあくまで演習で、政府に他意はないのだと見せつけるために。これで少しは時間稼ぎが出来ればいいのだが。

行くと違い、令嬢が拾った男と、男を運ぶ警備隊員の一人を増やして馬車は王城へと向かった。

偽りの探し人（後書き）

正直今回の話は判りづらいのではないかと（特に最後）。
どなたかアドバイスクださると嬉しいです。

囚われの身（前書き）

長らくお待たせいたしました！！
ほんっとーに、遅くなって申し訳ない。

囚われの身

「……だろう？……ろよ」

「貴方は……ですか。……ません」

何者かが口論する声で、彼は目覚めた。はっきりいって目覚めはとても悪い。彼にいち早く気づいたのは口論をしていたうちの一人で、それは見覚えのある顔だった。けれど、意識を失う前は丁寧に結われていた栗色の髪が、今は簡素に一本で結ばれている。耳たぶにぶら下がる銀の紋章が貴族であることを示していた。

「あーっと、お嬢さん？あんたが捜してんのは別やと思うねんけど」「いいえ。僕が探していたのは貴方で間違いないですよ。」青海の山賊”頭領殿。それとも理経様とお呼びした方がいいですか？」

にこりと微笑む令嬢、いや男なのか？に彼は警戒を強めた。一つ目はともかく二つ目の名前は知られていないはずだ。

「あー、落ち着いて聞いて欲しい、理経殿。ここは……」

「あんたも敵やったんか？俺やと知っていて近づいたんかいな」

腰に差した短刀を出そうとして、しかし何もないことに気づく。迂闊だった。服装も全て替えられているようで、隠し武器の類は全て取り除かれている。

「だからヴァリーは邪魔だと」

「仕方ないだろう。俺だって責任者だぞ」

「この事件に関しては全て僕が任されているはずですけど？誰かの采配で」

「う…それはだな」

「まさか、これも憶えてないなんて言いませんよね？クレハさん特製の栄養ジュースのお世話になりましたようか」

「あれだけは勘弁してくれ！」

「効き目は抜群ですよ？あれを飲めば、徹夜明けでもあら吃驚！ですから」

「確かに吃驚だな」

いきなり始まった仲違いに、彼はそろりそろりと唯一の退路である扉へと近づいた。ドアノブを回すが、すかっと空回りするだけで開かない。少年がちらと一瞥した。

「ああその扉、実は偽物ですから。開ければ見事飛び降りれます。

本物は別にありますよ。……兎に角、最近集中しなさ過ぎです。決裁の内容を憶えてないなんて重傷ですよ」

「判った。判ったから落ち着け……」

「今日の昼食後からお茶の時間までは時間を空けてますから、ヴィエッタ様のところへ行ってください」

「なぜ義姉上のところに行かねばならんのだ」

「何かをお悩みのようですから、この際早期解決していただこうと思ひまして。僕には話せなくてもヴィエッタ様なら話せるでしょう？貴方の親代わりですし」

「はあ……。義姉上に話せるはずがないだろう？せめて兄上にしてくれ」

「リュディアス様は良くてヴィエッタ様には相談できないのですか？まさか、俗に言う男同士のあれですか」

リトルの「あれ」がよく判らないが、ヴァリアスはとりあえず頷いた。思いやってのことなのだろうが、少し苛立つ。

「でしたらそこに適役がいるじゃありませんか。ささっ、彼ならきつと経験豊富でしょうし、どんとお世話になってください。そういうわけなので暫くヴァリーをお願いしますね、理経様」

ひらひらと手を振って絨毯を捲れば、何とそこには扉が。啞然としているヴァリアスを置いて階段を降りると、ご丁寧に外側から鍵をかけられる。

隙を逃さず扉に取り憑いた理経に無駄だと、近くの木箱に腰を下ろしたヴァリアスが告げた。

「それは外側の鍵でしか開けられない。あいつもその内戻ってくるから大人しく待っていたほうがいいぞ」

「そうですかと納得できるとでも？ヴァリー、あんた何もんや」

どきりと寝台に腰を下ろした理経が、ヴァリアスを睨む。しかし、ヴァリアスは首を横に振った。

「俺はあいつに全てを任せた。そのあいつが明かさないと決めたなら俺は言えん。すまん」

他人の前では必ず、ヴァリアス様と呼ぶリトルが敢えてヴァリーという愛称を使った。つまりは、まだ彼が”ヴァリアス”であると知られたくないらしい。

「あいつってさっきの嬢ちゃん、いや坊ちゃんか？」

「ああ。外見だけは綺麗だが、あれは正真正銘坊ちゃんだから手を出そうなんて考えるなよ？」

「出したら？」

「殺される」

あれの保護者に。

何度も襲撃者を送られた身としては、十分その恐ろしさが骨身に染みついていてた。それを困った若様の悪戯で済ませてしまうリトルもどうかと思うが。因みに撃退は全てリトルが行っている。一応、あれは俺の護衛だからだ。それがまた更に怒りを煽ることになるのだが、二人は生憎と気づいていない。

囚われの身（後書き）

中途半端ですが、一旦切らせて頂きます。今日中にもう一本投稿します。

お悩み相談室

「ふうん。ま、いいや。んで？あんたの悩みって何なん？」

髪を弄りながらの一言にヴァリアスはがくつと立てていた肘を落としかけた。

「言うことがそれか。普通、ここはどこくらい聞くだろう」

「聞いたけどあんたらが無視したんやないか。それに、大吾も傍にいたんやからあんたらが俺を害するつもりはないんやろ？」

「判っていて先程の茶番か？人が悪いな」

「あれはホントやて。混乱しとっただけ。あんたらが人の目の前で喧嘩し出すから、冷静になれたけどな」

「これもあいつの作戦か？」

疑問に首を傾げる理経に、ヴァリアスは何でもないと打ち切った。これ以上考えても、リトルの思考など判るわけがない。小さく息を吐き、僅かな隙間へと目を凝らした。

「実は気になる女性がいてな」

「あ、ほんまに相談する気かいな。それで？」

見ず知らずの人間、いや意気投合はしたがそれだけの人間になぜ恋愛相談しているのか。甚だ疑問ではあったが、ヴァリアスは気を取り直した。知らないからこそ、すんなり話せたのかもしれない。

「彼女は強力な門番に守られている。同じ顔を持つ兄も近くにいますが、複雑な事情で妹に会えないらしい。それで、俺の甥が彼女を気に入っていて、その母親も乗り気な感じで」

「ちょ、ちょい待てや。こんがらがってきた。つまり、あんたには強力なライバルと障害があるってことか？」

「簡単に言えばそう、か？」

他にも政治的な理由とか宗教上の問題があるのだが。というかそれが一番の問題であることにまでヴァリアスは頭が回っていなかった。

「それで俺の近くに彼女に瓜二つの人間がいてな。そいつの顔を見る度に思い出されて」

「うんうん。辛いなあ」

「遂に仕事まで支障を来すようになった訳だ。こうして話してみると我ながら女々しいな」

「そんだけあんたが彼女にぞっこんでだけやん。彼女、デートに誘ったら？」

「相手は貴族だぞ。そんな簡単に出来るわけ無いだろう」

「ふうん。身分違いの恋ってやつか。かーっ、益々燃えるねえ」

「燃える？」

「恋だよ、恋。あんたは彼女に恋してるんやろ？ いいね。やるな、この色男」

彼がする側なので、色男は関係ないのだが、深く考え込むヴァリアスには意味をなさなかった。それよりも恋という言葉が頭で反駁される。

（この俺が恋だど？ そんな馬鹿な。いや、だがこれまでの症状を恋という単語に当てはめてみれば全て辻褄が合う。しかしこの俺が恋？ そんな可愛らしい思いを抱いているのか）

彼にとっての恋愛感情は、脳みそのふやけた人間達がするものだ

と認識している。育ての親である兄夫婦のバカップルが根底にあるためだがそんなこと知る由もない。

だが、彼は嘗て無いほどここ最近の集中力が乱れていることを悟っていた。あのリトルが休暇を取れとまで言うほど重傷らしい。自分よりも自分のことを知っている彼の言葉には信憑性がある。

「そうか。恋か」

欠けたピースが埋まったかのような、これまでのもどかしい気持ちがすっと収まる。それは自覚したからなのか、それとも。

金属の擦れる音に続き、かちりと錠が開かれる。顔を覗かせた少年はドレスではなく、軍服、しかもこの国では知らない奴はいないほど有名な竜騎士の制服を着て現れた。後ろには大吾を連れているヴァリアスを一瞥し、花咲くように綻ばせる。

「適当に頼みましたが、どうやら少しは解消されたみたいですね。ありがとうございます」

「いやあ、俺はちよつとこの人の話を聞いただけや。それより坊、あんたそれ本物か？」

「ええ。ご挨拶申し遅れました。僕は竜騎士の一人リトル・グルテアと申します。理経Ⅱトートス殿下。数々の非礼をお詫び致します」

慣れた所作で、目上の者に対する礼を取る少年に、間違いでないことを知る。纏う空気が市井の者とは明らかに違った。

「あー。まあそう畏まらんでや。俺はただの山賊の頭やし」

「ええ、そうですね」

にこりと微笑むその顔に、ふと一人の人物を彷彿させた。理経は身を乗り出して、上から下まで眺める。

「何や自分。めっちゃあの子に似とるやん。リアナっちゅーたっけ、あの公爵家のじゃじゃ馬姫」

「リアナ嬢をご存じか!？」

「リアナ嬢!？ぷっ、あっはっはっは。もしかしてヴァリーの……」

「それ以上言うな!」

これ以上話させまいと実力行使で口を閉じさせようとするヴァリアスと笑いながら逃げる理経。それぞれの腹心は、顔を見合わせてがつくり肩を落とした。

「つまり、俺達の葉から経路がばれたんか。村人達は関係ないで。知らずに協力しただけや」

大体のあらましを聞いた理経が、一瞬戲けた様子を解いて鋭く睨む。判っていますとリアナは顔色一つ変えずに頷いた。胡散臭いことこの上ない。

「俺達が命を狙われとんのは理解した。あんたらが俺達を匿う理由もな。それでこれからどうする気や?」

「その前に教えてくれませんか? 貴方が表舞台から消えてから山賊になるまでの空白の三年間と、なぜクロウ王の陰謀を知っていたのか」

「それを知ってどうするつもりだ」

リアナに刀の切っ先を突きつける大吾。しかしリアナは相変わらず微笑んだままで読み取らせない。隅に控えているヴァリアスも手を出そうとはしなかった。

「知りたいのは当然でしょう？例えばロクロ王と結託して、疫病を我が国にも流行らせ、予め作っておいた大量の薬で売りさばき金を得るとか、自国の兵士だけ罹らないようにしてこちらに疫病を広げれば攻めることも容易になるとか。貴方が敵でないと言い切れますか？」

「貴様っ！」

「止めい、大吾。こいつの考えは国の騎士として当然のことや。不法入国した挙げ句に三年もこそ怪しげな薬を作った。しかもそれが、四年前のトートスで広がった疫病の特効薬に類似してたんやからな。疑わない方がおかしいやろ」

大吾が渋々引き下がったのを確認して、理経は向き直る。

「すまん。こいつは過保護やから許したってくれや」

「僕も似たような立場なので判るつもりですよ」

「お前は俺が暴言を吐かれても、涼しい顔して立ってるけどな」

「僕は教育方針が違いますから」

小さく吐かれた毒にリアナも小声で言い返す。教育方針って何だよと呟いている時、床がこんこんと鳴った。扉の丁度真上にヴァリアスが立っていたので、リアナに目配せして扉を開ける。それはリアナの副官だった。ヴァリアスに先に降りるよう促してからリアナは二人に小さく頭を下げる。

「申し訳ありませんが、少し席を外します。後ほど部下を寄越しま

すので、要望があれば彼に。大吾殿は既にお分かりだと思いますが、特定の場所以外は立ち入らないよう。命の保証は致しませんので」

では、とその姿が消える。今度は錠がかけられない。つまり、出て行くのも自由だ。

「用心深いんだか深くないんだかよう判らんな」

鍵を閉めなかったのはその必要がない、つまり逃亡できないようになっているのだが、彼等が知るはずもない。

「これからどうされますか」

「どうもこうも、ばれちまったしなあ。あっちも動きだしたんだ。為るようにしか為らんやろ」

自国だけでなく既に隣国も巻き込んでしまっている。こうなった以上、流れに任せるしかなかった。

「適当ですね」

「どうにもならんからな。ひとまずはあいつらの説教からやな」

タイミング良く、寄越された部下がやってきた。

お悩み相談室（後書き）

次は正月企画でもやりたいなあと。クリスマス企画は別の作品でやりたいと思います。

正月企画

リアナ「皆様、あけましておめでとうございます!」

ヴァリアス「今年もよろしく頼む」

リアナ「ヴァリー! お仕事はどうしたんですか? (黒い微笑み)」
ジュード「え? あ、いや。その、だな」

リアナ「ふふ。クリスマスに長期休暇を取りやがってくれましたから、年末までの仕事が終われなくて、休暇中の僕が急遽呼び出され、なのに当の本人はさぼっていると…… (じーっ)」

ヴァリアス「(目が据わっている!?) きゅ、休憩中だ。ずっと座りっぱなしで疲れたんだ」

リアナ「休憩中といえば、ほんの小一時間ほど前にも取られたはずですけど」

ヴァリアス「う。だが、お前だって取っているじゃないか」

リアナ「僕は仕方なくですよ。残りはヴァリーの裁可待ちですので」
ヴァリアス「……すみません」

リアナ「謝るくらいなら、早急に机に戻って仕事をしてください」

ぱたぱたと廊下を走り去る音。

リアナ「……ふう。全く、ヴァリーといい作者といい、どうしてこうも碌でもない連中が多いのでしょうかね」

作者「え、だってインスピレーションがねえ……」

リアナ「言い訳は結構です」

作者「(て、手厳しい…) いや、だって、こういう企画ものってなんか憧れでして」

リアナ「本編もまともに書けないのに、企画ものなんて論外でしょうに (溜息)」

作者「ごめんなさい☆」

リアナ「(一步退いて) 気持ち悪いですわ」
作者「ひどっ！ っていうかキャラ崩れてる」

リアナ「誰のせいだと……(にっこり)」

作者「(ひたすら土下座)」

.....

リアナ「それで、反省しましたか？」

作者「え？ えーっと。あはは」

リアナ「笑って誤魔化しても無駄です。どうせ他毎に現を抜かしているのでしょうか？」

作者「そんなことは」

リアナ「某連載小説の更新速度が速いそうですけど(ぼそっ)」

作者「……えへ」

リアナ「(更に一步退く)」

作者「えーっと、なんか傷ついちゃうな」

リアナ「それをさせる貴方が悪いのでしょう！」

作者「……それもそうですね。すいやせん」

リアナ「謝罪を口にすれば許されるとでも？」

作者「思ってますよ。それが何か？ (ふふん)」

リアナ「はあ。開き直るなんてなんて質の悪い……(頭を振って)」

作者「まあまあ。そんな若い頃から苦労しすぎると胃潰瘍になっちゃうぞ」

リアナ「誰のせいだと、誰の？」

作者「んと、ヴァリアス君、かな」

リアナ「確かにヴァリーも大きな要因の一つではありますが、それ以上に貴方のせいでしょうに。それで？ 本編は何時更新されるのかしら」

作者「(ちっ。混ぜっ返すなよ) ……年内」

リアナ「何時、かしら？」

作者「だから年n」

リアナ「（懷から怪しげな小瓶を取り出す）実はこれ、クレハさんからサンプル用にいただきましたの。ああ、ご安心ください。三日ほどお腹の調子が悪くなるかもしれませんが、きっと大丈夫ですから」

作者「……頑張って一週間以内に」

リアナ「今日中」

作者「明日」

リアナ「言質を取りましたわよ。もし、嘘をついたりしたら……（小瓶の蓋を開ける）」

作者「（蒼白になりながら）コクコク」

リアナ「擬態語の使い方が間違っていますよ」

作者「気にすんな！」

リアナ「……疲れたので一度家に戻りますわ。ヴァリーにそう、伝えておいてください」

作者「いいのー？期日過ぎちゃってるんですよ」

リアナ「どうせ提出する部署はお休みですから、三が日までに終わらせれば問題ありません」

作者「……可哀相なヴァリアス君」

リアナ「何か？」

作者「いいええ」

リアナ「全部終わったなら休んで良いことも伝えてくださいね。では」

取り残された作者。

作者「……飴と鞭。いや、鞭と飴？ま、いや。ヴァリアス君の執務室に……って、ここどこだよー！」

「お帰り、リアナ」

「只今帰りました、リユージュお兄様」

王都のスフェネル公爵別邸へと戻れば、玄関でリユージュが待っていた。新年に合わせて新調した正装を着こなしたリユージュは颯爽とリアナを抱きしめる。休暇中だというのに何処かの馬鹿皇弟のせいで、仕事に行ってしまった可愛い義妹を腕に囲んで漸く安堵の息を吐いた。勿論見張りをつけておいたが、泊まりがけというのはやはり不安だ。相手は未だにリアナ＝リトルに気づかない間抜けな馬鹿皇弟だが万一間違いが起こるとも判らない。

「さあ、お風呂でさっぱりして着替えておいで。新年のお祝いをしよう」

眉間に口付け、名残惜しみながらも下ろしてやる。侍女達には任せ、リユージュは一旦自室に戻った。

リアナの正装を着付けた侍女達は、出来前に感嘆の息を漏らす。勿論、普段のドレスもリユージュやジュードが厳選するだけあって、大変素晴らしいものであるが、今回はまた格別。今年の誕生日を迎えればリアナも成人と見なされる年だ。合わせて正装もこれまでのどちらかと言えば可愛らしいものから、大人っぽい、落ち着いた雰囲気のものへとなっている。斬新な黒のサテン生地で作られた衣装にはリアナの白い肌がよく栄え、所々あしらわれた白いレースが大々しい中に甘さを残している。アクセサリーは全て白と黒の真珠で統一されており、少しだけ施された薄い口紅が艶やかさを出していた。

「良くお似合いですわ、お嬢様」

「今回は公爵様が半年も前からお嬢様のために用意されたものなんですよ」

「黒のドレスなんてどうかと思いましたが……さすがはレティエナですわね」

レティエナとは、数年前までスフェネル公爵家で働いていたお針子の名である。とある出来事を切欠にリュージュが後援して店を構えることになり、現在は若手デザイナーとしてその名を馳せている。彼女の作るドレスはどれも斬新で、全てオーダーメイドだ。仕事も数年先まで予約が入っているらしいのだが、リアナのドレスだけはそれに当てはまらない。

「ええ、とても素晴らしいわ。でも本当に変ではないかしら？ 前が開きすぎのような」

「大丈夫ですわ、お嬢様なら！」

「そうです。その見えそうで見えないところが男心をくすぐるのです！」

困惑するリアナに、拳を揃えて高らかに叫ぶ侍女達。勢いに吞まれ、そういうものなのかと何度も頷く。

「お嬢様ならきつと素敵な殿方に出逢えますわ」

「そもそも、お嬢様を無視する殿方など殿方ではありません」

侍女の気合いが入るのも仕方のないだろう。貴族の成人となれば結婚に直結する大事な時期だ。貴族令嬢ともなれば十代で婚姻を結ぶのが当たり前。幼い内に婚約を結ぶことはほとんど無いが、その代わりに頻繁に社交へ出るなりして将来の相手を見つけなければな

らない。尤もリアナの場合は”一般”に当てはまらないので、結婚は義務ではないのだが、複雑な事情を侍女が知る由もない。

この手の話題がこの先増えるのかと思えば憂鬱になるが、彼女らは思いやってのことで決して悪気はない。それだけに無碍にも出来ず、曖昧に濁して話題を打ち切った。

別邸では新年の祝いということで、今日ばかりは無礼講で、この別邸で働く者全てが祝いの席に参加する。年末にかけて丁寧な磨き上げられたホールは開放され、食事や酒がふんだんに用意されていた。乾杯の音頭を取った後は、リユージュとリアナは程々にして自室へと引き上げる。どちらかと言えば使用人達を労うために開いているので、彼等が何時までも居ては邪魔だろうという配慮だ。

「では、お兄様行って参りますね」

「もう行ってしまのかい？別に挨拶なんて明日でも……。当の主だってまだ仕事かもしれないよ？」

「きっと終えていますよ。あれでやる時はやる方ですから」

「日頃からそうであってくれと嬉しいんだけどね。今回なんて特に」

折角帰ってきたのにまた出かけてしまう義妹をなんとか引き留めようとリユージュは重ねるのだが、リアナは頑として譲らない。行くなど言えばきつとリアナは諦めるだろう。けれど結局許してしまう自分は相当彼女に甘い。

「……気をつけて。適当に帰ってくるんだよ」

「はい」

兄の頬に唇を落として、リアナは別邸を出た。向かうは皇都中心にそびえ立つウイングパレス。その名が示す通り、中央入口を中心として左右対称に横に広がるように建てられている。王宮も例に漏れず、今日という日は侍女が侍従達のために王宮の一角が解放されており、皇族の住まう宮は最低限の護衛を残して閑散としている。

暇だから気軽に遊びにおいで。との誘いが来たのは、昨日だったか。恐らく断ってもいいとは思うのだが、最後のご飯を作ってくれと嬉しいというのは一体どういう事なのだろう？

とりあえず食材片手にやってきたリアナは、護衛達に挨拶をしてプライベートルースペースへとやってきた。

「いらっしやい、リトル君。待っていたよ」

皇帝自ら扉を開けて迎えてくれた。それに恐縮しつつも、素直に談話室へと足を踏み入れる。暖炉の前にはジェラルドとキエリファが陣取ってボードゲームをしており、ソファではヴィエッタが編み物を、机を挟んだ向かい側ではヴァリアスがソファに寝転がっていた。護衛を少なくするためとこうして皇族全員が一箇所に集まっているのだが、やっていることはバラバラだった。

「待っていたわ、リトル。貴方はこちらへいらっしやい」

ぼんぽんとヴィエッタが自分の隣を叩く。ソファの上には本が置かれており、恐らくそれはリュディアスのものだろう。

「陛下」

「ああ、気にしないでいいよ。ソファは十分広いから」

本を退けてどうぞとリュディアスに譲られれば仕方がない。皇族と同席するなど以ての外だが、今は完全にプライベートの時間だ。変に遠慮するよりも従った方がいいだろうと判断して、素直に腰を下ろす。それでいいんだよとでも言うようにリュディアスが頭を撫で、彼もまたリアナの隣に座った。

「実は今手袋を編んでいるのだけど、ここの編み目がどうしても上手くいかなくて」

「そこはこうしてこうやってですね」

「成る程ね。そうよ、毛糸も余っていることだし、貴方も誰かに作ったらどうかしら？」

「ええ？」

「どうせ夕食まで暇なんだから。ね、そうしましょう」

流されるまま編み棒をとった方がいいが、誰に作ればいいのだろうか。困った挙げ句、とりあえずマフラーでも作ることにする。マフラーならサイズを気にすることもないだろう。早速手を動かした。

「ねえ、リトル」

「はい。何でしょうか？」

「リアナ嬢は今年成人ね」

「そうですね」

「決まった相手はもういるのかしら」

「……はい？」

一心不乱に動かしていた手を止めリアナは顔を上げた。ゲームをしているはずの二人も、眠っているはずのヴァリアスも、そして隣で本を読んでいるリュディアスもこちらを注目しているのが判る。

「お嬢様、ですか？さあ……公爵様のお考えは知りませんので」
「じゃあ君から見てどうなんだい？」

リュディアスの間にリアナは眉根を寄せた。あくまでリトル、リアナ本人の意志を聞きたいということなのか。

「お嬢様は日頃本邸の方におりますので、僕では何とも……申し訳ありません」

上手い逃げ方だ、男達は内心舌を打つ。ヴァリアスの手前、リアナとして問い質すことも出来ない。

「そうだったわね。貴方は公爵家縁の者ではあっても、一員ではないもの」

ヴィエツタが上手く言葉を繋げる。

「ところで、どうしてそんなにお嬢様のことをお知りになりたいのでしょうか？……あ、いえ。差し出がましい口を利いて申し訳ありません」

「いいのよ。どうせ数日もしたら判ることだもの。ねえ、リュド」
「そうだね。……これはまだ内密の話なんだけど、リアナ嬢を引き取りたいと思っているんだ」

子供たちは驚愕に目を見開いた。リアナも動揺こそ面に表すことはなかったが、一瞬頭が真っ白になる。

「……なぜ、それを僕に」

「既にスフェンネル公爵には打診してるんだよ。今は返事を待って

いるところだ」

冗談だろう？と聞き返すことは出来なかった。リアナ存在を知られた時点でこうなることも予期していたはずだ。

「聡い貴方なら理由も判るでしょう？世間にはリュドの隠し子として公表することになるわね。亡くなった愛人の子供を密かに公爵家に預けていた、とでもしておくつもりよ」

「ヴィエッタ様はそれでいいのですか？」

自分よりもまずヴィエッタの心配をするリアナに、思わず頬が緩む。

「優しい子ね。でも私が提案したことなの。大丈夫よ、私は真実を知っているから。それにリアナ嬢が娘になるなら大歓迎だわ」

二人の息子達の反応を確認して、ヴィエッタとリュディアスはほくそ笑む。さて、彼等がどう動くのか楽しみだ。

正月企画（後書き）

ほのぼのにするつもりが伏線ばかりの内容に。うーん、まあこれは本編よりも少し後の話ということでご了承ください。少なくとも、今の三章が終わった辺り、かなあ。

動き出す歯車（前書き）

お待たせしました。やっと本編です。

動き出す歯車

廊下を歩きながら、リアナ達は副官からもたらされた情報に驚愕していた。根も葉もない噂だが、確実に反帝国の動きが広まっている。国境付近に当たるスフェンネル領へ大規模な捜索隊を出さなくて正解だった。敏感になっているトートスに刺激を与えるのは得策ではない。

「お帰りなさい、ロードさん」

「聞いているな。酷い」

旅装も解かずに執務机に向かっているのは竜騎士の一人、ロード。国外の情報を集めるのが彼の役目で、自身も情報収集によく出向いているのでその姿を見る確率は限りなく低い。

「三年前の疫病は帝国がもたらしたものだ。帝国は東大陸の利権を狙ってトートスを属国にしようとしている」でしたよね。一体どこからそんな噂が」

東大陸と唯一貿易をしているのがトートスだ。その貿易でトートスは莫大な富を得ている。

「発信源、王宮。信憑性が増している」

「疫病なんて流行らせなくても、半分の戦力があれば七日で制圧できるんですけどね。三年経っても動いていないのに、民衆は信じているんですか」

「王、煽動」

「絶大な支持を受けてますからね。自作自演の英雄気取りが仇になったか」

「他国の動きは？」

「静観」

「西の動向に注意してください。混乱に乗じて攻めてくるかもしれない」

「了解。リトル休養」

虚をつかれたリアナに、ロードは視線を書類に落としたままだ。ありがたいございますと苦笑して、リアナは出て行く。真紅の双眸がその背中をじっと見つめていた。

トートスの動きは既に皇帝の耳にも入っているはずだ。今日か明日にでも招集がかかるだろう。即刻資料を作成しなければならなし、ジュードから連絡がないのも気になる。とても休める状態ではない。

「見抜かれてましたね」

通常業務に加え、今回の指揮を執っている。ヴァリアスが役に立たないので、その分皺寄せを食らっている。ここ数日は、食事を摂るために公爵邸へ帰り、持ち帰った仕事を明け方まで処理している。でほとんど眠っていないかった。常人に比べれば遙かに丈夫な身体とはいえ、精神は疲弊する。

「あまり人のことを言えませんか」

ヴァリアスのように仕事にまで影響が出ていないのは、ある意味奇跡だが。首を一つ振って、地下牢へと足を向けた。

「こんにちは」

鉄格子を挟んでかけられた声に、フレイは穏やかにこんにちはと返した。囚われているには違いないが、相手は国を護る竜騎士で、教えられる範囲内で事情は説明されている。囚人としては破格の対応であったし、彼等が気を許すのも時間の問題だった。その中でも、このリトルという少年は公爵家に引き取られていった妹にそっくりで、度々様子を見に来ることもあり、フレイは親しみを感じている。

「やあ、久しぶり。今日はどうした？」

タメ口を聞くのも畏れ多いと最初は拒否をしたが、年下であることと本人の強い希望でフレイは普通に話す。

「いえ、様子を見にただけです。不自由はありませんか？」

「外に出たいとは思うけど。こればかりは仕方ない」

「すみません。まだ暫く帰してあげられないそうにないです」

「リトル君のせいじゃないって。気にするなよ」

牢屋といっても、普通の部屋と変わらない。官舎を出なければ自由を保証されているし、衣食住はしっかり支給されている。山賊を手伝ったのだから刑に処されてもおかしくないのにだ。恐縮しきりのリトルに中へと促す。ポットからお茶を注いでやった。カップを両手で持ちながら飲むリトルに、自然と頬が緩む。

王都で流行の芸人の話や、故郷の話に花を咲かせている内に、あつという間に時間は過ぎる。遠くから呼ぶ声に、リトルは立ち上がった。

「そろそろお暇しますね。お邪魔しました」

「ああ、また。程々に休憩しろよ」

「え？」

「顔色が悪い。リトル君は俺の妹そっくりだからさ。なんとなく判るんだ」

驚いて目を瞠るリトルの頭を撫でてやれば俯いてしまった。気安すぎただろうかと手を離す。

「あー、ごめん。竜騎士様にこんなことしたらまずいよな」

なんせ、相手はエリート中のエリートだ。本来ならこうして気軽に話せる立場ではない。それは偏にリトルが許しているからであつて、あまりに馴れ馴れしくしすぎだ。14の少年にすることではないだろう。

「い、いえ。失礼します」

小さく頭を下げ、走って行ってしまった。この程度で罰せられることはないだろうが、失敗したとフレイは頭を抱えた。

小太りの男が、煩わしそうに玉座へと腰掛けていた。苛々と肘掛けに指を打ちながら男は何度も足を組み直す。

「報告はまだか」

「まだ来ておりません。帝国に情報が漏れたのではないでしょうか」
「王宮に潜らせている手の者から報告はない。奴等は西の情勢で手

一杯だろうよ」

「そんなに上手く事が進むでしょうか？」

「どうということだ？」

脇に控える長髪の男を見やり、再び男は視線を前に戻した。象徴である青の絨毯が、全てを呑みこまんとする深海のように見える。男はぶるりと肥えた身体を震わせた。

「私の計画は完璧だ。6年も前から綿密な計画を立ててきたのだ。邪魔者を排し、馬鹿な民衆を味方につけ、私の王位は盤石だ。今更過去の遺物が出てきたところでどうにもならん」

どこから完璧などという言葉が出てくるのか不思議に思った。しかし問うたところで詮無きこと。既に事態は動き出している。この男を終焉に導く歯車が。

偽りの王へと頭を下げ、彼は長いローブを翻して玉座を後にした。

動き出す歯車（後書き）

この続きはまだ考えていないので、またも更新が開くかと。テスト近いですし、二月中旬くらいまで更新は少なくなると思います。ごめんなさい。

明日は槍が降る？（前書き）

前回の補完です。短いですが、中途半端になるので一旦切ります。

明日は槍が降る？

ヴァリアスは戦々恐々としながら、機嫌良く筆を滑らせるリトルを見ていた。最近苛々している様子であったがそれはすっかり形を潜め、今は驚くほど機嫌がいい。美少年に似合わぬ薄い隈は短時間でなくなり、正に元氣潑刺であった。

さて何があったのだろうか？

報告に來た武官達ですら、奇妙な空氣に何とも言えない顔をしている。リトルの部下に至っては、雄叫びをあげて走って行ってしまった。天変地異の前触れだと触れ回りながら。

この執務室の主は一応ヴァリアスなのだが、居心地悪いことこの上ない。何とかしてくれという他力本願な願いを聞き入れる勇者などいるはずもなく、既に外は薄暮に染まっていた。昼休憩を終えた時からこの状態だと考えれば、一日の四分の一を過ぎたことになる。

上機嫌に帰り支度を始めているリトルに、ヴァリアスは今後の平穩を取り戻すべく手招いた。

「どうしました、ヴァリー？」

「それはこっちの台詞だ。お前、午からずっと調子がおかしいだろう」

「そうでしょうか？ 因みにどのように」

「鼻歌でも歌い出さんばかりに上機嫌だった」

それのどこがおかしいのだろうか？ リアナは首を捻ったが、彼女

がもたらす周囲への影響など知るはずもない。

「いけなかったでしょうか？」

困り顔のリトルに、ヴァリアスは誤解を与えてしまったと悟る。

出会った当初に時折見られた無表情からは想像もつかないほど喜怒哀楽を見せるリトルに、寧ろ彼は喜ばしく思っていた。彼は密かにリトルの感情の起伏が少ないことを案じていたのだ。今では滅多に見ることはないが、あの等身大人形のような姿はなるべくしてほしくない。偽りでも笑顔を浮かべている方がマシだ。

「あー、いいんだが……。いや、良くないのか？ まあ、お前が上機嫌なのはいいことなんだが」

「つまり？」

「その原因は何だ？ 気になって落ち着かん」

黙ってしまったリトルに、ヴァリアスは自分が発した内容を吟味して、急激に温度が上がるのを感じた。

そもそもなぜ、俺がリトルの機嫌に一喜一憂せねばならんのだ？ 大体これまでだって似たようなことがあったじゃないか。その時は普通に過ごしていたはずだ。これ幸いと仕事の軽減を図ることだって出来たはず。機嫌の良さとは裏腹に毎回すげなく却下されているが。

「いや！ これは断じてお前が気になるとかじゃないぞ。仕事の効率を考えてだな……」

「……そうですか」

目を伏せるリトルに罪悪感をひしひしと感じる。

「あ、ああ、そうだ。言わないお前が悪い」

断定するヴァリアスに、やはりリトルは頷くのみ。後悔先に立たず。すっかり自己嫌悪の嵐に陥ったヴァリアスは頭を抱え込むものの、リトルはあくまで報告のように出来事を掻い摘んで話し、そして落ち着いた様子で行った。

明日は槍が降る？（後書き）

すれ違い主従の巻です。ていうか、ヴァリアスさん意識しすぎです。

虞囚 前編（前書き）

三日連続投稿です。第一弾。

虜囚 前編

「あ、ジュードさん。次はこっちをお願いします」

「ああ」

「さすがですね。いつ見ても不思議です」

山賊達の言われるまま、ジュードは薪に火をつける。当初は驚いていたものだが、今では感心するだけだ。トートスには魔術というものが広がっておらずとても珍しいらしい。その一方で、北の魔術大国レイヴェステインと国境を唯一接する帝国は、魔術に対する造詣が深かった。これは帝国にも言えることで、南部に行くほど魔術は怪しげな術として敬遠されがちである。

「これくらい習えば誰でも出来る」

「え、そうなんですか？ もっとこう、滝から落ちる修行とか、火の中を歩く修行とか」

「どこの奇術師だ……」

「魔術師ってそういうものでしょう」

つまり、トートスでは大半の人間がそう認識しているのだろう。既に何度も交わされた遣り取りなので、説明するのも諦めている。口で言ったところで所詮理解は出来ないのだから。

ジュードがこうして山賊達の手伝いをしている理由。それは意識をなくした後にまで戻る。

冷たい水滴で目を覚ましたジュードは奥歯で呻き声を噛み締めな

がら、目を開けた。首筋の鈍痛が何者かによって意識を刈り取られたことを示している。

とんだ失態だ。接近を許すなんて、やはり鈍っているとしたか思えない。皇都に戻ったらリアナに鍛錬に付き合って貰おうと心に決めて、腹筋を使って上体を起こす。勿論周囲に気配がないのを確認した上で、だ。身体に異常がないかを確かめてから、ぼっと拳大くらいの炎を掌に出して周りを照らし出す。その際縛られていた手首の縄を焼き切るのを忘れない。時折鍾乳石を伝った水が地面を叩き、その度に振り返る己に苦笑する。

「一応囚われているのだろうか」

目に見える範囲に格子がないので判りづらいが、遠くで灯りが漏れており、黒い影が二つほど揺らめいている。風の出入り口もその一箇所しかないので、恐らく外に出るにはそこしかないのだろう。どれだけ広い牢屋だと思わないでもないが、少しでも物音を出せば大きく反響するので、監視するには問題ないだろうが。

「さてどうしたものか」

余談だがこの独り言は、当然ながら監視者の耳には届かない。風を操って声をブロックしているからだ。ジュード自身は水属性の使い手だが、この程度には風の魔術を使うことが出来る。

「武器、は取られているな。見張りは二人。恐らく入り組んでいて出口は分らない。……脱出するにしても情報が足りないな」

口にすることで頭の中を一つずつ整理していく。特に外傷も無く、手荒にされた様子はない。相手の出方が解らない以上、大人しくし

ていた方が得策だろうか。

迷った末に、ジュードは見張りに声をかけてみることにした。

「おい」

突然声をかけられた見張りの山賊は飛び上がらんばかりに驚き、もう一人は驚きもそこそこに剣を構えた。ジュードは両手を上げて敵意がないことを示す。

「どうやって縄を解いた」

「紐が緩んでいたからだ。それよりも、お前達の責任者と話があった」

少しでも与える情報は少ない方がいいと、魔術のことは隠す。二人は疑わしげに目を交わしていたが、ひとまず抵抗する気はないと悟ったのだろう。警戒を解かないまま、剣を抜いている方が相方に呼びに行かせた。

「大人しくしているよ。今、呼びに行っている」

「ああ、すまないな」

律儀に礼を返すと、ジュードはその場に座り込んだ。山賊の困惑が伝わってきて、喉の奥で微かに笑う。

程なくして三人分の足音が帰ってきた。先頭を歩いてきた柔和な面立ちの青年は、傍らの青年に縄をかけ直すよう指示した。縄拔けできないよう目覚めた時よりもきつめに拘束され、先程寝かされて

いた場所まで連れて行かれた。左右からは抜き身の剣がジュードの首筋を狙っており、少しでも動かせば簡単に殺されるだろう。

「恐くないのですか？」

この場に不釣り合いな笑顔をたたえた青年が、ジュードの物怖じしない姿に切れ長の目を更に細くした。

「この程度では拘束されている内に入らんからな」

ジュードの台詞に左右の男達が気色ばみ、青年が片手を上げてそれを制止した。刃先が当たって少し傷ついたのだろうか、首筋がひりひりする。

「それが事実なら、貴方は相当強いようだ。簡潔に聞きましょう。貴方はどこの手の者ですか？」

「この国だ」

あまりにも拍子抜けだったのか、青年は呆れた様子で、青年の両脇に控えていた男達がそれぞれ声を荒げる。

「この期に及んで冗談は止せ」

「どうせロクロの手先だろう！」

事実なんだが。

別に彼等に自分の身分を隠す必要はないのだが、道中の危険性を考えて身分を明かす物を何も持ってこなかったのが悔やまれる。

「だそうですが？」

「俺に話を振るな」

「仮に貴方がこの国の者だとして、なぜ今更ここに？ スフェンネル公爵とは既に話もついているはずですが」

ここへ来る少し前にリアナから聞いた、山賊狩りの話を思い出す。

「今回公爵は関係ない……っ！？ リアナ？」

突然虚空に向けて大声を出すジュードに男達は瞬時に警戒した。
しかし一向に気配は見えず焦る男達を前にして、ジュードが一方的に会話を成立させている。

「今から！？ ……ああ、いる。 ……信用できるのか？ ……だが、あ、おい」

「貴様！ 一体誰と会話していた」

「答えろ」

考え込むように沈黙してしまったジュードに、男達が殺気を叩きつける。その程度はジュードにとってそよ風も同然だったが意識を戻すには有効だった。

「……義妹だ。今からここに来るらしい」

「ちっ。新手か」

「先輩、この男がこれ以上呼ぶ前に処分を」

うっかり義妹と言ってしまったジュードが内心頭を抱えているとも知らず、男達は恐慌状態に陥る。彼等を支える二人が不在の状況では心配なのも分かるが、もう少し落ち着いてくれないだろうか
と青年は思った。

「……来た」

ジュードの呟きと同時に、脳髓に直接響くような咆哮が上がった。

目隠しをして縄をかけたジュードを連れて入り口へと向かった男達は、予想外の人物の姿に目を点にした。最悪ジュードを人質に、と考えていたのだが、どうやら必要はないらしい。

「隊長……？」

「大吾隊長！」

「お前達……今すぐその方を解放しろ！」

「は？」

「へ？」

自分達の敬愛する隊長に一喝され、慌てる男達を尻目にジュードは深々と息を吐いた。一番動揺の少なかった青年が、即座にジュードの縄と目隠しを取る。

大吾、と呼ばれた男はジュードの前に来ると頭を下げた。リアナとの遣り取りで何となく想像はついていたので、肩を叩いて顔を上げさせる。

「貴殿がジュード殿、だな。私は大吾リナナカと申す。リトル殿より預かってきたものだ」

これを、と差し出された手紙と己の制服を受け取り、その場で即座に封を解いた。大吾は既に内容を説明されているらしく、ジュードの見張りをしていた二人に知らせを告げに行かせ、残りの疑わし

げにジュードを見る男達へと簡単に事情を説明している。どうやらあの三人は、比較的上の人間なのだろう。

「事情は理解した。暫くはここに邪魔する」
「かたじけない」

そして冒頭に戻る。

虜囚 前編（後書き）

はい、全然話わかんねー、ですネ。
次で話が繋がると思いますが。というか、繋がらないと私が困る。

虞囚 中編（前書き）

第二弾をどうぞ。

虜囚 中編

皇都

牢屋の一角にて、リアナは大吾と向かい合わせにお茶を飲んでいった。過ごしやすいようにと配慮した結果、牢屋というよりも、普通の宿舎と変わらない設備を備えている。

「というわけだ」

「そうですね。ジュード様からちつとも連絡が来ないのも心配ですし」

部下達が心配だから一度根城へ戻りたい。要約するとそんな内容だった。渋るかと思っていた大吾は、随分あっさりと返事が同意が得られて予想以上に拍子抜けする。

「私から言うのもあれだが、本当にいいのか？」

これまでに何度も思うことだが、裏切るといふ懸念はないのだろうか？

「問題ないです。理経様はこちらの手の内ですから」

「これだけ隙だらけならば、理経様を連れて逃げることも訳無いぞ？」

「ご自由にどうぞ？但し、その先は保証しません」

あくまで余裕を崩さないリトル。その自信は一体どこから来るの

か知りたところだが、有無を言わせぬ笑顔に怯んだ。お茶を飲むために視線が逸らされたところで、大吾は己の不甲斐なさに力無く肩を落とす。こうして笑顔で煙に巻かれることもしばしばで、一々怯んでしまう自分が何と情けないことか。

因みにこれはリアナの周囲の人間にも言えることで、彼だけではなく大抵の人間がそうやって有耶無耶にされている。深く突っ込めるのはこの国の皇帝夫妻かスフェンネル一家だけだろう。

「ところで、そのジュード殿とは？」

リアナの口元が僅か綻んだことに気づかず、大吾は一息に中身を飲み干してカップを置いた。

「ジュード様は僕と同じ竜騎士の一人です。現在”青海の山賊”の根城へ行ってもらっています」

「初耳だぞ」

「言っていないから」

ここで怒ったところでどうしようもない。どうしようもないと判ってはいるのだが、なぜもっと早くに教えてくれなかったのだと声高にして言いたい。大吾は駆け引きが苦手なのだ。何度もこうして辛酸を舐めている。

「二日前から連絡を絶ちました。ジュード様のことですから恐らくあちらで何かあったのでしょう」

「まさか」

「ご心配なく。貴方方の部下を傷つけるという行為は一切禁じます。彼の目的は理経様に接触することですから」

つまり皇都だけでなく、本拠地まで既に目をつけていたということだ。その手際の良さに呆れるよりも感心してしまう。

「だが、既に理経様は貴殿に保護されている」

「そうです。けれど、ジュード様はそれをご存じない……」

「ふ。竜騎士も大したことがないようだな」

同じ考えに至ったようで、大吾はここぞとばかりにやり返す。しかし腹を立てるかさなりと受け流すかのどちらでもなく、反応は大吾の予想を大きく外れた。

「ジュード様は少々責任が強い方ですから、無理をなさらないといいのですが」

「……珍しい」

「何か？」

「気のせいだ」

寧ろ任務の邪魔だと簡単に切り捨てそうだと思っていたので、かなり意外だった。これはヴァリアスとの遣り取りがそう思わせているだけで、実際のリアナは身内に相当甘い。リアナの部下達が慕うのもその辺りだったりする。

「とりあえず許可だけ取りに行ってくださいるので用意しておいてください」

足早に出て行ったリアナを見送ってしまってから、大吾は今は夕暮れの時刻であることを思い出し、夜通し駆けるつもりだろうかと言顔を青ざめさせた。

早速里帰りを申請するためにヴァリアスの執務室へやってきたリアナは、ソファでくつろぐ人物を認めて目を見張った。それも僅かのことで、即座に踵を返して茶器を用意し、再び戻る。

「来られるなら告げてくださればよかったのに」

「手間をかけさせて悪いね。ヴァリーは気が利かないから」

「俺がお茶を淹れられると思ってるんですか、兄上？」

「うん？ヴァリーに淹れさせるくらいなら、飲まない方がまだいいよ」

言外に不味いからいらないと言われたヴァリアスはただ肩を竦めただけだ。香り高い芳香に誘われるようにして一口口を付け、美味しいと賞する。リアナは黙って頭を下げた。そのまま出て行こうとしたところで呼び止められる。

「そういえばリトル君はヴァリーに何か用があつたんじゃ？」

「いえ、リュディアス様を煩わせるほどの用事ではありませんので」

「兄上は気にするな、リトル。単に息抜きに來ただけだ」

「その通りだから、どうぞ？それとも僕がいたら邪魔なら席を外すよ？」

皇帝に席を外させるなんて滅相もないとばかりにリアナは首を横に振った。リュディアスは少し寂しそうだったが、促されて渋々隣に腰を下ろす。ヴァリアスが不機嫌そうだったが、リュディアスに遮られてリアナからは丁度死角になって見えない。

「三日、いえ二日でもいいので里帰りを許可願えませんか」

「突然だな。公爵から急に喚び出しでもあったのか？それともウエ

イザー子爵か」

「違います。実は……」

切り出された内容に段々ヴァリアスの顔が陰しくなっていく。

「それは確かに心配だな。だがお前でなくても替わりは他にいるだろう。今お前が居なくなるのは困る」

リアナは今回の案件で重要な役を任されている。何時戦争になるかもしれないという情勢もあって、ヴァリアスが手放したくないのも当然だった。反論しようとしたリアナを遮り、それまで見守っていたリュディアスが口を開く。

「僕は別に良いと思うよ。働き過ぎのリトル君にも偶には休暇もあげないとね」

「兄上は口を出さないでください」

「えー、だったら皇帝命令ね。竜騎士グルテア卿は三日間の休暇後、スフェンネル士爵と共にエーテルメリデ砦にて待機を命じる」

「兄上！ 一体どういうおつもりですか。エーテルメリデ砦に派遣などど」

その砦はトートス国境付近に位置し、国境線を守っている。そこへ竜騎士を派遣するとなれば、いよいよ開戦の色が濃くなってくる。

「リトル君は行ってくれるよね？」

「陛下のご命令とあれば」

ヴァリアスを一切合切無視したリュディアスにリアナは首肯する。その返事に満足し、リュディアスは頭を撫でた。

「全く、ヴァリーの子守も大変だね」

「慣れてますから」

「そうだ。これをスフェンネル公爵に渡してくれるかな」

懷から出した二通の手紙を受け取ったリアナにリュディアス笑顔を見せ、未だに不満そうなヴァリアスを一瞥して立ち去った。

「リトル。俺は」

「トートス国境に兵が集結しています。数は二十万から三十万」

まとめて明日報告するはずだった書類を渡す。その詳細にヴァリアスは息を呑んだ。

「……だが、何もお前でなくても他にいるだろう」

戦争を知らないリアナが行くよりも、戦争を知る世代の竜騎士に任せればいいという、ヴァリアスの優しさだ。戦場に向かわせるには若すぎると。

「単なる抑止力ですよ。開戦なんてさせません。でしょう？」

竜騎士の存在はそれだけで牽制になる。戦時における彼等の活躍は華々しいもので、それ故彼等は畏怖の対象として周辺各国から恐れられている。

「俺の護衛はお前だけだ」

「ええ、そうです。だから早く迎えに来てくださいね？」

「……普通は逆だろう」

「偶には僕だって迎えに来てほしいんですよ」

「善処する」

「頑張ってください」

小さな背に気をつけろよとだけ告げて、別れた。

虜囚 後編（前書き）

ラストじゃー！

虜囚 後編

夜だというのに元気一杯なルークーフエルを撫で、ジュードから失敬したハンカチを嗅がせる。もの凄く嫌そうに首を振っていたが、リアナの何度目かのお願いに漸く折れて、匂いを憶えさせた。

「ごめんね、ルー」

「キュキュウ。グルルルル（主の頼みならば仕方ない。あ奴は何だ？）」

少し離れて待っている大吾を威嚇するようにルークーフエルが喉を鳴らす。やはり他のドラゴンに頼めば良かったろうか、いやでもそれで拗ねられても困る、などとリアナは考えていた。

「落ち着いて？ 今回はあの人も乗せてほしいの」

「グルウ（断る）」

にべもなくそっぽを向くルークーフエル。勿論その際大吾を睨みつけることを忘れない。

「リ、リトル殿」

「絶対にそこから動かないでくださいね。喰われますよ。……そう。仕方ないか。他の子に頼むよ」
ドラゴン

別の厩舎へ行こうとしたリアナを、ルークーフエルが裾を噛んで阻止する。行かないでとばかりにきゅうきゅう啼く。

「本当はルーにお願いしたいんだけどな。ルーが一番早いし、僕の相棒だからね。でも、今回はあの人も連れて行く必要があるんだ。」

だから。ね？」

悲しそうなリアナを見て、ルークーフエルの天秤がぐらぐらと揺れる。結局鼻を鳴らしながらも、ルークーフエルから許可が下りた。「もう大丈夫ですよ、大吾さん。彼が僕の相棒、ルークーフエルです」

恐る恐る近づいてみても、動く様子がないことに安心して漸く全貌を見回す余裕が生まれる。

「綺麗だな」

ドラゴンを見るのは初めてだ。月の光が鱗を幻想的に輝かせる。その美しさに感嘆の息を漏らし、神々しさに畏敬の念が込み上げる。自然に頭を下げる大吾に、ルークーフエルの機嫌が少しだけ良かった。

「どうぞ、大吾さん」

「ああ」

振り落とされないか不安に思いながらも胴体に足をかけて跨る。リアナは軽く地面を蹴って跳躍した。馬と違って鞍などはなく、振動が直接伝わってくる。二人を乗せて立ち上がったルークーフエルに対して、大吾の身体が不安定に揺れる。

「しっかり僕に掴まってください。放したら落ちますから」

それが決して脅しでないことがよく判る。少年にしては細すぎる身体にしっかりと抱きついた。リアナはルークーフエルに軽く手を添えているだけだが。

「行きます！」

ぴんと翼を伸ばしたルーク・フェルが力強く地面を蹴れば、地面から吹き付ける風によって瞬く間に上空へと上がっていく。夜間なので下に広がるのはひたすら闇ばかりだが、昼間に見れば家が米粒ほどの大きさであつという間に遠ざかつていく光景が見れただろう。

風によって守られているために二人が周囲の影響を受けることはほとんど無い。快適に保たれた温度に目蓋が下がっていくのを感じる。

「眠っていても大丈夫ですよ」

「流石にそこまで甘えるわけには」

「心配しなくても落としたりしませんよ。もし落ちてもしっかりと拾いますから」

「……遠慮しておく」

大吾はリトルという人物を信用はしていたが、信頼するべきではないと本能的に警戒していた。今は利害が一致するために協力関係にあるが、無くなればどう転がるか判らない。それが外見と中身が一致しないからなのか、確かに大吾は恐れていた。

互いの信念が確固したものであるからだろうか、こうして長時間自分と接しているながらも警戒を解かない大吾をリアナは面白いと感じている。敵でも味方でもない曖昧な位置にいるからこそその態度なのだろうが、それはリアナにとって新鮮で、だから気になるのかもしれない。

どれだけ経っただろうか。暗闇ですら難なく見通せるリアナは、目的地に近いことを知った。夜明けまでは大分あるようだが、時間

にして他のドラゴンの五分の一程度で踏破してしまうルークフェルはやはり規格外である。そろそろ声をかけるかというところで、風がルークフェルの声を運んできた。

「リユージュ様を？ うん、頼むよ。繋いでくれる？」

ルークフェルがリユージュの場所を特定したらしい。ドラゴンの嗅覚は鋭いので、かなり遠くからでも探し人を見つけることが出来るのが利点だ。風から送られてくる状況にリアナの眉根が段々と寄っていく。

「どうした？」

後ろが静かなので眠っているのかと思ったが、どうやら起きていたらしい。手短に説明している最中にルークフェルから用意が整ったことを教えられる。

「少しだけ静かにお願いします……リユージュ様。聞こえますか？」

『リアナ？』

「良かった。ご無事です。直ぐにそちらに向かいます」

『今から！？』

大吾は魔術という存在は知っていたが、初めてその感覚を目にして驚いていた。これはリアナが大吾にも聞こえるようにしているからなのだが、どこからか男の声が聞こえてくるのだ。恐らくジュードという竜騎士のものだろう。

「リトル殿。少し良いか？」

「何です？」

「そこに狐顔をした文官風の優男がいないか聞いてくれ。私の部下

で、不在を任せているんだ」

「判りました……ジュード様、そこに狐顔をした文官風の優男はいますか？」

『ああ、いる』

「ならば私達が着くまでは大丈夫だろう。緑破ろくはの奴なら手荒な真似はしないはずだ」

当に尋問中の状態であったため、リアナはそれを聞いて一安心した。目礼し、リアナは正面を向く。既に場所は捉えている。

「これから大吾という方をそちらに送ります。後は全て彼に任せてください」

名前の響きでトートス人だと判ったのだろう。訝しげな様子が伝わってくる。

『信用できるのか？』

「ええ。では、公爵領にてお待ちしています」

ふつりと会話が途切れる。リアナは予め用意していたバッグを大吾に手渡した。

「全て必要と思われるものはこの中に入っています。ジュード様には中に入っている制服と手紙をお願いします」

「わかった。ここまで送ってくれたこと、礼を言う」

「序ですから。では合図をしたら飛び降りてください」

「は？」

耳がおかしくなったのだろうか。この高さから飛び降りろと？

リアナは笑顔で頷いた。大吾の顔が音を立てて青ざめたのは言うまでもない。

「む、無理だ」

「じゃあ僕が落としてあげます。地上まではきちんと送り届けますからご安心を。……ルー」

心得たようにルークーフェルが世界を揺らさんばかりに大きく咆哮した。至近距離で聞いたために鼓膜が破れそうだ。咄嗟に耳を塞ごうとしたところで、急に暖かな感触が消える。月の光を反射して輝くドラゴンの上ではリトルが手を振りながら遠ざかっていく。それはつまり、彼が空へと放り出された訳で。暗闇に絶叫が響いた。

地面の感触を感じながら、大吾は尻餅をついたまま荒い息を吐いた。冗談でもなく死ぬかと思った。地上にぶつかる直前にふわりと身体が浮くような感触がして、それまでの落下が無かったように地面に着地したのだが、予備知識もなく落とされたあの恐怖は一生忘れないだろう。

「やることが無茶苦茶だ」

せめて言ってくれば構えることが出来たものを、と小さな竜騎士を恨む。構えたところであまり違いはなかっただろうが。四肢に力が戻ってきたところで、数人の足音が聞こえてくる。

無様な姿を見られなくてよかった。

驚きに目を見開く部下達に、大吾はひらりと手を振った。

虞囚 後編（後書き）

暫くテスト勉強のために一月ほど休止します。次の更新は開くかと思われませんが、どうか見捨てないでやってください。

里帰り（前書き）

短めですが、一旦切ります。

里帰り

まだ太陽も明け切らぬというのに訪れた来客は我が家を下から上まで驚かせた。何と主君の令嬢であるリアナ様だったのだ。すっかり若君らしく……いや遅しく……も違うな、ああ兎に角大きくなられた。とはいえ、俺は偶々里帰りしてただけだからリアナ様に会うのは精々数日ぶりなのだが。

なぜ我が家に来たかという理由なのだが、どうやら竜騎士の仕事で二、三日戻ってきただけだからようだ。本邸では現在公爵様や若君が慌ただしく領地を見回っており、リアナ様は皇都別邸にいらっしやると思われている。リアナ様が竜騎士になられたことを知るのはほんの一握りなので、姿を見せるには具合が悪いというわけだ。そこで、一家全員が事情を知り、且つリトル・グルテアの実家である我が家に白羽の矢が立ったらしい。

「朝早くにすみません」

「お気になさらず。少し早いが普段の起床時間と大して変わりませんから」

朝から豪快に笑うのは父上だ。四十も過ぎているのに鍛え上げられた筋肉は衰えを見せず、鍛錬した後なのか湯気が立っている。というか父上。上半身を隠してください。

「あはは、気にするな。リアナ様なら見慣れておるわ。そうでしょう？」

「え？ ええ」

頷きながらも視線を宙に漂わせているリアナ様。リアナ様に氣を使わせるなんて……！ すらりと剣を抜きかけた俺の前に母上が立ち塞

がった。

「あなた、いい加減になさいませ。いい歳したおじさんの身体よりも若い男の身体の方がいいに決まっているでしょう！ねえ？」

「え？ええと……」

それも違うと思います、母上。

「申し訳ありません」

両親も悪気があるわけではないんです。気にしないでと微笑んでくださるリアナ様はやはりお優しい。この御方に剣を捧げることが出来て俺は幸せだ。

「村を見て回りたいのですがいいでしょうか？」

朝食の後、リアナ様がそう提案された。形だけとはいえ、リアナ様はこの家の、戸籍上は俺の弟になる。休暇中なので散歩するには問題ないだろう。父上も母上も快く了承した。

「貴方様の故郷ですから、好きになされば良い」

「ありがとうございます」

「ですが、シャックスはお連れくださいね」

「判りました」

いくらリアナ様よりも弱いとはいえ、一応俺はリアナ様の護衛だ。父上もリアナ様が竜騎士としての腕前を持つと理解していても、主君の姫であるという意識の方が強いのだろう。

「日が暮れる前には帰ってきてくださいね。そうでなければ晩ご飯は抜きです」

「十分に肝に銘じておきますよ。では、着替えてきます」
「門でお待ちしておりますね」

そうと決まればいつまでも呆けているわけにはいかない。身支度を調べて慌てて厩舎に向かう。鞍を乗せ、轡を嚙ませている内にリア様がいらっしゃった。

「なぜこちらに？待っていてくだされば直ぐ参りましたものを」

「貴方だけに用意させるわけにもいきませんよ、兄上」

「ア、アニウエ？」

悪戯っぽい口調について片言で返してしまい、リア様が笑っているらしい。恥ずかしい。

「も、申し訳……」

「もう。だからシャスが今は僕の兄上でしょう？敬語はなしです」

「う。ですが」

「では命令です」

はあ。リア様には敵いません。

「わかり……わかったよ、リトル。これでいいですか？」

「うん。でも、シャスにリトルって呼ばれるのはなんだか新鮮だな」

隣で馬を引きながら俺も同意します。俺が守るのは何時だって”リアナ様”で”竜騎士のリトル”ではありませんからね。リアナ様が王宮でお勤めされている時は、別邸の警護をしておりますし。

「僕には兄上が沢山いますね」

それは哀愁を帯びていて気になったけれど、次に顔を上げたりアナ様はいつもと変わらない穏やかな微笑みを浮かべていらっしやうた。

「では、行きましょうか」

俺から手綱を受け取ったりアナ様が勢いよく鐙を蹴った。

里帰り（後書き）

覚えておいででしょうか？久しぶりのシャックス君登場です。一応彼も普段は皇都にいらんですよ。

里帰り2

例の新薬は解析、生成された後直ぐさま無料で各家に配布されており、見る限りでは病は大分収束されているようだった。領土近くの砦や、人員に余裕のあるところから派遣されている兵士達が農作業を手伝っている光景があちこちで見かけられる。

「兄上から見て、兵士達の働きはどうですか？」

「俺も里帰りしたばかりだからよく判らないな。父上に聞いてみたらいか……どうだ？」

「そうですね。……ここで休憩にしましょうか」

眼前には小さな村が広がり、細い道がずっと続いていた。リアナは無言でその村を見つめている。ほんの少しの懐かしみを込めて。

色づいた葉がくると舞い落ちる。手綱を放した馬たちは思い思いに草を噛み、子供たちが蜻蛉を追いかけていく。長閑な光景だった。馬たちにも水を与えるために、二人は直ぐ傍の村へと立ち寄った。井戸で水を汲んでいると、村人達が親しげに声をかけてくる。

「おや、あんた達旅人かい？」

「いいえ。デイルトンから来ました」

「随分遠くから来たんだねえ。あんた達昼はもう食べたのかい？」

「ずっと駆けてきたので、まだです」

「だったら家で食べていきなよ。お貴族様にゃ、質素かもしれなくてね」

村で唯一の宿屋を経営している女将が自分の家を指す。口を開こうとしたシャックスを制し、リアナは是非と頷いた。

「兵隊さん？ ああ、随分と良くしてくれてるよ。ありや家の息子よりもよっぽど上手いぜ」

「ドラッド砦から来たらしいんだけど……ほんと、一体どこで憶えてきたんだか」

ドラッド砦のくだりでぴくりとリアナ表情が動く。幸いにして隣に腰掛けていたシャツクスだけが気づいたようだ。

「最近では砦で畑も作ってますからね」

「へえ？ 坊主詳しいじゃねえか。あんたも兵隊か？」

「一応は。砦は戦時になれば避難場所にもなっているでしょう？ そのために備蓄とは別に畑を作って栽培するようにしているんです。畑を耕すにも体力が要りますから、基礎体力を上げるにも効率がいいんですよ」

へー、と村人達は感心しているが、シャツクスは確実に隣の人物が推奨したのだろうと確信していた。リアナにとって畑仕事が一番の趣味であり、別邸の庭が野菜で埋められて庭師が嘆いているのを知っているからだ。その並々ならぬ熱意が鍛錬と趣味にどうやら合致したらしい。

外から来るのは珍しいのか、村人達が次々に質問を浴びせリアナやシャツクスが答えていくのを繰り返していると、入り口付近が騒がしくなった。自然と彼等の視線もそちらに向かう。

「あー、腹減ったぜ」

「ミツチエルさん、今日の昼食は何だい？」

ぞろぞろと布を首にかけた男達が入ってきた。農作業をしていたからだろう、上着を適当な席に投げて座っていく男達。

「リトル。あれは……」

振り返れば、リアナが呻くようにして頭を抱えている。よりにもよって、と小さな呟きが耳に入ってくる。

「何だよ？みんなして集まって、珍しいな」

「お疲れさん。丁度ディルトンからの客人が来ててな」

「ディルトン？」

「ばあか。公爵様の住んでるところだって」

やいのやいのと男達が盛り上がる。今の内に出て行った方が良さそうだとシャックスに声をかけて出口に向かっていたのだが、それを防ぐようにして、兵士の一人が二人を座らせる。

「おう、坊主達か。こんなとこまで一体どんなよう……たたた、隊長殿！??」

ざわりと空気が感染し、男達は恐れるようにしてリアナとシャックスから遠ざかる。何事だ、と村人達の視線も集め、宿屋は一気に静まりかえった。

「ほら、貴方達。ミツチエルさんにあまり迷惑を……リトルさん！？」

止めとばかりに今し方入ってきた女性がリアナを見て敬礼する。それに倣って男達も敬礼し。リアナは引きつったままそれに答えた。

緊張の走る宿屋に、リアナの「今は休暇中です」の一言で空気が緩む。途端に騒がしくなる宿屋にリアナは苦笑し、そんなリアナを再び村人達が囲む。

「なんだか落ち着かないですね」

「おい野郎共！隊長から静かにしろとのお達しだ」

再び静まる店内。見知った顔は即座に息を潜め、見知らぬ顔は困惑しながらも先輩に倣っている。

「だから僕は気にしなくていいですよ、エンハス・ドゥーラ曹長」

「は、申し訳ありません、隊長殿！お前ら騒げ」

なぜだかよく判らないが歓声が上がる。もう勝手にしてくれと投げやり気味なリアナを同じ机に座ったマルーカ女史が宥める。

「それにしても、お久しぶりですね。リトルさんの活躍は皆まで聞こえてきますよ」

「そんな。僕は何もしていませんよ」

「ねえ、マルーカさん。このお坊ちゃん是谁なんだい？」

「ああ、この方は最年少竜騎士のリトル・グルテア卿です」

一拍をおいて絶叫が響き渡る。なんて失礼なことをしてしまったのかと村人達は頭を下げ、女達は頬を染めてリアナを見つめている。

「いえいえ、先程も言いましたが僕は休暇中なので楽しんでください。皆さんも頭を上げてください」

「で、でもよお」

「だって、でも、ありません。僕はご覧の通りただの坊主です。ね、兄上」

「そうだな。普通に接してくれると嬉しい」

リトルの兄、と聞いて兵士達が興味深げにこちらを見るが、リアナの有無を言わせぬ笑顔に村人達は頬を染めながらも頷き、兵士達はさっと顔を強ばらせた。

里帰り2（後書き）

このままだらだらと里帰り編を書くべきか、さっさと道筋を戻すべきか。うーん……。

里帰り3

何だかんだで話しているうちに打ち解けてきたのか、砕けた調子で話しているところへ扉が激しい音を立てて開いた。女の息も絶え絶えな様子に女将が水を一杯持つてくる。

「どうしたんだい？ミーフアちゃん」

「あー！竜騎士様がいるって聞いて。それで」

「ああ、旦那のことだね。竜騎士様ならあそこにいるよ」

一気に水を飲み干した女性は足早にリアナに近づくと、目の前で崩折れる。リアナが慌てて助けようと屈み、女性はその腕を力いっぱい掴んだ。咄嗟のことでリアナも膝をつく。

「貴方が竜騎士様？」

「え、ええ」

必死の形相にややたじろぎながらリアナは頷いた。

「フレイ……フレイ・ミュリエルが竜騎士様のところに保護されてるって聞いて……あの人は無事なんですね！？怪我とかしてませんか？」

縫りつくミーフアを見かねてシャックスがミーフアを離そうとする。けれどミーフアは梃でも放すまいとし、リアナはただ呆然としていた。喉がカラカラに乾いて、上手く呼吸ができない。

「……フレイ・ミュリエルは元気にしていますよ。彼らが知らせてくれなければ、もっと病は広がっていたでしょう」

「そうですか。良かった……っ！あの人ったら、お義父さんとお義母さんの様子を見に行ってくるって言ったきり帰って来なくて」

安堵の涙を流すミーファに真実を伝えることはできない。本来ならば山賊を頼った時点で犯罪者として裁かれるのだが、今回は事情が事情だけに事実は伏せられることになっている。なので公式文書として公爵に伝えた、

若者たちは遠く皇都まで病を治せる医者を探しに来了。その際相談を受けた医者が元は城勤めの医者で即座に王宮に連絡を取り、いち早く対策を立てることができた。感染の被害を防ぐために現在若者は竜騎士の元で保護されている。

と説明する。

どうやらそれはまだ聞かされてなかったようで、村人たちもそうだったのかと納得している。フレイの名でつい口にしてしまったが、今更ながらにまずいのではないかという懸念が過ぎる。本来ならば公爵家の人間が真っ先に告げるべき内容をリアナが伝えてしまったのだ。幸いにしてこれまでスフェンネル公爵家は領主として領民たちに敬われているが、何故すぐに公爵家が知らせてくれなかったのかと不満が残るかもしれない。

此処に来るまでリアナはルークーフエルのお陰で短時間で来ることができたが、皇都で準備を整えて更に自らが駆けつけるまでには最低でも半月はかかるだろう。実際公爵が皇都別邸を出発したのはかなり前のことだ。リュージュは指揮を執るために、医師団と出発して行ったがその間に割ける人手は殆ど使っていたはず。そうなれば、

独断専行した若者たちのことなど後回しにされてもおかしくないことだ。

「失敗したな」

「リアナ様？」

眩きを拾ったシャックスが声を潜めて名を呼ぶ。周囲の意識がすっかりミーファに向いているのを二人とも見越してのことだ。

「おーい！ 誰かフィアとヨーテに伝えて来いよ」

「じゃあ、あたしがひとつ走りしてくるよ。二人ともまだ病み上がりなんだろう？ シェイも連れてくるよ」

「す、すみません」

「こういうときはお互い様さね。あんたは良くやってるよ。少しくらい頼ってくれていいんだよ」

「ありがとうございます」

気を利かせた村人の内の一人が走っていく。宿屋の主人が集まった全員に昼食を振る舞い、村人たちも一緒になってフレイの無事を喜ぶ。

「よし。今日はフレイの無事が判った祝いに、あいつの昔話をしてやろう」

「ミーファちゃんを泣かせた罰だ。帰ってきたらおもいきりからかってやろうぜ」

「おう！ それなら俺達も手伝うぜ。こんな別嬪な奥さんを泣かせるなんて男の風上にもおけねえ」

「そりゃ助かる。よし、じゃあまずは……」

小さな村なので、住人全員が顔見知りである。それはつまり、子

供の頃の悪戯や失敗もすべて知られているわけで。それに便乗した兵士達が囃したて、宿屋では笑いの渦が巻き起こった。

「なんだかすごいな」

「そうですね。でもそれが彼らなんです」

シャックスには珍しい光景だろう。そもそもの生活環境が違うのだから。

「彼らにとって、この村全体が家族なんですよ。家族の喜びを全員が分かち合い、そして助けあう。誰もがこうであつたら素敵ですよね」

現実とは違う。妬みや恨みが渦巻き、少しでも優勢に立つために相手の弱点を粗探しする。表面上では笑いながら、背中で刃物を隠すなんて当たり前の世界で生きてきたし、これからも生きていくのだろう。その中でもかけがえの無い人達を見つけてしまった。例えばそれが誰かの為であっても、自らが選んだ世界だ。二度とあそこへ戻ることはない。

「随分遠くなった……」

シャックスは唐突に理解した。笑顔に押し隠されたその悲しみも、そしてここがリアナにとってどんな場所なのかも。

里帰り4（前書き）

遅くなりまして、大変申し訳ありません。

里帰り4

今日はよくよく来客が訪れる日らしい。奇妙に静まり返った宿屋の外から入ってきた人物は、リアナにとって最も近い人であった。簡素な衣服だがよく見れば上質な物で仕立てられており、何より彼が醸し出す空気が一般人とはかけ離れている。気づいたリアナとシヤックスが一番に膝をつき、兵士達もその場で跪く。村人たちも困惑しながらもそれに続いた。

「皆頭を上げてくれ。今日は様子を見に寄っただけだ」

苦笑する男の後ろから現れた帯剣した男が、守るようにして前に出る。

「ここの責任者は誰だ？こちらの若君はリユーグ・ゾア・スフェンネル様であらせられる」

「私が責任者のマルーカ・ウェルチス中佐であります、ウェイザー子爵様」

敬礼するマルーカに視線を向けたリユーグは目を細める。正確にはその隣に控える人物を、だが。当然ながらシェイスも二人の存在に気づいており、主君の意図を組んでひとつ頷く。

「ではマルーカ中佐。こちらで若君の案内を頼みたい。そちらの竜騎士殿とお前も来るように」

兄の冷ややかな視線を浴びてシヤックスは萎縮する。一応リアナもシェイスの弟扱いになるのだが、流石に呼び捨てするには躊躇われたのか。呼ばれるまま三人は大人しく外に出た。

村長とマルーカ女史がリユグに説明している間、三人は距離を開けて護衛していた。遮蔽物もなく遠くまで見通せるので、問題があればすぐに駆けつけられるという判断からだ。

「それでどうしてお前がここにいる？リトル殿も、です」

「俺は護衛で」

「僕は休暇中です」

リアナのことは竜騎士として扱うことに決めたらしい。

「そんな話は聞いておりませんが、いつ頃こちらへ？」

「今朝ですよ。昨晚のうちに皇都を出て」

「つまりドラゴンに乗ってきたと」

「はい」

押し黙ってしまったシェイスに感づかれただろうかと内心ヒヤヒヤだ。これでも竜騎士としている以上、任務に関して口を開く訳にはいかない。恐らくリユグに報告するだろうから、時間の問題だが。公爵家が所有する情報網は侮れない。況して公爵領ならば尚更だ。

「リユグ様に指示を仰ぎましょう。それまでは大人しくしてください」

「僕はまだ用事が」

「リアナ様」

リアナは渋々口を閉じた。休暇中はリトルであってリトルでない。

つまり家長である公爵やその代理であるリュージュに逆らえない立場である。重い溜息を逃しつつ、リアナは足を前に動かした。

暫く黙々と進んでいたリアナだが、見覚えのある道に目を瞬いた。ある時は夕暮れの中を兄と手を繋いで歩き、またある時は父に背負われて。村の中心と繋がるこの道を毎朝往復して水を汲みに行ったこともある。忘れるはずもない。この先には。

「どうして……」

歩みは段々と遅くなり、そして止まる。一家が暮らすには少々大きすぎる家に何度も修繕された跡のある古い納屋。小さな囲いの中には動物たちが放され、思い思いに過ごしている。

「リトル殿もこちらへ」

声が届くには少々困難な距離でも、風が正しくリアナの耳に言葉を届ける。リュージュの真意が読めなくて、戸惑うような途方に暮れたような目でリアナは見つめていた。柔和な面持ちのまま促され、半ば反射的に距離を詰める。

「では村長。私と彼で説明をしてきます」

「若様自らご足労いただいたに本当にすみません」

「こちらこそ、報告が遅くなりました。ミュリエル夫妻や奥方に悪いことをしてしまいました」

話から察するに、どうやら”保護”されている村人の説明をするらしい。もしかすると今日はそのために各地を回っていたのかもしれない。

れない。

「行きましょうか」

「……はい」

村の一軒家にしては仰々しい門を開け、リユーグに続いてリアナもくぐった。二人以外は外で待機のようなうだ。扉を叩こうとしたところでリユーグの裾を引く。

「お義兄様……」

「大丈夫ですよ。それに、私は貴方からご両親を奪いたかったわけではありません」

「知って」

「いるに決まっているでしょう。大切な義妹いもうとの兄君ですから」

ならば最初から知っていたのだ。フレイを”保護”して以来、リアナが沈んでいることも、悩んでいることも。

「貴方は少し考えすぎですよ。二つの家族があつたっていいじゃありませんか。その程度では我が家を揺るがすなど不可能です」

「違います。そうじゃ、ない」

頑是ない子供のようにひたすら首を横に振るリアナにリユーグがそつと両頬を包んだ。それは家族だけに見せる特別な笑顔で、だからこそリアナは逃げられない。

「たまには我儘になってもいいんだよ。それに……少しくらい頼ってくれないと兄としての威厳が立たないだろう？」

リユーグにしては少し乱暴に頭を撫で、扉をノックした。複雑な

思いを抱えながら、リアナは俯いていた顔を上げた。

里帰り5

「はいはい、どちら様だい……って、竜騎士様とそちらは？」

「こちらはリユーグ・シアン・スフェンネル様です。お手数ですがミュリエル夫妻に取り次いでいただけますか？」

「こ、公爵様の？！ た、ただいま呼んできますので、どうぞお上がりを」

粗末な家ですがと言い置いて慌ただしく奥へと走っていく女性。勝手に入ることも躊躇われ、玄関で大人しく待っていると再び女性がヨーテを伴って戻ってきた。記憶にあるよりも窈れた姿に胸が締め付けられる。極力目立たないようにしながらリアナはリユーグの後についていく。居間にある唯一の机にリユーグとヨーテが向かい側に座り、その隣にリアナとフィアが座る。女性はお茶だけ出すと赤子を連れて出て行った。

「お久しぶりにございます、リユーグ様。大層なおもてなしも出来ませんで申し訳ない」

「私の方こそ加減が優れないのに無理に押しかけてしまって。ご子息について改めて説明にきました」

「それをわざわざ伝えに？」

「ええ。あなた方の生活を守るのは我々の役目の筈なのに、気づくことが出来なかった。完全にこちらの失態です。本当に申し訳ない」

原因は思い込みだった。誰もが質の悪い風邪が流行っているくらいにしか認識していなかったのだ。そのため不在を預かっていた家令は例年通りの対策をし、それが発見を遅らせる原因にもなった。

リユーグが頭を下げた。仰天したのは頭を下げられたヨーテとフ

イアの方だ。

「いや、そんな。いち早く救いの手を差し伸べてくださったのは公爵様方です。礼を言うのはこちらの方です。ありがとうございます」

互いが頭を下げ合い、ちっとも話が進まない。仕方がないのでリアナが横から助け船を出す。

「お三方ともそれくらいに」

「そうですね。こちらに來た役目を果たさなければ。……その前に紹介を。こちらがリトル・グルテア卿。我が領地から輩出した竜騎士です。リトル殿、こちらはミュリエル夫妻だ」

夫妻はリアナを見て驚愕に目を開き、穴が開かんばかりに見つめる。居心地悪そうにそれを受け止めたリアナは、本心を隠したまま左手を差し出した。

「初めまして、ミュリエル夫妻。僕はリトル・グルテア。気軽にリトルと呼んでください。今回子爵にご同行させて頂いたのは、お預かりしているフレイ・ミュリエルの様子をお二人に伝えるためです」
「待って！ あなたは……」

「フィア！ 落ち着きなさい。竜騎士様に失礼だろう」

ふらふらと立ち上がったフィアをヨーテが諫める。漸く我に返ったようにフィアは座り直した。視線をリアナから外さないまま。それに気づきながらもリアナは姿勢を崩さないまま、当たり障りのない部分だけを端的に話した。聞き終えたフィアは安堵のあまり涙を流し、ヨーテはそんな妻を支えた。

「ありがとうございます。ありがとうございます……」

何度も口にされる礼に、リアナは微笑んだ。胸が痛い。一刻も早くこの場から立ち去りたかった。リユージュに目配せして立ち上がる。

「私達はこの辺で失礼します」

「待ってください！」

扉へ向かっていたリユージュの後に付いていたリアナは一拍おいて振り返った。リユージュはリアナの肩を軽く叩いて先に行ってしまう。

「……何か？」

「あなた様はもしや……いえ、公爵様のお嬢様と面識はお有りで？」

「存じていますよ。ご家族に囲まれて健やかに過ごしていらっしゃるようです。……では、」

頭を下げて今度こそ出て行くとしたのだが、玄関が騒がしくなり、先程食堂で会った女性、ミーフアが顔を覗かせた。

「ただいま、お義父さん、お義母さん。……あの、竜騎士様もわざわざありがとうございます」

「これも義務ですから。失礼」

リアナにしては珍しく、やんわりと押しのける形で外に出た。

帰りはリユージュや彼の従者達と共にデイルトンの公爵邸に戻る。リユージュとベイルに話せる範囲で事情を説明し、ひとまずは解放された。竜騎士ということで邸内の一部屋を与えられる。そこは来客用なので、リアナの自室からは丁度正反対の位置に当たる。やることはいくらでもあるのだが、今だけは何もしたくなかった。柔らかなベッドが小柄な肢体を受け止める。

灯りもつけず、リアナは俯せのまま枕に顔を埋めていた。誰かが部屋に入ってくることに気づいていたが、リアナはまんじりとしたまま動かない。

衣擦れの音がやけに響き、ベッドの端が沈む。するりと黒髪の鬘が取られ、月の雫のような美しい髪が現れた。侵入者は感触を楽しむように指で掬っては、隙間からはらはらとこぼれ落ちていく。暫くして漸くリアナは顔を上げた。

「お義兄様」

「何です？」

「一緒に……」

微かに届いたその言葉に、リユーグは虚をつかれ、滅多に見せることのない極上の笑みを浮かべて頷いた。髪を撫でる優しさに甘えてしまったリアナは恥じるように目を伏せたが、上から被さってきた重みに情けない声をあげる。

「本当に貴方は馬鹿ですね」

藻掻いていたリアナはぴたりと動きを止めた。暗闇ですら間違ふことのない青紫色の瞳が宿す光に促され、リアナの涙腺が緩んでくる。リユーグの胸に顔を押しつけるようにしてリアナは肩を震わせた。そんな妹をリユーグは黙って抱きしめ続けた。

睨み合い

眼下では今も尚、両者が睨み合いを利かせながら緊張した状態が続いている。それを見下ろし、窓ガラスに映る自分の顔を見て、リアナは拳を握り締めた。

恐れは、ない。

当然だ。嘗てはこの空気に馴染み、淡々と何も感じることもなくただ機械的に腕を振るっていた。己が開いた赤き道に何も思うことはなく、ただそれを当たり前と受け止めていた過去。

それが今は悲しいと思えるなんて不思議だ。

小さな数にしか見えない兵士達にも大切な人がいる。それを壊すのが戦争。

「あまりにも愚かでそして……」

愛おしい。

空気を震わすことなく、リアナの心に消えることない一滴の雫が落ちた。

「異常は？」

「今のところは特に。あちらも出方を窺っているようです」

リアナの視力では、川を挟んだトートス兵士の一人一人の顔が明確に確認出来る。未だ動きを見せることのない川向こうから視線を外し、リアナは振り返った。そこにはマントを翻したジュードが入室してくるところだった。いつ衝突するかも判らないので、その身

体は鎧を纏っている。

「任務、お疲れ様でした。彼等は何時来られそうですか？」

「父上に掛け合ってみたが、主要な馬は全て出払っていてな。隣のシューテン男爵領から届くまでは動けん」

「民が優先されるのは仕方のないことです。ですが男爵の馬なら明後日には公爵領を出発出来るでしょうね」

シューテン男爵領といえば、名馬で有名なところだ。男爵といえば一族全員が無類の馬好きであり、代々皇室に献上する役目を負っている。養子として引き取られて直ぐに送られたリアナの馬もシューテン生まれだ。

「皇都はどうなっている？」

「順調ですよ。そろそろリュシーが来る頃だと……ああ、来ましたね」

急に空が翳った。俄に騒がしくなる砦内にリュージュは一つ息を吐いて屋上へ向かった。ドラゴンといえば帝国を最強と言わしめる象徴であり、それが砦に到着したことで兵士達の志気が一気に上昇する。再び視線を遠くへやったりアナは、動揺する様がつぶさに伝わり、喉の奥で微かに笑った。しかし、即座に顔を引き締めると自身も屋上へ上がる。

そこには今にも踏み潰さんばかりにジュードへ頭を擦りつけるリュシーと、襲れたようなルーク・フェルがいた。二体のドラゴンの間では、疲労困憊の体を浮かべた世話係、リトがへたり込んでいる。道中で様々な遣り取りがあったのだらうと、労いを込めてルーク・フェルの首筋を撫でてやる。

「ご苦労様、ルー。リトもお疲れ様です。到着早々で申し訳ないですが、厩舎の確認をお願い出来ますか？」

「本当にお疲れ様だ。リュシーが煩くって仕方ねえ。……おい、ジュード坊。暫くおめえがリュシーの面倒を見ろよ。ずっと寂しがってたんだぜ」

「すまんな。世話になった」

「ふん。……ま、仕事だしな。それより坊主、お前に手紙だ。ルーは連れてくぜ」

不満げに鳴きながらもルークーフエルは手綱を引かれたリュシーの後に続いて、空を滑空していった。

「竜騎士、だと？」

もたらされた報告書を握り潰し、男は一層醜悪な顔を歪ませた。その怒りを間近に受けた哀れな男は、膝をついたまま身を震わせる。

「巫山戯おって。直ぐに役立たずを処分せよ！判ったら出て行け」

暗がりに消えたのを見計らって、男は手摺に拳を振り下ろした。痛みよりも先に怒りが沸き立つ。

「一体どういうことだ？あやつらは何をしている？」

男が計画したシナリオ通りならば、今頃帝国内は謎の流行病でパニックに陥っているはずで、とても国境に兵士や竜騎士を回す余裕など無いはずだ。だが実際には、さしたる混乱もなく国境での防備に徹している。

「赤城！赤城はどこだ！」

「ここに」

「おお。赤城よ、手の者はまだ残っておろうの？新たにあれを撒き散らすのだ。次は蜥蜴共が邪魔をする前に」

「御意」

深い溜息を押し隠し、赤城と呼ばれた男は暗闇へと消えた。

皇都での一幕(前書き)

リアナがジュード救出に向かい、エーテルメモリデ砦で指揮を執っている間の出来事です。

皇都での一幕

「間違いではないんだな？」

「不幸中の幸いっていうか、あのおっさんが間抜けすぎっていうか」
「あれがなかったら危なかったですね」

ヴァリアスの執務室に集まるのは珍しい顔ぶれだった。部屋の主
に副隊長であるカルル、そして滅多に自室から出てくることのない
クート。そして、書類片手にヴァリアスの前で報告するクレハとそ
の横で妖しげな笑みを浮かべるチェルス。

それは本当に偶然が重なった結果であった。研究の実験とばかり
に誰彼構わず薬物を混入させるマッドサイエンティストとトートス
人を食い物にしようとした男が居合わせたのが運の尽き。子羊の皮
を被った哀れな狼は、被りものを殆ど強制的に剥ぎ取られてしまっ
た。

「確かにお前達のお陰で有益な情報が得られたのは確かだ。だがな、
やるにも限度があるだろう。一般市民にまで被害を押しつけるのは
やめろ」

「だってたいちよく。趣味と実益も兼ねた絶好の機会を逃すなんて
ありえないです」

「あたしはちょっと人肌寂しくなっただけよ。だってあの時は獲物
がいなくて暇だったんだもの」

全く反省の色がない二人の竜騎士に、ヴァリアスは疲れたように
目元を解す。

「最近はお尻を叩いてみたいだけ？」

「それはほら、坊やが相手にしてくれてたんだもの」

「……あいつってそういう趣味だったのか？」

チェルスの性癖を知っているだけにカラルは動揺を隠せない。しかし、本人の名誉の為にヴァリアスが渋々口を開いた。

「ただの模擬戦だ。あいつは武器なしでもいけるからな。リトルが素手でチェルスが武器ありのとんでもない試合だ」

ひくつとカラルが顔を引きつらせる。チェルスの武器といえば、えげつないで有名な恐ろしい物ばかりだ。それを自在に操る腕は素晴らしいのだが、それ以上に精神的に大きなダメージを与える要素が強い。それを素手で受け止めるなど、どんな化け物だとカラルは叫びたかった。

「僕もリトルがなかなか来てくれないから張り合いがなくてさ」。

流石に顔色が悪そうな相手に毒を盛るほど僕は非道じゃないし」

「いや、お前なら絶対に盛るだろ？ 実際この前俺の飯に盛ったよな？！」

「あれは頼まれ事だから。偶には休憩も大切だよ、ふくたいちょ」

「……どこのどいつだ？ 俺直々に根性たたき直してやんよ」

「さる高貴な御方ですけど」

殺る気満々だったカラルだが、その一言で見る間に萎んでいく。ヴァリアスは馬鹿めと一蹴した。

「この二人を相手にするだけ無駄ですよ、隊長」

「そのようだな。時々あいつらと話していると、同じ言葉を話しているのか疑問に思う」

「同感ですが、今はそれどころでは」

「だな。……おい、お前達いい加減にしろ。クレハも今はそれを再起不能にさせるのはやめてくれよ」

こっそりと瓶の中身を近くのカップに混入しようとしていたクレハを諫め、ヴァリアスは大きく手を叩いた。見回して全員の注意を惹いたのを確認する。

「とりあえず危機は事前に回避されたが、次があるかもしれないかな。警戒は怠るなよ」

「了解。あ、殿下。それでゼイスからの報告なんですけど」

世間話序でとばかりに軽く渡されたそれに目を通したヴァリアスの様子が段々険しくなる。

「お前なあ。……もっと早くに提出しやがれー！」

ぐしゃぐしゃに丸められた紙が宙を舞い、カラルの頭にヒットする。

それは新たにロクロの手の者を捕まえたという報告であった。

「お疲れ様です、副隊長」

「あれで一番参ってるのは殿下だからなー」

等間隔に並んだ光に照らされながら、二人の竜騎士は歩いていく。何時になく廊下が静かなのはこの階層の住人達の大半が出払っている為だ。物悲しく感じるのはそのせいだろう。

「先程隊長から受け取られたようですが、一体何だったのですか？」

気づいていたのかとカラルは苦笑する。ポケットにしまい込んでいたそれを開けて見せてやれば、クートは目を丸くした。

「贈り主は」

「よっぽど心配なんだな。リトルのこと」

「ですねえ。相手が男というのが隊長らしいといいますが、リトルなら仕方ないかと思いますが……」

曖昧に言葉を濁すクートにカラルもまた視線を宙に浮かした。カラルはとある事情からリトルの話は聞かされている。それ故に、これに込められた想いがどちらかなのか迷うところなのだが、ヴァリアスの様子を見る限りでは額面通りに受け取っていいものだろう。

「隊長の将来が心配になってきました」

「いや、どう考えても邪な想いはないだろう、流石に」

「貴方と一緒にしないでください。それくらい私にも判っていますよ」

「だよな」

即座に否定が返ってきて、カラルはやや落ち込んだ。それに気づいているのかいないのか、眼鏡のフレームを上げたクートはですが、と続ける。

「隊長には婚約者も見えませんが、私生活でも多少誰かに連れられて遊んではいるようですが恋人もいないようですし……。二人を邪推する人間も多いのではないのでしょうか？」

クートが言いたいのは、あの二人の距離が公私共に近すぎるという点だ。リトルといえば、女顔負けどころか最早人外の域に達している。二人が禁断の関係になったと聞いても違和感がないところが逆に恐ろしい。だが、ヴァリアスは皇弟であり、大貴族として婚姻は義務づけられている。そんな噂が立つのは双方にとってよくないだろう。

「それは否定しない、が、最近は新たな噂が流れてるんだな」
「そうなのですか？」

他人の醜聞に興味のないカラルは目を瞬かせた。

「結構有名な話だぜ。スフェンネル公爵令嬢に殿下と皇太子がお熱だって話は」

因みに出所はリュディアスだったりする。先日のお茶会の一件が使用人達の間でまことしやかに流れ、今では公爵令嬢の名が嵐の目となって吹き荒れている。それもリアナが皇都からいなくなったこのタイミングで。

「ああ、ジュードの妹君ですか。お会いしたことはありませんが、聞く限りでは素晴らしい女性そうですね。私の妻には負けませんが」
「そういうことだ。まあ、だから安心しろよ」

カラルやクート達年長者にとって、上司でもあるヴァリアスは弟や子供のようなもの。その成長を微笑ましく見守っている。比例してからかわれることも多いのだが、全ては彼に注がれる愛故であった。

大人げない攻防

エーテルメモリデ砦の最上階に位置する司令室では竜騎士二人と漸く合流した大吾が集まっていた。ある者は目を閉じ、ある者は手を動かしたまま、独り言を呟いていた。実際には会話が成立しているのだが、この部屋を見れば三人揃って不気味に呟いているようにしか見えない。

「ではカラル副隊長と一緒にこちらへ来るわけですね」
『ああ。……というか既に向かっている』

段々と語尾が尻すぼみになっていくのはこれまでの教育の賜物か、それとも無言を察してなのか。どちらにしろ、そう言う連絡はもっと早く言えといたい。

「いつ頃着く予定ですか？」

『明日の朝には恐らく』

ジュードの疑問にこれ幸いとヴァリアスは答える。

「では予定通りに」

リアナが窓を閉めると同時に扉がノックされた。壁際で腕を組んでいた大吾が扉を開け、兵士は驚きつつも中へ入る。入れ替わりに大吾は出て行った。

「報告します。実は第65番隊が怪しい人物を捕獲したとかでこちらに来ているのですが……」

兵士が困惑するのも無理はない。65番隊といえば数年前の某地

方対抗戦以来、常に首位を争う隊としても有名である。しかし彼等の所属はここから少し離れたドラッド砦。兵士が困惑するのも仕方のないことだった。

「65番隊というとアックス・エディンの管轄だな。確か前の」

「そうです。彼等は派遣軍の一つで今はスフェンネル領に駐屯しているんですよ」

「領内で何かあったのか？」

ジュードの目つきが鋭くなる。

「あの、では彼等を通しても？」

「俺が行く。案内してくれ」

リアナが行こうとするのを押し留め、ジュードが名乗り出た。扉が閉められる直前に向けられた目にリアナは苦笑して見送る。足音が遠ざかっていくのを皮切りに、常に動いていた手を止めて背もたれに身を預けると目頭を指で揉む。

「お見通しでしたか」

それでも隠しているつもりだったのですが……。

どうしてか、義兄達にはリアナの仮面も通用しないらしい。恐らくこのまま仕事をしていれば、早晚監視付で無理矢理寝かされるのは過去の経験から判っている。それもきっちり6時間。リアナの驚異的な身体であればほんの一分だけでも十分休息出来るのだが、いかなせんそれは明らかに人としての常識を外れすぎている。

「折角なので侵入経路の最終確認でもしておきましょう」

表面上は寝て見えてもリアナの思考が休まることはない。横になろうと立ち上がったが数歩のところで足を止めると、仮眠室のある部屋の奥ではなく通路へと通じる扉を開いた。

顔見知りでもあるアックスから事情を聞いたジュードは、呆れともつかぬ様で、足元で気絶している男達を見下ろした。農民を装っているが、その足元に飾る足輪が身元を明かしている。

「こいつら素人か？」

「一応訓練は受けているようですが、身のこなしからして一般人とあまり変わりありません」

「そしてこれか」

ジュードは木炭のようなものを指差した。ようなというのは、その放つ匂いが違う為である。そしてジュードはその匂いに憶えがあった。

「ジュード殿」

「ナナカ殿か。すまないがこれを見てくれないか」

「これは！」

直ぐさま大吾が手にとって調べ始める。長年解毒剤の精製に関わってきた大吾だ、答えを出すのは早かった。

男達を牢屋に運ばせると、それを厳重に封印してからジュードは自らリアナの元に運ぶ。先程の言葉が通じていれば寝ているだろう、可愛い義妹の寝顔を他の男に見せるわけがなかった。

ところが、予想に反してリアナは仮眠室にも、そして執務室にもその姿はなかった。若干焦りを憶えながら、彼女の居そうな場所を手当たり次第に探していく。何時にない様子に、すれ違う兵士達は上官への挨拶も忘れていよいよ開戦なのか！と緊張させているのを知る由もない。

漸く見つけたのは、ドラゴン用の厩舎だった。ルークーフエルが宝物を守るかのようにあどけなく眠る主を腹に抱えている。リュシ―は羨ましそうに時折遠くから視線をやり、世話係であるリトはルークーフエルが大人しいのを幸いと掃除に余念がない。

至福の時を過ごしていたルークーフエルは、無粋な足音が近づいてくることに気づき、億劫そうに片目を開いた。もしルークーフエルの腹にリアナが凭れていなかったら今頃邪魔者は即座に排除されていたことだろう。極力音を立てずに近づこうとするのを、ルークーフエルの長い尻尾が行く手を阻む。右に行こうとすれば薙ぎ払われ、左に行こうとすれば叩き潰さんと迫り。

「……おい」

「フンッ」

これ見よがしに顔を背けるドラゴンに、ジュードも負けじと対抗するが、その守りは鉄壁だった。しかも、起こさないようにとリアナの周囲の音を排除しているのも腹立たしい。

「あんまり刺激してやるなよ、ジュード坊。火傷するぜ」

それは比喩でも冗談でもなく、本当に火柱が上がる。ルークーフ

エルの気性の荒さはウェイアーすらも認めるほどだ。

「リトか。緊急の用件だ。ルークーフエルを何とかしてくれ」
「それはルーに言ってやんな。決めるのはそいつだ」

渋々視線を戻したジュードだが、ルークーフエルの紫色の目を見れば、通す気が全くないのは一目瞭然だ。

どうしたものか。

思案していると、異変に気づいたリアナが目を覚ます。

「ん……？あれ」

即座に魔術に気づいたリアナが気怠げに腕を振っていとも簡単に解除してしまう。何気ない動作が実はかなり高度であるのだが、ジュードは今更驚くことはない。

「どうかなさいましたか？」

「ん？ああ、実はな」

ここへやって来た理由を思い出し、ジュードは手短かに説明する。
じゃれつくルークーフエルをかまいながら、リアナは話を聞いていた。

「……胡散臭い」

あまりにもタイミングが良すぎる。

「リトル？」

「いえ、何でもありません。では、僕は直ぐに知らせを送ります」
「頼む」

違和感に気づきながらも、リアナは追及を避けた。上空を一瞥し、前を行くジュードに呼ばれて駆けていく。

「けけっ。随分と丸くなっちゃったようだな、おい」

「お黙りなさい。お前といると虫酸が走ります」

「俺だって同意だ。どっかの馬鹿がヘマをやらかすから、こっちの存在がばれかけたじゃねーか」

「……神も変わるものだな」

「無視すんなよ、おい」

遙か上空より見下ろす二対は、僅かな羽音を立てて飛び去った。

山越え

鬱蒼と茂る木々が周囲を囲み、時折遠くから聞こえる咆哮が空気を揺るがす。その度にびくつく男達を横目に、リアナは火種に小枝を投げ入れた。ちろちろと炎がそれぞれの影を弄ぶ。

「冷えてきましたね。もう少し火を強くしましょうか」

リアナがそう言うなり、火元へ手を翳す。すると、活力でも入れられたように炎が急に大きくなった。

「ほんっと便利やなあ。どうなってんのか俺にはさっぱり理解できんわ」

不思議そうに理経が炎とリアナの手を交互に見る。その隣で大吾が危ないからあまり火に近づかないで下さいと注意した。

「原理は簡単ですよ。世界の”大いなる意志”に働きかけるだけですから」

魔術に関連する本なら、まず始めにその一文が書かれている。それが全ての理であり、それさえ判ってしまえば後は簡単だ。

「その抽象的な物言いがまず判らんのや。何や、”大いなる意志”って」

「目に見えない世界の大きな流れ、でしょうか。こればかりは感覚ですから」

「同意」

「うおっ！ あんた、ちゃんと喋れるんやないか」

ここ二日ほど行動を共にして、初めて声を発したロードに理経が目を丸くする。それに苦笑しつつ、リアナは炙っていた芋をひっくり返した。

「やはり理解できん」

「すみません、説明が下手くそで」

しゅんと項垂れるリアナにロードが微かに咎めるような視線を大吾に向ける。底知れない黒い瞳に感情が宿っているのを見て、大吾は漸く肩の強ばりを解いた。砦に着いて直ぐに引き合わされたこのロードという男の得体が全く知れず、無意識の内に緊張していたようだ。胡散臭さでいえばその隣に座る黒髪の少年も同じなのだが、接する機会が多いので最近ではその本質が何となくが見えてきている。彼は、命令がある限り裏切らないだろうと。

大吾がぼんやりとそんなことを考えていると、羽音がこちらへ近づいてきた。即座に警戒する青髪の男達の頭上を、さっと黒い影が飛び去る。

「皆さん、落ち着いてください」

無理もない、がいい加減慣れては貰えないだろうか？近くに最強と呼ばれるドラゴンの生息する禁域があるせいか、過敏になりすぎているようだ。緊張が常時高ぶった状態では、疲労の度合いもかなり違ってくる。

「こればかりは本能やからな」

鞘から手を離しながら、理経が苦笑する。全く動じていないのは、

リアナとロードだけで後の全員は耳を澄ませて周囲を窺っているようだ。

「剣で敵う相手ならばそれもまた良いでしょうけれど、貴方達が行っている事は全くの無駄です。これではトートスに着くまで体力が持ちませんよ」

「ドラゴンの加護があるあなた方にはこの恐ろしさが判らないでしょうねえ」

生命の営みを全く感じられない静か過ぎる森。唯一、風が木の葉を揺らす音だけが森であると認識させてくれる。

やれやれと腰を下ろした緑破が食べかけの木の実を囓る。彼を皮切りにして、トートスの面々はそれぞれ緊張を保ちながらも食事に戻った。

「僕達に加護などありませんよ。たかが一匹御した程度で、他のドラゴンに襲われない保証はありません」

「それでも奴等を降しているじゃないですか。ああ、これは僻みではありませんからお間違えなきよう」

「降すという言葉は適切ではありませんが……これ以上は秘密です」
「おや、残念」

バーリアス帝国がこれだけの広大な土地を有しながらも成り立っているのは、この大陸で唯一ドラゴンを御する方法を知っているからだ。いや、御するという言葉方も間違っているだろう、実際は力を借りているだけである。

一匹で一騎当千の働きをするドラゴンを各国は躍起になって手に入れようと、秘密裏に研究しているようだが帝国側からすれば苦笑

するしかない。それはとても簡単なことだったから。

「しかし、本当に気味が悪いな。虫や動物の一匹もいないなど」

それ故、食糧の宝庫でもある。山菜や木の実はいうに及ばず、植物たちにとっては楽園と化していた。

「この森を突っ切れば直ぐにトートスの首都、元正に入ります。頑張りましょう」

「予定では後三日、だったか？」

「そうですね……この調子では先が思いやられますね。裏の手でも使いましょうか？」

「そんなんあるんか？」

「ええ」

その笑みに、大吾は嫌な予感しか浮かばなかった。案の定、それは的中する。

「それでは行きましょうか」

その光景を見れば、誰もが目を疑うだろう。それくらい衝撃的で、大吾など寿命が一気に半分にまですり減ってしまいそうだ。

見渡す限り、ドラゴン、ドラゴン、ドラゴン。

どのような方法でか、朝目覚めてみれば彼等はドラゴンに囲まれていた。飛び起きた大吾は言うに及ばず、これ程近くにいながら誰も起きる様子がないことに愕然とする。それでも守らなければという使命感から、絶望的な気分になりながらも剣を構えていると。

「あ、大吾さん。おはようございます」

ドラゴン達の隙間を縫うようにして、小柄な体躯が眼前に出た。その背にドラゴンを従えるような構図からまさかという思いが芽生える。

「これは一体どういう事だ？」

「昨日お話しした裏の手、ですよ」

「ああ、確か……」

ふ、と昨日の出来事が怒濤に押し寄せてくる。意味深な笑みに、首筋へと当たる軽い何か。次々と倒れていく仲間達。

その手には既に震えなどなかった。あるのは、研ぎ澄まされた殺気のみ。

「やはり、ロクロと繋がっていたのか！」

「貴方達を抹殺する為にわざわざ5万の兵を動かすと思っているのなら、自意識過剰もここに極まれり、ですね」

「貴様！」

「冗談ですよ。それよりも……落ち着いてください」

それはあまりにも自然だった為に大吾の反応が僅かに遅れた。しかし、その一瞬の隙はリアナにとっては十分すぎた。小さな身体からは想像も出来ない強い力が、剣を手首から叩き落とす。落ちた剣を足で跳ね上げて空中で掴んだ手際は鮮やかだった。その圧倒的な力量差に大吾は歯噛みする。

「簡単に説明すると、これからこの子達にトートスまで運んで貰い

ます。その為には気を失っていた方が彼等の為、と判断しました。貴方だけ起きているのは、目が覚めた彼等に説明して貰うためです。目を覚ましたら突然別の場所に移動していた、なんて驚くでしょうから」

手の中で弄んでいた剣をリアナは大吾に差し出した。疑心暗鬼に陥りながらも大吾はそれを受け取る。

「……なぜそれを先に説明しなかった？」

「面ど……予想以上に動きが早くなりましたので」

絶対に今、面倒とか言いそうになっただろう！というのを無理矢理抑えつつも、溜息を禁じ得ない。

「というと？」

「ロクロが王位についた際に追い出された官吏達は馬鹿ではなかった、ということですよ」

バーリアスの手の者が市井に広げた噂は最初こそ馬鹿馬鹿しいの一笑に付されていたが、それに賛同する者達が増えてきたのだ。それには知識階層が関わっていることまで判っている。

「接触するつもりはありませんが、ロクロに対する疑念が高まってきている……この機会を逃す手はありません」

言っていることは理路整然とし、反対する理由がない。が、予めそういうことは相談してくれないだろうか？いくら、手を借りているとはいえ主導権を渡すわけにはいかなかった。

「事前に説明してくれと以前に告げたはずだが？」

「あなた方の話し合いでは出発が何時になるやら……。今求められるのは速さです」

トートス人は民族柄、何かを決める際には全員でという風潮がある。つまり、誰か一人でも反対すれば話がまとまらないのだ。勿論、国家体制としてそれでは成り立たないので、ある程度の代表は選ばれるが、それすらも他国に比べれば雲泥の差がある。国民の意思をより反映させる点では良いのだろうが、その分決定が遅くなる難点もある。

民族の違いをいえばきりが無い。剣を鞘に戻すと、大吾はリアナに指示を仰いだ。

首都潜入1（前書き）

長らくお待たせいたしました。いつもよりやや多めとなっています。

首都潜入1

民家のある一歩手前に降ろされた一行は、目が覚めるなり眼下に広がる城下の景色に首を傾げ、そして事の次第を聞くにつれ盛大に顔が引きつっていった。信じがたい話だろうが、その一部始終を見届けた大吾の顔色が真っ青になっているのを見て、何となく事実だと確信する。改めて竜騎士の非常識さを認識したのだった。

その竜騎士であるが、今この場に居るのはリアナだけだった。ロードは潜伏中の仲間達と合流するために一足先に城下へと向かった。未だ興奮冷めやらぬトートスの軍人達を尻目に、リアナは手際よく朝食の準備をしていた。

「ほんまあんたらには驚かされっぱなしやな」

「こちらとしても予想外でした。お陰で二日分の行程を縮めることが出来ましたが……」

他国のドラゴンに対する畏怖の感情を見誤っていた。帝国の人間からすれば、ドラゴンの住む禁域は神聖な場所であるが、余所から見れば恐怖の象徴でしかないのだろう。

「今日中には山を下りるんか？」

「そのつもりです。今はロードさんの連絡を待っていますが、誰かが妨害しているようで雑音が酷い」

その眼は掻き混ぜている鍋を見ているようで見ていなかった。それでも淀みない手つきは絶え間なく動いている。ふと気づいてリアナは理経にも聞こえるようにしてやった。

『……っている。合……たが……』

途中でぷつんと切れた。さざめくように、風がつむじ風を巻き起こす。

「ええ、ありがとうございます。またお願いしますね。……どうやら術の中心人物は城にいるようです」

「今のでわかったんか？」

「この世界は僕に好意的ですから」

「それはどういう」

「朝食の準備が出来ました。すみませんが呼んできて貰えますか？」

それ以上は詮索されたくないのだと悟り、理経は諦めて部下達に声をかけに行った。

「世界……」

何かに引っかかりを憶えてリアナは掻き回していた手を止めた。しかしそれが何かを手繰り寄せる前に、細い糸は途中で切れてしまう。時折探るような動きを感じては、紛れるようにして掻き消されてしまう。世界がそれを守るように。

これ以上考える前にやる必要があると思いを切り替えて、リアナは続々とやってくるトートスの兵士達のために鍋を火から下ろした。

「これは……」

軽やかに撫でる感触を感じて、赤城は歩みを止めた。謁見の間へと繋がるこの白い廊下には彼以外誰もいない。己の張ったものから微細な隙間が開き、赤城はそれを防ごうとするも相手が優秀なのか、

速度は驚くほど遅い。こちらから探ろうとすれば強固な拒絶が返ってくる。その繊細な制御もだが、同じ魔術師としてとても興味惹かれる相手だった。

常人には見ることの出来ないであろう、短い攻防は古くからこの地に根付いた赤城に軍配が上がったが、侵入者、それも内ではなく外にいる相手は相当手強い。

何者か。

真っ先に思い浮かぶのは故郷の同胞達。しかし、これ程の腕前を持つ相手となれば名の知れた者である可能性が高く、また彼等がトートスに干渉することはないはずだ。だとすれば。

「帝国ですね」

だが、と思案する。彼の記憶ではあそこの魔術師達は、赤城の故郷である北の魔術大国ロスティークとは魔術の系統が違うはずだ。悪くいえば大雑把、良く言えば実用に特化しており、こうした魔術を扱う術者になると限られてくる。

「面白い」

魔術師としての本能が疼く。

数刻後。

もたらされた知らせと共に、彼は機会を得ることになる。

まさかこの中央山脈を踏破して侵入するとは思わないのだろう、

それそのものが自然の砦であるためか見張りなど無きに等しい。あっさりと首都元正に侵入を果たしたリアナ達は、既に用意されていた隠れ家へと移っていた。大多数が出入りするのはあまりにも怪しすぎるのだろうが、商家であれば不思議なことではない。帝国と戦時状態であろうとも、他大陸との貿易は行われているからだ。

因みにこの商家は、帝国の皇都にあったあの酒場と同じく竜騎士の手の者が商いをしている。勿論これだけの大きな商家として成長するために長い歴史を持ち、今ではトートスでも指折りの名家として名を馳せている。

その商家の奥へとリアナは招かれていた。勿論他国である大吾や理経達にこの事を教えるのは良くないので一旦別行動をしており、こことはまた別に潜伏先を用意している。

出されたお茶を飲んでみると、程なくしてロードが少々身体の肥えた男を伴ってやってきた。ここの店主である依土に違いない、

「これはまた麗しいお客様ですね、隊長。是非肖像画を書かせて頂きたい。きっと高く売れるでしょう」

男のかけた眼鏡がきらりと光る。値踏みするような視線にも気にすることなくリアナは初めまして、と拳を前に出した。男も同様にして拳を出すと、リアナの拳と軽く合わせる。トートス風の挨拶だった。

「時間があれば構いませんよ。僕はリトル・グルテア。『いえ、今は莉里でしょうか』」

「『これは申し遅れました、ここの店主をしております依土と申します。ここは人払いをしていますから、共通語（リエス語）で構い

ませんよ』」

当然ながら、国が違えば言語も違う。しかしこの大陸には共通語リエスというものがあり、どこの国でも知識階層であれば大抵は話せるだろう。元々帝国ではリエス語が使われているので問題はない。

「では、お言葉に甘えて。……ロードさん？」

物言いたげな視線が気になって、リアナは依土の隣へと視線を移した。

小麦色の肌にくすんだ青色の髪、腕を剥き出しにした独特の衣装に身を包んだリアナを見れば、知る者ならば誰もが目を疑うだろう。ロードの部下によって施された化粧によってリアナは変貌を遂げていた。身分を示すためにわざと付けている耳飾りだけが、リアナであることを証明している。

「上々」

何のことだか判らずに首を傾げるも、己の恰好を見下ろしてこれか、と気づく。

「私も舌を巻く腕前でしたよ。なぜかこの衣装がぴったりでしかも女物なのかは敢えて聞きませんけれど」

「お察しの通りかと」

見た目との差が激しすぎる某竜騎士が腕を振るったに違いない。彼の人物とも面識があるのか、依土は苦笑しながら答えた。

「丁度二日前でしょうか。事前に送られていた荷物の中から衣装一式がございまして、疑問に思いましたが、貴方を見てぴんと来まし

たよ。貴方なら似合う、とね」

「はあ……」

何とも曖昧な返事になってしまうのはどうか許してほしい。後々この時描かれた肖像画が売りに出され、某公爵や某皇太子を筆頭とした者達によって、目を剥くような金額が動くことになる。

首都潜入1（後書き）

二重括弧はトートス語って事をお願いします。

首都潜入2（前書き）

『内の会話はトリトス語（トートスで使われている言語のこと）です。

首都潜入2

特有の合図で扉を叩けば、内側から大吾が顔を出す。一瞬驚きに目を見開かれたが、リアナの耳に揺れるもので悟ったようだ。促されて中に入る。手近な机に持ってきた食糧を置くと、そのまま衣装棚へと向かう。壁からは何十もの突起が飛び出ており、その一つ一つに服が引っかけられている。その内の一つを押して右に捻れば、衣装棚の側面が横へとずれた。まるで井戸のように下がぽっかり空いている。

「暗いから気をつけてくれ」

長い裾を踏まないようにしながら慎重に縄ばしごを降りていく。間もなく地面に足をつけたリアナだが、真っ暗で何も見えない。床の感触がなければ夢の中にでも紛れ込んだような錯覚がしただろう。とはいえ難なく闇をも見通す目は壁の位置までしっかり把握していたが。

背後でとん、と床を叩く音が狭い空間内に響く。

「どうぞ」

「すまん」

大吾が灯りを付けようとする前に、リアナが拳大の炎を手の平に出す。その光源を頼りにして、大吾が背伸びして壁の小さな石を押した。すると頭上の高さほどに人一人分くらいの狭い入り口が壁に作られる。成る程、足元に気を取られていれば気づかない。中からは僅かな光が零れている。今度ははしごを少し登って、リアナはその入り口を通った。

「ただいま戻りました」

「おう、えらい遅かったな、……ってなんやそれー！」

隠れ家の地下へとやって来たリアナを出迎えたのは、理経の絶叫だった。扉は隠されているが防音はされていないので、外まで丸聞こえである。何事かと衣装棚の入り口を守っていた兵士が血相を変えて下を覗き込む。顔を出した大吾が何でもない、と声を張り上げていた。

「あんたリトル、だよな？こらまた上手く化けたなー」

顎の下に手を当てて、忙しなく視線が上下する。それに気にするでもなく、リアナは近場の椅子に座る。しゃらりと幾重にも付けられた腕輪が鳴った。

「なんだってまた女装なんてしているんだ？」

「念には念を入れてといえますか、仲間の趣味ともいえますか……」
「災難だな」

以前に同じく女装をさせられた大吾は何となく悟ったようで、同情するようにリアナの肩を叩いた。理経はそんな二人を不思議そうに見ていたが、入り込んではいけないうるものを感じてそっと視線を外す。

苦笑で応えていたリアナだが、机の上に置かれた青いペンダントへと興味を示す。それに気づいたかのように、理経が今し方王宮内部の者と連絡が取れたと告げた。

「ああ、やはり。その方は魔術師ですね」

「そうやけど……なんでわかったん？」

「道中理経様から感じた微かな魔力と結界を張っていた魔力が似ているように感じられたので」

「そういうもんか」

「はい」

これ以上聞いても理解出来ないと思ったのか、理経はペンダントに向かって囁いた。それを見るときもなくぼんやりしていたリアナだが、唐突に悟ってしまった。

「……成る程」

「ん？ どないした？」

「いえ…お願いします」

リアナの想像する人物であるなら、相当な大物が絡んでいる。だとすれば彼等を信用しても良いのか。既に敵方の掌中にあるのではないかと懸念される。黒だと判断されたその時には……。

理経が何事かを囁けば、するとペンダントが淡く光り小さな人影が映し出される。その人影は理経に一礼し、リアナの方へと向いた。

『初めまして竜騎士殿。私は赤城と申し……？ 失礼、理経様の想い人様でしたか』

『飛躍しすぎだ、赤城！ どこをどう見たらそうなる』

『いえ、昔理経様の仰られた理想の女性像とそっくりでしたので』

『いつの話だ！』

『あれはそう、確か殿下のあれが立派に…』

『それ以上は言うな！』

どうやら幼少のみぎりから理経を知っているようだ。赤城といえば記憶にある限り、ゴウトの側近で知られる男。まさかとは思った

が、予想通りである。この男が内通者ならば、一体何を考えている？

表面上は笑顔を貼り付けたままのまま、リアナは名乗ることにした。

『このような格好で失礼します、赤城殿。バーリアス竜騎士団所属、リトルと申します』

『では貴方が……男？』

心なしかがっかりしているように見えるのは気のせいかな。

『そろそろその話題から離れろよ、赤城。それから、その理想像を植えつけたのはお前なんだからな！』

理経と赤城の遣り取りはいつものことなのか、大吾は静観の構えを見せている。これでは全く話が進まない。リアナは小さく咳払いしてこちらに注意を向けた。

『失礼しました、グルテア卿。殿下に代わって謝罪いたします』
『お気になさらず。それよりも何か私に用件があったのでは？』

一旦は別行動にした両者だが、間もなくして理経から連絡があったのだ。リアナがここにいるのは、彼等に呼ばれたからである。

『そうだった。坊主にも聞いてもらおうと思ってな』

赤城からもたらされたのは、ゴウトの動向とそして彼等が欲していた研究所の在処だった。

首都潜入2（後書き）

普段理経が鈍っているのは共通語（リエス語）の訛ってことですね。……あれ、じゃあ大吾とかもそうじゃん。と今更ながらに気づいたアホな作者でした。

首都潜入3（前書き）

今回は短いです。

首都潜入3

「改めましてご挨拶を。こちらは貴方にだけ聞こえています」

脳裏に赤城の声が直接響く。理経や大吾もこの場にいるのだが、彼等は映像の赤城と遣り取りをして注意を払う様子はない。リアナは了承の代わりに、映像へと瞼を軽く伏せた。

「ありがとうございます。殿下方の前では聞きにくいこともあるでしょう？」

「聞いたところで、その言葉を鵜呑みにするだけでも？」

初対面の相手を信用しろというのが間違っている。それが特に対峙している側の懐刀とあっては尚更。

「確かに。…ですが、取引とあれば話は違うでしょう？」

「なにを材料にするつもりですか？」

リアナが今この場にいないのは決して善意ではない。当然だ、何の益もなく国が手を貸すはずがない。先行投資とでも言おうか、成功した暁には関税の値下げや貿易港の優先権などの利権をヴァーリアスに渡すことが秘密裏に結ばれている。失敗した時点でリアナ達の任務はゴウトや上層部の暗殺に切り替わる手筈になっている。その時犯人に仕立て上げられるのは理経であることも。これに関しては特命で、勿論理経達には知らされていない内容である。

「この私自身を。生け贄が必要でしょうか？それならば私は恰好の人材になり得る」

「別に貴方の同意をいただかなくても、捕らえるのは簡単です。そ

れに貴方は表舞台に出ていない以上、その役割は適切ではありません
ん」

ヴァーリアスへの禍根を残さないためにも民衆には目に見える形
で”悪”を示してやる必要がある。今回その役目はゴウトで十分で
あり、赤城は必要ない。尤も見逃す気もさらさら無かったが。

「ならば作るだけです。この取引に同意していただけない場合は、
国境での戦闘が始まるでしょうね。兵力差など一目瞭然ですが」
「最低ですね」

何も知らない兵士達の命を溝に捨てるというのだ、この男は。

「どうしても仰ってください。私にとってはそれ程重要なですよ」

表には出さないが、内心では怒りが沸点に達していた。このまま
王宮まで転移して、この男の首を取るのも吝かではない。他者の命
を平気で踏みにじる者など、国を動かすに値しない。

「……要求は？」

返答によつては自身が手を汚す覚悟を決める。

「理経様の命の保証を。もしもの時には私の命を代償にしてくださ
い」

「……なぜそれを私に？」

「最悪の場合を考えただけのことです」

確かに少し考えれば思いつくだろう。無意識の内に入っていた肩
の力をリアナはふっと抜いた。なぜここまでするのかという疑問は

あるが、先程の二人の遣り取りを見ていればかなり近しいことが判る。やり方は気に入らないが、取引内容に関しては悪くはない。

「いいでしょう。但し、貴方が裏切った場合は」

「構いませんよ。その時にはどのみち私の命も尽きるでしょうから。……あれがある限り」

リアナは卓上に乗ったペンダントによく目を凝らし、納得した。

恐らく理経や大吾はあれの正体を知らないのだろう。この世に二つと無いだろう、あのペンダントの意味を。それを赤城がリアナに教えたのは……。

「酔狂な人ですね、貴方は」

「それ程でもありませんよ。では互いの成功を祈って」

ふわりとリアナの襟足を風が揺らしていった。

それはまだ空が藍色に染まり、寝静まる深夜の出来事だった。突如、首都の南側で眩く光が迸る。幸いだったのは戦時中ということもあり、人々の目に映らなかったことだろう。ひっそりと、大胆に行われたそれを知る者はいない。

夜陰に乗じて堂々と首都を駆け抜ける集団があった。一応警邏もいるはずなのだが、彼らが気づくことはない。いや、気付いたとしてもそれは複数の足音が聞こえるだけで、亡霊の仕業だと震える者こそいれど、姿を見たものは誰もいなかった。

与り知らぬところで怪奇現象を起こした集団は、元正の南、住宅街からかなり離れた寂れた屋敷の前で動きを止めた。一番手を走っ

ていた影が手を上げれば、後方に控えていた者達が無駄のない動きで活動を開始する。割れた人垣を小柄な体が歩いていく。何気ない動作でその手が振られるのと同時に、派手な爆音が響いた。ところが、木々で寝ているはずの鳥や虫たちはそのまま睡眠を貪っている。周囲に一切変化がないことを確かめて、彼らはその屋敷へ突入していった。

首都潜入4

何事もなく人々が活動を始める時間。朝といえど、じりじりと太陽が肌を照りつける。開店前に少しでも居心地を良くしようと遣り水をするために外へと出た店主は、道のだ真ん中で倒れている子供達を目にして度肝を抜かれた。

『お、おい！』

手に持っていた柄杓を投げ出し、慌てて駆け寄る。子供の身体は貧民街の子供よりも更に痩せ細り、まるで枯れ木のようなだった。褐色の肌には鬱血の跡が多く見られ、呼吸も浅い。

『しっかりしろ！おい』

まだ寝ている者も少ない時間帯に、通りで騒げば人も集まってくる。寝ぼけ眼を擦る者や準備の途中なのか包丁を手にした者が何事かと窓から顔を出す。彼等は外の光景にぎよつとした表情を浮かべ、次いで適当に服を引っ提げて外に出てくる。

『誰か！誰か医者を呼んでくれ』

見に来ていた内の一人が近くの病院に駆けていく。

『おい！連れて行った方が早い。行くぞ！』

店主が両腕で持ち上げた子供は驚くほどに軽かった。か細い命を消すまいと、力のある男達が店主の後を追って次々に子供を抱え城下を走る。

当然ながらその騒ぎは憲兵達の知るところとなり、この奇妙な出来事はその日の内に波紋を広げていく。そして一部の者達にとっては狼煙の合図でもあった。

「今のところ第一段階は順調のようです」

とん、と武人にしては傷一つ無い繊細な指が机を叩く。微動だになかった男達は詰めていた息を大きく吐いた。その拍子に唯一の光源である蝋燭の炎が壁に伸びた影を揺らめかせる。

「憲兵隊の第二分隊が動き出しました。接触は？」

「あそこの病院に勤めとる医者は信頼出来る。そいつ黄那言うんやけど、あいつならきつと気づくやろうさ。しかも篠目の友人」

「ササメ……ああ、憲兵隊の隊長でしたか」

「憲兵隊を率いているのが、俺達の知る篠目ならば味方だ」

「そういや、しょっちゅう王宮を抜け出してはあいつに捕まっとったな」

「あの者は裏道すらも熟知してますから、理経様の逃げる先々に先回りしてましたね。お陰でこちらは助かりましたが」

脱線していく主従二人を咳払いで黙らせると、リアナは接触は？ともう一度聞いた。

「古参の部下の一人が、詰め所を見張っている。篠目殿も知っているだろうから今日中には出来るはずだ。そっちは？」

「今のところ問題はありません。屋敷にいた研究者達は、今頃楽しい夢でも見ていることでしょうね」

クレハが用意した薬は強力な催眠効果のある薬で、持続性はかなり高い。実験に使われていた子供たちが入れられていた檻の中で、研究者達は楽しい夢の中だ。難点は幻覚のせいで生理的欲求に素直なところだろう。排泄物が垂れ流しで元から悪かった衛生状態は更に悪くなっている。薬が切れた時は悲惨だろうなと、その薬の実験をした時を思い出しリアナは遠い目をする。あの時は確か急遽お襦袢を穿かせたのだった。その間の一部始終を記録された哀れな被検体達は、黒歴史として今尚心に大きな傷を負っている。尤も、また新たな実験のお陰でその歴史はどんどん積み重なっていくのだが。こうして竜騎士補佐という哀れなエリート達は日夜精神の研鑽を積んでいる。お陰で多少のことで動じない精神は手に入るが、果たしてそれで良いのだろうか？　しかし、意外にも廃人になるのは殆どいない。代わりに入隊時の試験でほぼ全員が落ちることを考えれば適正のある人間しか居ないということなのだろう。落第した者の殆どが一年間は精神科医の世話になると聞く。

（彼等の精神構造についてはまた今度考えるところとして）

「ん？　なんか言ったか？」

「いいえ。それよりも、城の警備の方はどうですか？」

「協力者がいるにはいるんだがな……」

何とも歯切れの悪い返事である。あまり芳しくないことが判り、リアナは溜息を押し隠せない。

「兎に角、そちらを早く準備してください。既に下準備は終わっているのですから」

「ああ」

この緊張感のなさはなんなのだろう。リアナは肩を落とした。

首都潜入4（後書き）

自分でも段々クオリティーが下がってきている気がします。やっぱり突貫工事は駄目ですね。時間に余裕が出来たら手直ししたいと思います。

水面下の動き（前書き）

ほんとうに、大変長らくお待たせ致しました！

水面下の動き

下町の住人よって運ばれた子供達を見た黄那は、当然ながらひどく驚いた。彼は元、侍医と呼ばれる立場にあり、嘗て病弱とされていた第七王子の担当医であった。謎の奇病を解明出来ず、王族の命を守れなかったとして、早々に王宮から閉め出されたのだ。元より国王からは非にと請われて王宮へと伺候した身、根っからの医者である彼はこれ幸いと下町に戻ってきたのである。しかし、彼が追い出されたのは、もう一つ理由があった。

『王子の病に酷似している』

一通り診断した彼は、難しい顔で子供達を見下ろした。そう、彼はあまりにも優秀すぎたのだ。王子が病弱なのではなく何か人為的なものよると見抜き、更には犯人が誰であるかも知っていた。当然ながら彼は直ぐさま上司に訴えた。ところが結果は、今の彼の状態を見れば一目瞭然だろう。

『まさか自力で逃げてきた訳でもあるまい。となれば罠か……』

だったら何のために？

こうして一人考えたところで、お世辞にも世渡りが良いとは言えない彼には分かるはずもなかった。彼は医者だ、毎日人助けするところが彼の生き甲斐であり、その範囲外にはほとんど疎いのである。実際、当時の自分が殺されずに済んだのも疑問を持っていた一部の人間達による手引きのお陰で、そうでなければ今この場にはいないだろう。と、友人に言われて初めて知ったくらいだ。それ程に興味が薄かった。いや、周りを見ていなかった。

それを痛感して以来、多少は外の情勢にも興味を持つようになった黄那だが、やはりこうした状況ではどう動くべきなのかが分からない。

からんと、乾いた音を立てて扉が開かれる。

朝から患者の多いことだ。

億劫そうに立ち上がった黄那は、入り込んでくる太陽の光に眩しげに目を細めていたが、その人物を認めるなり目を大きく開いた。

『事情は判った。だが、俺にも民の安全を守る役目があったな。簡単には動けんぞ』

憲兵隊でも最上位の者に与えられる徽章を胸に付けた男は、ふんぞり返ったまま答える。対する理経といえば、害した様子もなく、寧ろ満足げに頷いて見せた。

『だからあんたに頼みたい。いざという時、守れるようにな』

『あの鼻垂れ坊主が言うじゃないか。俺を利用するってか』

『利害の一致、の間違いだろう？根本は同じだ』

『少し違うな。俺たちにとっちゃ国のトップなんざ誰でも構わん。日々の生活が保証されればな』

『戦になればそんな悠長な事言ってられるか？あんたも国境沿いの進軍については知ってるはずだ。本当に勝てると思っているなら俺は今、この場であんたを排除するぜ』

『やるか？』

一触即発の緊張した空気が流れる。炎に惹かれてやって来た虫がじじ、と音を上げて身体を灰にしながら落ちていく。哀れな屍がまた一つ増えた。それを合図にして、双方は腰に伸びた手を離れた。室内の隅で見守っていたリアナは、交渉成立と見て取ると、自らの存在を証明するかのように暗がりから一步踏み出す。

『そろそろ宜しいですか？』

『ん？ああ、悪いな』

リアナが気配を断っていたことに若干の警戒を滲ませながらも、篠目は人好きのする顔で小指を立てて見せた。

『別嬪な嬢ちゃんだなあ。坊主のコレか？』

『違う。彼女はただの協力者だ』

『協力者あ？』

疑わしそうな目で見る篠目に、リアナは笑顔で言及を避けた。ただでさえ時間が押しているのに、これ以上のタイムロスは勘弁したい。どうせリアナ達、ヴァーリアス帝国側のいないところで彼等も独自に話し合いを設けているはずだ。彼らの存在を明かすか明かさないかは、理経次第である。

『ひとまずは篠目殿、昨日早朝に起きたことは既に黄那殿から聞き及びですね？』

『ああ、まあな。……って、あれも坊主の差し金か！？黄那とも既に接触済みってわけか』

『先生の協力無しには計画が成功しないからな』

『……あいつ馬鹿だからちゃんと守ってやれよ。じゃないと、俺は坊主に協力する気はない』

意外な組み合わせであるが、黄那と篠目は幼少時からの付き合いで職は違えど彼等は親友である。王宮に上がると言う黄那に真っ先に反対したのも篠目だった。彼には黄那の自身や周囲に対する無頓着ぶりを知っていたのだ。そして彼の危惧した事態は起こり、黄那は命からがら逃げ出した。

『安心しろ。先生には護衛がついてるし、それに……』

彼等が用意した隠れ家の一つで、嬉々として解明に取り組んでいる黄那を思い出し、遠い目になる。情報交換をしているうちにヴァーリアスの竜騎士の一人と意気投合し、着実にマッドサイエンティストならぬマッドドクターへの道を歩みつつあるとは言えない。

言葉を濁したことで剣呑とした視線を向ける篠目に、楽しそうだった、と一言添えてそれ以上は口にするとはなかった。

水面下の動き（後書き）

言い訳は色々と活動報告で言わせて貰います。

ただ、今後の更新も不定期になるかと思っています。未だにお気に入りして下さっている方、見捨ててなくてありがとうございます。

何とか最後まで書き上げたいと思いますので、今後ともよろしくお願ひ致します。

反撃の狼煙（前書き）

お待たせしました！

反撃の狼煙

最初に火の手が上がったのは一番鶏が鳴く頃だった。憲兵隊によって事前に知らされていたためか、住人たちは祭りの始まりだと眠い目を擦りながらベッドを飛び出す。

陽気な音楽が流れてくる。それに釣られてやって来たのは、この国一番の権力者、ゴウトの邸だった。普段堅牢に閉ざされた塀は開け放たれ、色鮮やかな飾り付けが集まった人々の目を楽しませる。

「さあさあ。紳士淑女の皆様。早朝よりの来訪、心より御礼申し上げます」

邸の扉から顔を出したのはひょうきんな仮面を被った道化。優雅な仕草の割には足取りがおぼつかず、それが人々の笑いを誘う。

「これから私どもが供するのは、可哀相な王子の物語。ほら、助けを求める声が聞こえますでしょう？」

耳を澄ませる道化に倣って人々は耳を傾ける。風に乗って微かに届く呻き声に子供達は唾を呑んだ。半分開いた扉がいきなり開け放たれて強い風が吹きつける。突然のことに驚き、叫び声が上がったが道化が手を叩けば突如として止んだ。

「おや、何者かが妨害しているようですね。ですがご安心を。……これも演出ですから」

ここだけの秘密ですよ？

立てた人差し指を唇に当てる道化の言葉に安堵が広がる。

「そう、王子は囚われているのです。この邸の何処かに！これから話すことを聞いて助けに行くかどうかは皆様次第。調度品目当ての入場はご遠慮くださいね」

怒声と野次が上がった。

「では、始めましょう！真実の物語を」

道化が一礼し拍手が起こる。ここに邸まるごと一つを使った舞台が幕を上げた。

「始まりましたか」

邸の一角、一際豪華な一室でリアナは待機していた。扉はなく、窓があるだけのその部屋には死屍累々とは言わないが、老若男女が猿轡を噛まされて転がっている。苦悶に満ちているのは、悪夢でも見ているからだろうか。リアナの興味は既に外へと向いている。

彼らが、ゴウトの所有するこの邸を襲撃したのは昨夕のことだ。

事前に流した“祭り”の噂のお陰で警備体制は常より厳しかったが、空への警戒は無きに等しかったためドラゴンと魔術の使えるバーリアス軍人にとって邸に侵入する事は容易い。周辺に気づかれず（警備上で人払いしたのが逆に仇になった）あっさりと制圧を果たした彼らが次にはじめたのは、舞台の準備である。何故かこういったことに長けているロードの部下達が数時間で作り上げた集大成。魔術制御には定評のあるリアナも当然ながら夜通し駆け回され、現在は

見張りも兼ねて、強制的に眠らされている兵士や侍女たちと一室に閉じ籠っているのだった。これだけの人数になると見張りの人出も複数必要になるが数が足りない。ならばと白羽の矢が立ったのがリアナであり、こうしている間にも邸に仕掛けられた魔術を同時に操っていた。更には赤城の許可を得て城内の様子も探っており、逐一知らせを受け取っていたリアナはその光景に吹き出さないようにするのが精一杯だ。

「さて：仕上げと参りましょう」

繊細な指が空に揺らめく。複雑な模様が鮮やかに光り、映像に変化が顕れる。具体的にはそれまで壁と同化していた扉に微かな隙間が開いたのだ。その部屋は本来ここにはなかったもの。先日襲撃した例の屋敷にあった研究資料や道具などを全てそのまま持って来て、元あった地下を改造してそれらしくしたものである。流石に自分の邸に証拠を置いておくような馬鹿はいない。……いない筈だが。

「出てくるのは不正の証拠ばかりというのも、笑えます。重要なもの程手元に置きたい気持ちはわかりますが」

そもそも隠滅くらいすればいいのに。

リアナは国民が目を剥くような数字の羅列が書かれた紙束を手には苦笑する。それはゴウトの着服した金とその使い道に関してだった。こうして残されているのは、本人が間抜けなのも理由の一つなのだが、それが正式な証書だからだ。複数の別荘地の権利書から、中にはこの大陸では禁止されている奴隷の所有権まである。

「随分と悪質な魔術だ」

証書に掛けられた魔術が奴隷を縛っているらしく、本来は所有物を管理するために作られたものが悪用されたようだ。事が終われば即座に処分しようと心に決めて、袋に仕舞う。明らかにした事実、怒りへと変貌していく人々を見ながら、リアナはこれから先を予想して口の端を上げた。

「何だこれは？」

ざわつく中で声を上げたのは中年の男。彼は当時の官僚の一人で、闇に葬られようとしたところを間一髪逃げ果せた者の一人だ。こちら側の人間である彼の役目は引き金を引くこと。

観客達も既に舞台の役者であることに気づくことなく、用意された脚本通りに話が動いていく。

膨大な資料にあるのは、表沙汰には決して出来ない実験の数々。知識層にある者達が読めない者達に代わって、書かれた内容を口早に紡ぐ。

「これこそが真実……」

石階段を響かせて降りて来るのは仮面を被った道化。その身に宿る風格に人々は無意識に後ずさる。後ろの紐を解けば素顔が露わになった。

固唾を呑む中、あっと小さな声が上がる。

誰よりも鮮やかな青の髪に青の瞳。海の祝福を受ける王族の姿が

そこにはあった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8709/>

天と地と

2011年12月1日22時49分発行